

AJOSC's 2017

社会貢献活動年間報告書

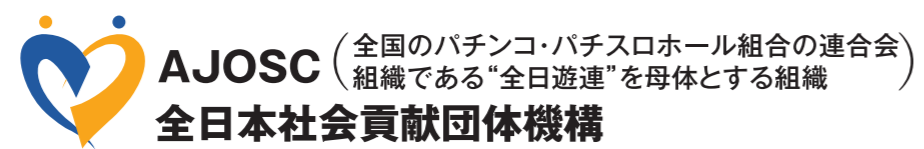


AJOSC's 2017

社会貢献活動年間報告書

全日本社会貢献団体機構

社会貢献活動年間報告書



AJOSC (全国のパチンコ・パチスロホール組合の連合会)
組織である“全日遊連”を母体とする組織

全日本社会貢献団体機構

〒162-0844

東京都新宿区市谷八幡町16市ヶ谷見附ハイム103

TEL 03-5227-1047 FAX 03-5227-1049

<http://www.ajosc.org>

会員:全日本遊技事業協同組合連合会(パチンコ・パチスロ全日遊連)

全日本社会貢献団体機構



AJOSC's
2017

●ロゴマークについて

手をつなぎ、人と人がふれ合い、お互いを思いやる温かい心からの愛がハートとして現れる。シンプルであり、新鮮なイメージを永く心に響かせるデザインであると、平成18年(2006年)5月26日開催の第1回理事会で当機構のロゴマークに決定しました。

AJOSC (All Japan Organization of Social Contribution)
(呼称: アジヨスク)



AJOSC
全日本社会貢献団体機構



- 4 機構の目的と活動
- 6 杉浦正健 会長 ごあいさつ
- 7 阿部恭久 理事長 ごあいさつ
- 8 都府県方面組合による助成事業内定式
- 9 平成29年度 通常総会
- 10 平成29年度 表彰式 助成金贈呈式
- 11 社会貢献フォーラム「地域が支える子どもの未来～スポーツとあそびで育む心と絆～」in札幌

16 助成事業

● 共同助成

- 16 「青森ねぶた祭のパワーで集団移転先の新しいコミュニティづくりを」事業
- 18 「子育て応援団 すこやか2017」事業
- 20 「自然体験を通じた子どもの交流・ふくしまの担い手育成」事業
- 22 「埼玉こども食堂 応援キャンペーン2017」事業
- 24 「音育、食育、木育を通して子供の豊かな成長と地域の未来をつくる」事業
- 26 「こたけ竹育ひろば～子どもと探る小さな町の未来像～」事業
- 28 「益城町よりあいコミュニティ支援プロジェクト」事業
- 30 「熊本地震被災地『モバイル児童館』」事業

● 一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

- 32 「マツヤマお城下リレーマラソン2017」事業
- 34 「子ども向け環境ワークショップ図鑑『ミホンテホン』開発」事業
- 36 「科学を通して地域コミュニケーションを図る手作りの『科学館』」事業
- 38 「スペイン語圏からの在日児童のための副教材『日本の童話・スペイン語版』制作・無償配布」事業
- 40 「第4回高校生劇評グランプリ」事業

● 一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

- 42 「～みんな集まれ世界の子ども～『チャイルドアートフェスティバル』開催」事業
- 44 「中高生と保護者のためのキャリアフェスタ」事業

● 一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

- 46 「青少年の健全育成『住居を喪失した、元非行少年・少女の社会的居場所創出・維持』事業
- 48 「依存症者の家庭で育つ子ども向けプログラム」事業
- 50 「不登校・中退の子どもたちの支援者向けポータルサイト『キズキ不登校・中退ナビ』の構築」事業
- 52 「フードバンク活動を生かした生活困窮世帯の子どもへの学びの場と居場所づくり」事業
- 54 「もしものときに子ども達を救いたい!『子ども&中高生SOSリーフレット制作プロジェクト』」事業
- 56 「生活困窮家庭の児童学習支援『無料学習塾～レインボースクール～』」事業

● 特別助成 熊本地震復興支援事業

- 58 「子どもの笑顔をつくる『移動遊園地』プロジェクトin熊本」事業

● 特別助成 東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業

- 60 「福島県への継続文化支援活動」事業
- 62 「被災地の子ども達の育成プロジェクト」事業
- 64 「避難者交流サロンを市民と避難者の交流サロンへ転換する」事業

● 特命助成

- 66 「ばちんこ依存問題に関する相談および回復支援」事業

68 顕彰事業

● 社会貢献大賞

- 68 京都府遊技業協同組合「公益財団法人 京遊連社会福祉基金創立30周年記念」事業

● 都府県方面部門

- 72 《最優秀賞》大阪府遊技業協同組合 「大遊協 Presents 熊本地震復興応援」事業
- 74 《優秀賞》 埼玉県遊技業協同組合 「子ども食堂に対する運営資金支援」事業
- 76 《優秀賞》 千葉県遊技場協同組合 「地域の安全・安心対策支援」～県内全市区町村に防犯PC配備～事業
- 78 《優秀賞》 兵庫県遊技業協同組合 「2020年東京パラリンピック競技大会に向けた障害者スポーツ応援事業及び恒久的な支援」事業

● 支部組合部門

- 80 《最優秀賞》東京都 八王子3組合(八王子組合・高尾組合・南大沢組合) 「八王子3組合合同『青少年育成支援』」事業
- 82 《優秀賞》 岐阜県 東濃遊技業組合 「地域貢献を目指したAED等導入プロジェクト」事業
- 84 《優秀賞》 長崎県 島原半島遊技場組合 「安全・安心街づくり」事業

● 組合員ホール部門

- 86 《最優秀賞》東京都 株式会社ミリオンインターナショナル 「(株)ミリオンインターナショナルにおける社会貢献活動」事業
- 88 《優秀賞》 山形県 株式会社マル中 「いじめ撲滅企画ちびっこプロレス教室&ステージ並びにチャリティーにここにご祭り2017G.W.及び児童養護施設への支援」事業
- 90 《優秀賞》 長野県 株式会社サンティア 「地球温暖化や水害防止に向けた『サンティアの森づくり』」事業
- 92 《優秀賞》 福岡県 株式会社イクティス 「九州盲導犬協会への盲導犬育成資金の募金・贈呈及び啓蒙活動」事業

● 最終審査ノミネート賞

- 94 最終審査ノミネート賞
- 96 募集と審査の結果

97 社会貢献活動全国データ編

- 107 平成29年社会貢献・社会還元の実施状況調査結果総評
- 108 都府県方面データ
- 159 賛助会員一覧
- 160 全日本社会貢献団体機構 役員
- 161 編集後記

平和で住みよい社会づくりに貢献していくために

20世紀の後半から、企業やNPO、NGOなどを含む各種団体、個人の社会貢献活動が注目されるようになってきました。CSR(Corporate Social Responsibility=企業の社会的責任)、フィランソロピーといった言葉が人口に膾炙し、その価値が社会に広く認知されつつあります。その背景にあるのは、社会全体の持続的発展なくしては、企業も、個人も存在し続けることはできないという認識です。市民一人ひとりが積極的、主体的に社会に参加し、企業や団体がその活動を促進、支援していくことは、文化的で活力ある社会の形成と向上に欠かせない要素です。

全日本社会貢献団体機構は、社会貢献活動が社会を支える極めて重要な活動であるという観点のもと、遊技業界ならびに民間や公的機関などと連携、協力しながら、文化や学術の振興、平和で住みよい社会づくりなどの社会貢献活動の推進、またそれらの広報を目的に、全国のパチンコ・パチスロホール組合の連合会組織である全日本遊技事業協同組合連合会(全日遊連)を母体とし、日本画家・故平山郁夫氏を名誉会長に、元文部科学大臣・遠山敦子氏を初代会長に、2005年(平成17年)12月発足しました。

全日本遊技事業協同組合連合会の傘下にある都府県方面遊技業協同組合、支部組合そして組合員ホールは、これまでも全国の各地域で、様々な社会貢献・社会還元活動に取り組んできました。その活動は、社会福祉や青少年育成関連団体への援助や寄付をはじめ、授産施設の商品購入、町の清掃活動、子どもを犯罪や事故から守る活動、地元行事への参加や支援、老人ホームの慰問など、多岐にわたっています。当機構は、これらの活動の継続発展を支援するとともに、それらを集約し、未来に向かって一つの力として積み上げていくためのネットワークの結節点として機能しています。

日本の社会において、今後、ますます社会貢献の重要性が増していくことは間違いのないことと思います。当機構では、子どもの健全育成支援や東日本大震災復興支援の活動への助成事業、社会貢献活動に真摯に取り組んでいる会員の顕彰事業、社会貢献のあり方や現状を考える社会貢献フォーラム、全国で会員が実施している社会貢献活動の内容や規模を紹介する報告書の作成などを通じ、21世紀の社会や時代の要請に応えるような、広い視野と深い洞察にもとづいた夢と実のある社会貢献を展開して参りたいと考えております。

全日本社会貢献団体機構の主な事業内容

助成事業

今日の社会に最も必要とされる研究や活動に対する助成事業は、当機構の根幹事業です。毎年、子どもの健やかな成長を願う事業、東日本大震災の被災者を元気づける事業などに対し、助成を行っています。

顕彰事業

会員が全国各地で実施している各種の社会貢献活動のなかから、社会的有用性、継続性、波及効果などを基準に、とくに優れた活動を選定して顕彰しています。年間で最も優れた活動には、「社会貢献大賞」が授与されます。

社会貢献フォーラムの実施

時代や社会の要請に合わせ、社会貢献や地域貢献の方向やあり方も変化していきます。どのような活動があり、どのような課題を抱えているのかなど、社会貢献の現状と可能性を考えるフォーラムを企画し、実施しています。

活動報告書の作成・配布

助成事業と顕彰事業の詳細な内容報告のほか全国で会員が実施している社会貢献活動の内容、拠出金額などをデータ化した報告書を毎年作成し、関係機関や全国の図書館などに配布し、会員による社会貢献活動の理解向上に努めています。

よりよい社会の構築に欠かせない社会貢献活動

全日本社会貢献団体機構 会長

杉浦正健



全日本社会貢献団体機構は、お陰様を持ちまして設立12周年を迎えることができました。この間、学術・文化の振興、命を大切に研究、子どもの健全育成に関する活動、東日本大震災の復興支援事業などに対する助成金の贈呈、また全日本遊技事業協同組合連合会傘下の会員が全国で展開している優れた社会貢献活動の顕彰、さらには社会貢献の現状と可能性を考えるフォーラムの実施、上記事業などをまとめた年間報告書の作成・配布などを中心に活動を続けてまいりました。

なかでも今日の社会に最も必要とされる事業に助成する活動は、当機構の根幹であり、中心的な事業です。今年も未曾有の地震や津波、水害に見舞われた東北・九州への災害復興支援を継続するとともに、子どもの健全育成支援の事業を実施している団体に助成いたしました。こうした活動に対し、各方面からの評価と期待が高まってきていることを実感している次第です。

2018年は、2月・3月に韓国・平昌での冬季オリンピック・パラリンピック、6月・7月にはサッカーのワールドカップ・ロシア大会と、国際的な一大イベントが行われました。さらに2020年の東京オリンピック・パラリンピックも間近に迫ってまいりました。今やこうしたスポーツ大会には、ボランティアが欠かせない存在です。また、近年顕著になりつつある大規模な自然災害の復旧・復興も、ボランティアなしには考えられないようになりました。そうしたなかで、NPO法人などの団体がそれぞれの地域で取り組んでいる社会貢献活動やボランティア活動は、今後ますますその重要性を増していくことは間違いありません。

いまや社会貢献活動は、共生社会、助け合い社会を実現するためにはなくてはならないインフラのようなものです。社会を構成する個人も、企業も、それぞれ責任をもって、各自ができることに取り組むことが求められています。当機構の活動が、常に時代のニーズに的確に対応し、よりよい社会の構築に少しでも貢献・寄与できるよう、決意を新たに、精いっぱい努力していきたいと考えております。皆様のより一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

社会から評価される「大衆娯楽」を目指して

全日本社会貢献団体機構 理事長

阿部恭久



平素から全日本社会貢献団体機構の諸活動に対し、ご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。昨年度も都府県方面組合との共同助成を含む、一般助成「子どもの健やかな成長を願う事業」、特別助成「熊本地震復興支援事業」、「東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業」、特命助成を合わせ、計26団体が行う社会貢献活動に対して助成をさせていただきました。様々な分野、地域で我々の助成が有効に活用されているものと確信しております。

また、遊技業界の仲間たちが各地で実施、展開している社会貢献活動も、様々に「深化」と「進化」を遂げているように見えます。言うまでもなく、遊技業はファンの皆様、地域の方々のご愛顧とご理解があってこそ成立するものである以上、今後も都府県方面組合、支部組合、組合員ホールと、それぞれのレベルで地道な社会貢献活動、地域貢献活動を継続していただきたいと思います。そうした仲間たちを今年もまた顕彰することができましたことをうれしく感じています。

当機構の母体である全日本遊技事業協同組合連合会では、一昨年末のいわゆる「IR推進法案」の成立以来、公営ギャンブルとともにパチンコ・パチスロ遊技に関する依存問題について多くの対応を迫られております。全日遊連では2006年から10年以上にわたってパチンコ問題に関する電話相談を受け付ける「認定NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク」の活動を支援していますが、当機構としても特命助成という形で支援を継続しています。業界をあげて、今後もこの課題に真摯に取り組んでいかななくてはなりません。

業界にとって逆風と思われる事態が続いているという見方がある一方、こうした事態をむしろパチンコ・パチスロが健全な「大衆娯楽」であることを社会に向けて改めて発信するいい機会と捉える考え方もあります。その中で当機構が行っている社会貢献活動を実施する団体などへの助成、あるいは遊技業界の皆様が行っている社会貢献活動や地域貢献活動は、必ずや社会から評価される一助となるに違いありません。それを応援しながら社会にアピールすることを使命として、今後も当機構の活動を展開してまいります。

平成29年度助成事業内定式

全日本社会貢献団体機構が全日本遊技事業協同組合連合会を母体とする組織であることを、助成団体へより明確に理解していただくため、当機構が開催する助成金贈呈式の前に助成団体の所在地の各都府県方面組合の主催で内定式を実施し内定証を贈呈しています。

札幌方面遊技事業協同組合



やまびこ座・こぐま座 東日本大震災復興支援プロジェクト

函館方面遊技業協同組合



一般財団法人 北海道国際交流センター

青森県遊技業協同組合



NPO法人 青森ジャワめざ隊

山形県遊技業協同組合



子育て応援団実行委員会

福島県遊技業協同組合連合会



NPO法人 寺子屋方丈舎

東京都遊技業協同組合



一般社団法人 未来キャンパス、NPO法人 地球ことば村・世界言語博物館、NPO法人 日本学校演劇教育会、NPO法人 キズキ、公益社団法人 誕生学協会、NPO法人 green bird

埼玉県遊技業協同組合



埼玉こども食堂 実行委員会

千葉県遊技業協同組合



柏の葉サイエンスエデュケーションラボ、東日本大震災復興支援 松戸・東北交流プロジェクト

神奈川県遊技場協同組合



チャイルドアートフェスティバル実行委員会、一般社団法人 やまと災害ボランティアネットワーク

山梨県遊技業協同組合



認定NPO法人 フードバンク山梨

岐阜県遊技業協同組合



NPO法人 飛騨高山わらべうたの会

大阪府遊技業協同組合



NPO法人 チェンジングライフ

愛媛県遊技業協同組合



マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会

福岡県遊技業協同組合



NPO法人 リトルバンブー、NPO法人 チャルカ・ジャパン

熊本県遊技業協同組合



NPO法人 くまもとスローワーク・スクール

宮崎県遊技業協同組合



NPO法人 家庭・青少年教育ネットワーク

沖縄県遊技業協同組合



日本のお母さんに花束をプロジェクト

全日本社会貢献団体機構 平成29年度 通常総会

平成29年(2017年)5月19日、第一ホテル東京で通常総会を開催しました。総会は、杉浦正健会長 のあいさつで始まり、平成28年度の事業・決算報告、平成29年度の事業・予算の決定、「第12回 社会貢献大賞」の審査結果と「平成29年度助成事業」の選考結果などが報告されました。



第12回社会貢献大賞 表彰式／ 平成29年度 助成金贈呈式

平成29年(2017年)7月20日、第一ホテル東京で「第12回社会貢献大賞」表彰式を開催しました。「社会貢献大賞」に選ばれた神奈川県遊技場協同組合のほか、都府県方面部門、支部組合部門、組合員ホール部門の各最優秀賞及び優秀賞が杉浦正健会長から授与されました。また、表彰式終了後、「平成29年度 助成金」贈呈式を開催し、助成団体に阿部恭久理事長から「助成認定証」が手交されました。

第12回社会貢献大賞の授与



神奈川県遊技場協同組合
「心臓移植手術を要する 県内在住の2人の幼児への 支援活動」事業

都府県方面部門 最優秀賞の授与



大阪府遊技業協同組合
「『青バトが見まもる大阪のまちづくり』支援」事業

特命助成・助成認定証の手交



認定NPO法人 リカバリーサポート・ネットワーク
「ばちんこ依存問題に関する相談および回復支援」事業

会場入り口に展示された平成28年度の助成団体活動成果物



「第12回社会貢献大賞表彰式・平成29年度助成金贈呈式」の様子は、北海道新聞をはじめとする39の新聞社の朝刊に掲載されました。また業界誌は14社が取材に訪れました。

記事を掲載した地方新聞社(39社)

北海道新聞、東奥日報、秋田魁新報、岩手日報、山形新聞、河北新報、福島民報、福島民友、茨城新聞、下野新聞、上毛新聞、埼玉新聞、千葉日報、神奈川新聞、山梨日日新聞、新潟日報、岐阜新聞、伊勢新聞、北日本新聞、福井新聞、京都新聞、奈良新聞、産経大阪、神戸新聞、山陽新聞、中国新聞、山陰中央新報、みなと山口合同新聞、四国新聞、愛媛新聞、高知新聞、佐賀新聞、長崎新聞、大分合同新聞、熊本日日新聞、宮崎日日新聞、南日本新聞、沖縄タイムス、琉球新報

平成29年11月12日(日)／札幌市・道新ホール

地域が支える子どもの未来 ～スポーツとあそびで育む心と絆～

平成29年度の「社会貢献フォーラム」は、北海道札幌市で開催された。第1部では、プロボクシング元WBC世界フライ級チャンピオンで、現在はタレントとしても活躍する内藤大助さんの講演、第2部では北海道内で行われている様々な社会貢献活動の事例を見ながら、子どもの成長や地域の絆の醸成において社会貢献が果たす役割について、パネリストが意見を発表した。会場には約300名の市民が詰めかけ、熱心に耳を傾けていた。フォーラム終了後には、内藤大助さんのサイン入り著書やDVDが当たる抽選会も行われた。

主催：
全日本社会貢献団体機構、北海道新聞社、全国地方新聞社連合会

後援：
北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会、NHK札幌放送局、北海道文化放送、共同通信社、全日本遊技事業協同組合連合会、札幌方面遊技事業協同組合



第一部 講演

スポーツが変えた心

内藤大助さん(タレント、元プロボクサー)

僕は高校を卒業するまで、ここ北海道の虻田郡豊浦町にいました。高校3年生のときに洞爺湖温泉のホテルに就職が内定していたのですが、そこでのアルバイト中の態度が悪かったせいで入社式の1週間前に内定取り消しになりました。僕は母子家庭で、母に育てられていたわけですが、家を追い出されるように、卒業後に上京しました。

母親は厳しい人でした。子どもは親にほめられたいという気持ちがあるものですが、僕の母は子どもをほめることがしつけに悪いと考えている人で、一度もほめられたことがなかった。プロボクサーになり、全日本新人王トーナメントで優勝して新聞に名前が掲載されても何も言わない。29歳11ヵ月で日本チャンピオンになったときも一言もない。それでしびれを

切らし、「何か言うことねえか?」と言ったら、「何かあったのか?」と返してくる。「俺、とうとう日本で一番になった。そんなときくらいほめることができねえのか」と、生まれて初めて文句を言いました。すると母は、「ボクシングには、その上があるんじゃないの?」と言う。世界チャンピオンのことを言っているのですが、そのときに「ふざけんな。世界がどういところか知ってるのか?」と言り返したら、「バカもん、そのくらい人間でないと人をほめるなんてできないんだ」と、逆に怒鳴り返されました。

僕がボクシングを始めたのは二十歳のときですが、その動機には、中学生のときに母子家庭や貧乏をネタにひどいいじめを受けた体験があります。そのせいで、大人になって

も、いじめっ子が怖かった。ボクシングを覚えて強くなったら、その恐怖から逃れることができると思い、近所のボクシングジムに通い始めました。

でも、いざボクシングをやってみると、ボクシングは決して暴力ではなく、ルールのあるれっきとしたスポーツだということがわかった。毎日、トレーニングを続けたら、強くなっていく。何が強くなるかと言えば、腕力ではない。心なんです。ボクシングを始めて1年過ぎた頃に、今だったらもういじめられない、いじめっ子に会っても「いい加減してくれ」と言えると思った。そう思えたら、フッと気が楽になった。心次第で人間は本当に変わることができるということを、僕はボクシングから学んだ。だから、ボクシングには感謝しかない。

やはり一生懸命続けるということが大事です。一生懸命がんばる人には、人がついてくる。こんな僕でも、きれいな奥さんと結婚できた。それは僕が一生懸命ボクシングを続け

ていたからだと思う。最初の世界戦は34秒でKO負けをして、それで日本人の恥とまでいわれた。それでもがんばって日本チャンピオンになったが、二度目の世界挑戦も勝てなかった。奥さんにも「これで引退する」と言ったが、セブ島と一緒にトレーニングしていたフィリピン人ボクサーたちの言葉に励まされ、再びボクシングを続けることに。そして、三度目の世界挑戦でとうとう世界チャンピオンになった。

何でもそうですが、つらい、つらいと思ってやっていると続かないし、上達もしない。どうせやるなら楽しくやりなさいと言いたい。確かに練習やトレーニングはつらい。でも、それも気持ち次第。発想を変えて、楽しみながら続けることが大事です。「毎日、楽しい、楽しいと思っていたら、楽しいことが来る」と、奥さんからそう教わった。素直に楽しい、うれしいと思ってやるのが大切。僕は何をやるにも、そう思うように心がけています。



第二部 パネルディスカッション

地域が支える子どもの未来～スポーツとあそびで育む心と絆

中野さん 地域社会を支える、様々な社会貢献活動が道内でも行われていますが、その力や可能性について、みなさんと一緒に考えていきたいです。まず初めに、北海道教育大学岩見沢校の学生のみなさんから、それぞれの活動について紹介していただきます。

辻本さん 私は総合型地域スポーツクラブ「スポーツライフデザイン岩見沢」を運営しています。その1つが、ボールを使って子どもたちの創造力を育むことを目的とした運動プログラム「バルシューレ」です。多様な運動を経験すること、子どもの発達に即していること、楽しいものであること、潜在的な学びに通じていることの4点を基本原理としています。楽しくないとも続かないと思うので、子どもにとって動くことが楽しいという状況を作り出すよう、指導者は工

夫をし、ボールゲーム学習ではゲームを最優先し、ゲーム中には指導的な介入をしません。子どもたちが楽しみながら運動を行うことで、「学習している」という意識を持つことなく、遊んでいるうちに基本となる技能や能力を身に付けることが可能となります。

片岡さん 続いて、「リトスシューレ」を説明をします。音楽の基礎要素であるリズムや歌うことを中心に取り上げ、遊びの中で感性を育むことを目的としています。先月実施した活動では『崖の上のポニョ』の主題歌に合わせ、カップと手拍子と歌を使ってリズム遊びをしました。スポーツや言葉など、リズムは音楽以外のことともつながっていて、そこから様々なものが生まれる可能性があると考えています。知識にこだわらず、感じたことを体を使って表現することを

出席者プロフィール



内藤大助さん
タレント・元プロボクサー

1974年、北海道虻田郡豊浦町生まれ。2004年、日本王座獲得。07年、3度目の挑戦でWBC世界フライ級チャンピオン獲得。同年、初防衛戦で亀田大毅を倒し、因縁の対決として話題となる。11年、現役引退。現在はタレントとして活躍中。



山本理人さん
北海道教育大学岩見沢校教授

1962年、東京都生まれ。東京学芸大学大学院修了。専門はスポーツ教育学。生涯学習社会におけるスポーツ学習支援のあり方について研究を行っている。2015年より「冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会」委員などを務める。



合田康広さん
札幌方面遊技事業協同組合理事長

1965年、北海道弟子屈町生まれ。2011年、(株)アイルテック代表取締役就任。16年、札幌方面遊技事業協同組合理事長就任。社会貢献の重要性を業界内に浸透させ、スポーツ支援を通じた青少年の健全育成など、様々な社会貢献活動を推進。



荒木太郎さん
北海道新聞社事業局事業センター部長

1963年、札幌市出身。早稲田大学政治経済学部卒業。87年、北海道新聞社入社。網走支局、乗山支局、旭川報道部、大阪報道部、東京報道センターなどで勤務。運動部では長野オリンピックやノルディックスキー世界選手権などの取材を担当。



コーディネーター
中野涼子さん
北海道文化放送アナウンサー

神奈川県出身。2010年、UHB入社。スポーツ番組のMCや、北海道マラソンでUHB女性アナウンサー初のバイクリポートを務めるなど、スポーツ取材を中心に担当。趣味はクラシックバレエ、ジャズダンス。フルマラソンの完走経験も持つ。

北海道教育大学のみなさん

辻本智也さん
北海道教育大学岩見沢校大学院 教育学研究科

片岡日菜子さん
北海道教育大学岩見沢校
芸術・スポーツ文化科学科 音楽文化専攻

藤原知世さん/小林鈴奈さん
北海道教育大学岩見沢校
芸術・スポーツ文化科学科 音楽文化専攻

大切にしています。

藤原さん／小林さん 「マルシューレ」の活動を紹介します。マルシューレは幼稚園児から小学生までの子どもの遊びを中心とした造形プログラムです。美術とあそび、美的体験、自分で作ることの3つを基本原理として、子どもたちが遊びにのめり込む中で、感性が自然に育まれるように工夫されています。マルシューレでは、子どもたちがセロファンやペンをを使ってビニール袋に自由に飾り付けをしたり、木片やペットボトルのキャップを使って造形活動を楽しんだり、絵の具で作った色水を画用紙に好きなように垂らしたりして遊んでいます。これからも遊びを通して美術を好きになってもらえるように取り組んでいきたいと思っています。

中野さん 次に、札幌方面遊技事業協同組合理事長の合田康弘さんから、組合や組合傘下の法人、パチンコホールなどが行っている社会貢献活動を紹介していただきます。

合田さん 今回のテーマでもある少年とスポーツに関するものとしては、当組合傘下の法人がNPO法人を設立し、少年野球専門の野球場を建設して少年たちに無料で貸し出し、さらに全国規模の野球大会を毎年開催して、今年24回目を迎えるというものがあります。この他にも道内のホールの取り組みとして、剣道、バレーボール、バスケットボール、車いすサッカーなどの支援をしております。また、岩見沢地区の総合型地域スポーツクラブの設立に際し、資金支援をさせていただきました。

今年は8月以降に北海道内に次々と台風が襲来し、死者、行方不明者が出る事態となりましたが、被災者支援として、北海道新聞社会福祉振興基金を通じて北海道災害義援金募集委員会に義援金200万円を寄付させていただきました。当組合の地区単位の組合では、災害時に

パチンコホールの駐車場を被災者支援や復旧活動などに活用していただくべく、関係自治体と災害時の支援協力に関する協定を締結しているところもあります。

社会福祉に関する支援としては、パチンコホールが行うファン感謝デーの売上金の一部、約230万円を北海道新聞社会福祉振興基金に寄贈させていただきました。さらにプロ・アマゴルファー参加によるチャリティゴルフコンペを企画し、その売上金を北海道移植医療推進協議会に寄贈しています。また、冬の札幌雪祭り会場に臓器移植啓蒙活動のための氷像を出展し、臓器提供意思カード登録の働き掛けをしています。

単に資金提供だけでなく、マンパワーを地域のために役立てるよう、例えば遊技業界団体共同で「すすきのごみ拾いボランティア活動」を実施するなど、日々、活動に努めています。

中野さん 続きまして、北海道新聞社の社会貢献活動の事例を荒木さんから紹介していただきます。

荒木さん 北海道マラソンを始め、北海道新聞社では年間約250件のスポーツ事業を共催、主催していますが、創業130周年、創刊75周年の今年、新たに「スポーツ応援宣言」を掲げました。スポーツには多くの人を巻き込んで地域に一体感を作り、元気づける不思議な力があると思います。この宣言にはスポーツの持つ力を使って、北海道を盛り上げていきたいという狙いがあります。

また毎年、スポーツ界で活躍した人に北海道新聞スポーツ賞を贈っていますが、従来の枠とは別に、将来有望な若手アスリートや長年指導に就かれている方々をたたえようと、新たに奨励賞を設けました。障がい者スポーツの振興にも力を入れ、バンクーバーパラリンピック・パラアイスホッケー



AJOSCの活動資料を読む参加者

銀メダリストの永瀬充さんに北海道新聞バラスポーツアドバイザーになっていただきました。

スポーツ以外では、1965年に北海道新聞社会福祉振興基金を設立し、各種の助成事業、高校生などへの奨学金、社会福祉法人への低利貸付事業などを行っていますが、この基金には札幌方面遊技事業協同組合をはじめ多くの個人、団体などから毎年、寄付をいただいています。

中野さん 地域が支える子どもの未来についても考えて行きたいのですが、北海道教育大学岩見沢校で行われている地域貢献を山本教授から報告してください。

山本さん 我々の岩見沢校は教員養成系大学でありながら、スポーツ、音楽、美術に特化して地域の人材育成をしようという考えのもとに再編され、運営を始めています。我々が実施している「あそびプロジェクト」は、その対象が地域の子供たち中心ですが、大人も含め、誰もがスポーツや芸術などを通してしっかり遊べる社会を作ることが目的です。大学の資源を地域に開放しながら、そういう遊びの機会を増やしていきたい。ポイントとして、地域住民の自立的な文化活動の支援、地域文化の創造・発展・継承、地域の活性化(まちづくり)の3点がありますが、音楽や美術やスポーツを切り口に、学生を中心に地域の人たちと連携しながら様々な活動をしていく中で、最終的には芸術やスポーツに関係ない地域住民の方にも満足していただけるような地域になってもらうことが願いです。

中野さん 最後に今後の可能性も含めて、お一人ずつメッセージをいただきたいと思っています。

山本さん 地域貢献や地域連携というと、どうしてもイベント型や教室型のものが多くなりがちですが、そういうものが地域で芽を吹き、本当に息長く育つための環境づくりをみ

なさんで支えていこうな社会貢献や地域貢献のあり方が今後、重要だと思います。

合田さん 私どもができる範囲で、後方支援として今後も少年のスポーツ大会などの共催なども含め、色々とお手伝いできればと考えています。将来的に、その少年たちがトップアスリートとなって世界に羽ばたいたり、その道を極めるような子どもたちが出てくるのを楽しみにして、今後も支援を続けていきたいと考えています。

荒木さん 数年前に千歳の少年院取材しましたが、ここでは少年たちが定期的にトレーニングに取り組んでいます。そこを紹介してくれた大学の先生によれば、それによって物事をやり遂げる大切さ、達成感、努力することで自分を磨くことを学べるということで、彼らが少年院を出た後で、色々な試練を乗り越えるメンタル的な強さも養うことができると話していました。やはり体と心の両方が大事だと、今その話を思い出しました。

内藤さん 今日は本当にいいお話が聞けました。スポーツをやっている思ったのは、トレーニングは大変で、つらいこともたくさんありますが、それを乗り越えるには、やはり楽しくやるのが一番だということです。プラス思考、ポジティブで続けてほしいと思います。

中野さん 一人でも多くの人が社会貢献活動に参加して、地域を支えるきっかけにいただければと思います。本日はありがとうございました。

青少年の健全育成は我々の責務 社会貢献の継続で地域に関わる

札幌方面遊技事業協同組合理事長 合田康弘さん

今回、私ども組合員のみなさんが幅広く社会貢献活動に参加をしていることを再認識し、業界としても喜ばしい限りです。北海道教育大学岩見沢校の取り組みも非常に有意義なものだと感じました。青少年の健全育成の支援はあくまでも一つの分野ですが、我々も地域の一員として大きな責任を持っておりますので、今後も継続したいと思っています。地域と密接に関わりながら、社会貢献として収益の一部を還元していることを、少しずつですがパチンコをされない方にも広めていけたらと考えています。



共同助成(青森県遊技業協同組合)

「青森ねぶた祭のパワーで集団移転先の新しいコミュニティづくりを」事業

新しいコミュニティづくりが本格化する被災地で郷土の誇りとなる祭りを育成

心が騒ぎ、体が騒ぎ、居ても立ってもいられなくなる状態を、津軽地方の方言で「じゃわめぐ」という。「東日本大震災の被災地のために何かできることはないのか」と、郷土の祭り「ねぶた」を愛する人たちが「じゃわめいだ」。ねぶたが被災地で運行され、被災者の心を慰めた。そして今、それは新たなコミュニティの拠り所となろうとしている。



被災地の夏祭りでもねぶたを運行



総勢60名以上、青森から大型バスやトラックで駆けつけた

被災地に元気を届けたいという思いで始まったねぶたを心から愛する有志によるねぶた運行

「ねぶた」に様々な形で関わってきた人々を中心となり、2011年に結成された「NPO法人青森じゃわめぎ隊」では、大型ねぶたの運行団体に呼び掛け、運行に必要な機材を借り集め、ボランティアや寄付を募り、震度5弱、8~10mの津波、大規模火災に見舞われ、死者・行方不明者数825名(2018年2月7日現在)という甚大な被害の出た岩手県山田町で2011年9月24日、「まるごと青森」ねぶた運行を行った。

総勢200名以上、バス6台、山車や機材などを乗せたトラック6台というねぶたの大遠征はメディアでも大きく取り上げられ、その年の11月には福島県新地町からも呼ばれ、「復興産業祭り」のメインゲストとしての運行も行った。翌年8月、「青森じゃわめぎ隊」は宮城県東松島市の矢本

運動公園仮設住宅自治会から依頼を受け、夏祭りに出向いた。ここは、東松島市で最大規模の仮設住宅であり、それまで様々なイベントを行っても、住民はなかなか外に出てきてくれなかったという。しかし、ねぶたの熱気は、住民の閉ざされた心のドアを開けるのに十分だった。

以来、「青森じゃわめぎ隊」による東松島市でのねぶた運行は続いた。「ねぶたは山車、お囃子、山車の周りで踊るハネが三位一体となったものですが、青森のねぶたが東松島市の人々に受け入れられたのは、こうした祭りに「じゃわめぐ」血が、共通して流れているからだ」と、理事長の工藤信孝さんは話す。

運行に使う山車は毎年、実際に青森ねぶたで使われる小型のものを譲ってもらい、太鼓や電飾、台車などの機材とともにトラックに積み込んで運び、現地で組み立てて使うという。

まちづくりが本格化する東松島市で新たな地域の祭りとして期待されるねぶた

AJOSCと青森県遊技業協同組合の助成を受け、2017年8月19日にも東松島市でねぶた運行が行われた。復興が続く東松島市では仮設住宅からの移転先が誕生しており、中でもJR東矢本駅北側に整備されたあおい地区には580戸、約1,800人が移転することになっている。

「青森じゃわめぎ隊」では2014年から従来の矢本運動公園仮設住宅に加え、入居が始まったあおい地区での運行を行っていたが、昨年は新たなコミュニティづくりが本格的にスタートしたあおい地区の夏祭りのメインイベントとしての運行だった。

「大型バスとトラック2台で早朝、青森を出発して、昼過ぎに現地に到着。そこから山車や太鼓を組み立て、15時過ぎからねぶた囃子の模範演奏、ハネト演奏、あおい地区のみなさんの太鼓体験、ハネト体験、子どもたちを対象にした団扇コンテストなどを行い、18時頃から約2時間、あおい地区のメインストリートを約2kmにわたってねぶた

の運行を行いました」と、工藤さん。青森からの参加者に加え、仙台や東京などからも約20名が応援に駆け付け、60名を超す参加者になった。今回は地元の「大曲浜獅子舞保存会」にねぶたで使用される横笛を寄贈し、お囃子を練習してもらい、実際に囃子方として参加してもらったという。

「これからは『あおい地区のねぶた』になっていけるよう、少しずつお手伝いをしていきたいと思っています。将来的に祭りのゲストとして招待していただけるようになることが夢です」と、工藤さん。準備段階からの労力や活動資金などの問題があるが、今後も東松島市との交流を継続していきたいと抱負を語った。

青森県遊技業協同組合より

被災地を元気づける活動やコミュニティ活性化にねぶたが役立っていることを誇りに思います。大変な苦労があると思いますが、継続的な活動を期待しています。



弁慶をモチーフにしたAJOSCのロゴが入ったねぶた



ねぶたの運行で被災地の人々と一緒に盛り上がる

助成団体: 特定非営利活動法人 青森じゃわめぎ隊

<http://www.jawamegitai.or.jp>



2011年から計14回、復興支援のねぶた運行を行ってきました

「日本一のまちづくり」を目指し、新しい故郷を作り出そうとしているあおい地区のみなさんから、「今年も待っていたよ。ありがとう」と声をかけていただけることが最大のやりがいです。活動資金の確保などの問題があり、今後どういう形になるか不透明ですが、被災地の移り変わりをこの目で見てきた場所ですので、何かしらの形で交流を続けていきたいと思っています。

NPO法人 青森じゃわめぎ隊
理事長 工藤信孝さん

共同助成(山形県遊技業協同組合)

「子育て応援団 すこやか2017」事業

地域社会全体で子育てを支援する機運を盛り上げる 参加型の子育て応援イベントを開催

「子育て応援団」は、少子化が進む山形県で社会全体で子育てをサポートしようという取り組みだ。毎年、親子で楽しみながら様々な子育て情報が得られる、子育て応援イベントを開催している。2007年にスタートして11回目となるこの取り組みは広く県民に定着しており、昨年は過去最高の来場者を記録した。



「子育て応援団 すこやか2017」を告知するチラシ



来場者は過去最高の2万6,131人を記録

障がいのある子どもと親が参加できる 子育て応援イベントを実現

子育て応援団実行委員会は、山形放送と山形新聞を中心に山形県(子育て支援課)や山形市(こども保育課)、医師会、歯科医師会、薬剤師会などで組織され、毎年、山形国際交流プラザを会場に「子育て応援団 すこやか」イベントを開催している。ステージイベントのほか、小児科医や歯科医、助産師による無料の健康相談、先輩ママによる育児アドバイス、自治体や団体による取り組みや企業の子育て支援商品の紹介、保育士を目指す地元の短大生による手作り遊具の遊び場など、多彩なコンテンツで構成され、年に一度、親子で参加して様々な子育て情報が得られる場となっている。

11回目となる「子育て応援団 すこやか2017」は、6月24～25日に開催された。母親たちにも大人気の「うたのお

にいさん」横山だいすけさんのコンサートや、アンパンマンのショーなどもあり、2日間の来場者は過去最高の2万6,131人を記録した。さらに今回は従来のコンテンツに加えて、障がいのある子どもたちも一緒に参加して地域の伝統芸能を体験するワークショップが開催され、イベント初となるこの取り組みにAJOSCの助成が活用された。実行委員会の山形放送の大久保円さんは、「子育て応援団の取り組みとして新たな一歩を踏み出した」と話す。

「若い親たちの育児支援に加えて、障がいを持つ子どもや親にも参加してもらおうという、これまでできなかった取り組みを実現することができました。地域の伝統文化に触れながら障がいのある子どもたちと交流する機会をつくれたことは、これからの時代を見据えて心温かい子どもを育もうえで意義のある取り組みになったと思います」

地域伝統の花笠踊り体験を通して 広がる交流の輪

伝統芸能の体験ワークショップには、山形市・県肢体不自由児者父母の会の協力を得て呼びかけた50人が参加し、障がいのある子どももいない子どもと一緒に山形伝統の花笠踊りと和太鼓を体験した。指導にあたった日本舞踊家の花柳優美津さんたちは、車イスの子どもや重い障がいのある子どもも参加できるように踊り方や小道具を工夫し、スタッフも優しく寄り添いながら、みんなで一緒に踊る楽しさを共有した。また、会場内には障がいのある人たちの自立を支援する団体のブースが設けられ、バザーを実施した。

イベント会場で毎回行っている出口アンケートでは、障がいのある子どもを持つ母親からこんな声が寄せられたという。「子育て応援団はこれまで私たちには関係のないイベントだと思っていましたが、私たちも参加できるんですね」「障がいを持つ子どもにはいつもつきっきりです。でもここでは少しだけ距離をおいて自分の子どもを見守る機会をいただきました」。参加者のこうした声や表情に触れ、思い

を新たにしたという大久保さん。

「今回のイベントは、心の優しさや思いやりの大切さを感じる貴重な機会となりました。これは、障がいの有無に関わらず誰もが暮らしやすい社会をつくろうというユニバーサルデザインの考え方の第一歩だと思います。今後もこの取り組みはぜひ続けていきたいです」

このイベントの様子は山形放送のテレビやラジオ、山形新聞の紙面で紹介された。子どもたちが交流する様子は、分け隔てなく子どもを社会全体で見守っていこうというメッセージとして、広く県民の心に届けられた。

山形県遊技業協同組合より

障がいのある子どもたちが参加した伝統芸能ワークショップや障がい者の社会参加を支援する団体のバザー出店などに賛同し助成しました。今後も子どもたちの交流体験を通して、優しさや思いやりを育ててもらいたいと思います。



多数の子どもたちが参加した伝統芸能の体験ワークショップ



2017年7月26日付けの山形新聞に掲載された採録記事

助成団体: 子育て応援団実行委員会



誰もが安心して子育てができる社会を目指して

子どもは未来への大きな期待そのものです。活動11年目にあたり、私どもの取り組みに深い理解と極めて大切な助成をいただき、心より感謝いたします。おかげさまで、障がいを持つ子どもと親御さんにも参加していただき、イベントとして新たなメッセージを発信することができました。今回の成果を踏まえ、次年度も同様の取り組みを続けてまいります。

山形放送 営業局 営業戦略部
統括部長 大久保 円さん

共同助成(福島県遊技業協同組合連合会)

「自然体験を通じた子どもの交流・ふくしまの担い手育成」事業

外遊びができない状況の子どもを含め自由に遊べて主体的に参加できる自然体験を提供

東日本大震災や原発事故の影響で外遊びが制限される中、福島県内で自由に自然体験ができる場所が西会津町。その地で、自然の中で思い切り羽を伸ばし、子どもたちに仲間づくりや共同生活の楽しさを提供しようと取り組んでいる団体が、子どもたちの自主性を重んじる「自遊学キャンプ」を実施した。



西会津町近辺でキャンプを開催



遊ぶだけでなく自主性も育むプログラムを実施

非日常的な環境の中での自然体験を通じて仲間づくりや共同活動の楽しさを体験

「学校に行く子も行かない子も、同じように認められる社会の実現」をミッションとして、意欲的に社会に参加できる大人へと成長することを支援する目的で、1999年に福島県会津若松市で任意団体として設立し、2001年、NPO法人化された「NPO法人寺子屋方丈舎」。現在、フリースクール事業、環境教育事業、放課後居場所事業、通信制高校事業、子ども食堂事業などを行っているが、環境教育事業の一環として、2017年度にAJOSCと福島県遊技業協同組合連合会の共同助成を受け、「自遊学キャンプ」を実施した。

「このキャンプ自体は2012年から実施しているものですが、東日本大震災と福島第一原発の事故を受け、福島県内では自然体験ができる場所が限られるようになりました。

可能な場所の一つが西会津町近辺です。また、ここ数年、いじめや貧困問題などを含め、学校内外の課題が目立ってきました。それによって、子どもたちはかなりのストレスを感じています。自遊学キャンプを通じて子どもたちに思い切り自然体験してもらいながら、非日常的な環境の中で学校外での仲間づくりや共同で活動することの楽しさを味わってほしいという思いで、この事業を続けています」

この事業の目的について、寺子屋方丈舎の理事で自遊学キャンプを担当する蓮沼周平さんは、そう話す。2017年度は7月から3月にかけて、2泊3日5回、3泊4日8回の合計13回、にしあいづ自遊楽校(旧西会津町奥川保育所)を会場に実施され、3~4年生の小学生を中心に278名の参加者があった。参加者はいわき市や郡山市に住む子どもたちも多く、中には大震災や原発事故による被災者や避難者も含まれているという。

ミーティング、遊び、感想の共有を通じて子どもたちに主体性や共生感覚を育む

自遊学キャンプは宿泊型の自然体験プログラムだが、具体的には、夏は山登りや川遊び、秋は自然素材を使った工作や農業体験、冬は雪遊びなどの地域資源を利用した遊びなどを行うもので、料理などの日常生活も含め、参加した子どもたちがみんなで相談しながら主体的に取り組むことになっている。

まず、「子どもミーティング」があり、そこでやりたい遊びについて意見を出し合い、それをもとに子どもたち同士で遊びの計画を立てる。その後、決めた遊びを協力しながら実行するが、変更が必要なときは、また意見を出し合いながら変えることもできる。さらに、遊びの中で上手くいったこと、ダメだったことなど、お互いの気持ちを出し合う「ふりかえり感想シェア」がある。自分の気持ちを伝え、相談することで、自然なかたちで子ども同士のコミュニケーションが活発に行われ、友だちがしやすい雰囲気が出来上がっていくという。

募集チラシを作成し、学校を通じて配布するほか、一部はDMによる発送も行う。各回20名を目途に参加者を募集するが、約40%はリピーターだというから、その人気ぶりがうかがえる。実施にあたっては、毎回、寺子屋方丈舎のスタッフ2名のほか、学生、高校生、社会人のボランティアが3~4名という態勢を組み、子どもたちをサポートする。参加した子どもの保護者からは、「自分たちで話し合っ決めて決めるというやり方がとても気に入ったよう」「自分なりにアピールして、初めて会う人とコミュニケーションをとって仲よく過ごせたことに自信が持てたよう」「また参加したいと、次を楽しみにしている」といった感想が多く寄せられている。

福島県遊技業協同組合連合会より

子どもたちが福島県自然の中で思いっきり遊びながら、自主性や協調性を育む事業に賛同し助成しました。今後も活動の広がりを期待しています。



雪遊びが楽しめる冬キャンプの募集チラシ



大自然の中、子どもたちは思いっきり遊んだ

助成団体: 特定非営利活動法人 寺子屋方丈舎

<https://www.terakoyahoujyousha.com>



自然の中でしか解消できないものがあると実感しています

東日本大震災後に子どもたちの自然体験の重要性がより増す中で、活動資金の確保などの問題から子ども向けの活動を続ける団体が減ってきています。今回、助成を受けたことで、参加費を抑えることができましたし、運営面でも助かりました。キャンプに参加した子どもたちの中から、将来的にボランティアとして参加してくれる子どもが出てくれることが夢です。

NPO法人 寺子屋方丈舎
理事 蓮沼周平さん

共同助成(埼玉県遊技業協同組合)

「埼玉こども食堂 応援キャンペーン2017」事業

子どもの貧困対策のみならず食を通じてつながることで地域の育児力を向上させる「子ども食堂」を広報

子どもなどを対象に、NPO法人やボランティア団体などが食事を無料もしくは低額で提供する、いわゆる「子ども食堂」の活動が広がっている。埼玉県の地方紙『埼玉新聞』を発行する埼玉新聞社では、「埼玉こども食堂 実行委員会」を立ち上げ、県内で活動を続ける子ども食堂の実施団体などを応援するキャンペーンを開始した。



埼玉新聞に掲載された特集記事

多様な形態で実施される子ども食堂の把握と情報発信で県民に現状を知ってもらう活動

子ども食堂と一口にいわれているが、その実態は多岐にわたる。一般的には、経済的な理由などで十分に食べられない子どもに食事を提供することを目的とする活動と理解されているが、それにとどまらず、例えば一人親家庭や共働き家庭などで「孤食」を余儀なくされている子どもの食事環境の改善、あるいは地域住民の交流促進の一環として行われているものなど、その目的は様々であり、実施場所も公民館、集会所、店舗、個人宅など、さらに実施団体や開催日時なども様々な形態がある。いずれにしろ、「子どもが一人でも安心して来ることができ、食事を楽しむことができる居場所」として機能しているのが子ども食堂と言えるだろう。

埼玉県福祉部少子政策課の調べによると、埼玉県内

の子ども食堂は83カ所となっている(2018年1月10日現在)。埼玉新聞社では、「一人親、非正規雇用などに起因する経済格差や子どもの貧困問題を背景に持つ子ども食堂が、一部の県民にしかその実態が知られていない現状がある中で、地方紙として、その情報を吸い上げ、発信していくことで多くの方々に子ども食堂の存在を認知してもらい、その活動に賛同していただきたいという思い」(埼玉新聞社 東京支社 営業部 天野仁裕さん/同社 クロスメディア局 竹内健二さん)から、関係会社などと共同して「埼玉こども食堂 実行委員会」を組織し、AJOSCと埼玉県遊技業協同組合の助成を活用して、「埼玉こども食堂 応援キャンペーン2017」に着手した。その成果として、2018年6月に子ども食堂の活動実態を紹介する特集記事を埼玉新聞に掲載した。

川越市の子ども食堂とコラボ企画を実施して子どもたちが楽しむ食事の場を提供

実行委員会では取材を続ける過程で、「子ども食堂を子どもの貧困対策としてだけで捉えるのは、問題を狭めることになる」と感じ、むしろ子ども食堂を地域の再生や地域の育児力向上のきっかけとして捉え、「みんなで食べるおいしいよ」をキーワードに活動を進めることを方針とし、別件の取材を通して知った川越市の霞ヶ関北自治会が運営する子ども食堂「にここ食堂」とのコラボレーション企画として、2017年12月25日に地域住民と子ども、親と子、祖父母と孫の3世代と一緒に楽しむ食事の場を提供することにした。

当日は、11時30分の開店と同時に席は子どもたちであふれかえり、入口の外にも行列ができるほどの盛況ぶり。このコラボ企画において、実行委員会では、にここ食堂側と協議の結果、クリスマスケーキを提供することとした。さらに実行委員会のメンバーである竹内さんが当日のサプライズゲストとしてサンタクロースに扮し、参加した子どもたち

にプレゼントとしてショートケーキを手渡した。天野さんもオーダー、配膳、片づけ、ケーキの準備など、スタッフの一人として汗をかいたという。

「取材を通じて、各地の子ども食堂では運営側のマンパワー、場所や設備の確保などの問題から継続に苦慮しているところが多いことがわかりました。今後は、紙面を通じて問題提起することなども検討し、行政や企業も巻き込んで、実施団体同士が協力し合えるような態勢づくりのお手伝いもできればと思っています。まだ活動をスタートしたばかりですが、着実に長いスパンで継続していきたいと考えています」と、天野さんと竹内さんは決意を語った。

埼玉県遊技業協同組合より

子どもたちが単に食事をする場所としてでなく、交流や地域コミュニティの醸成など様々な広がり期待しています。今後も支援を継続していきたいと思えます。



川越市の「にここ食堂」でクリスマス会を開催



子どもたちにはクリスマスケーキをプレゼント

助成団体: 埼玉こども食堂 実行委員会



地域の育児力に注目しつつ、子ども食堂を広報していきたい

実行委員会を立ち上げるにあたって、活動のベースとなる資金が必要でしたが、今回助成をいただけたことで、それが可能になりました。地方紙として、地域で子どもを育てること、見守ることのお手伝いをできればと思っていましたが、そのきっかけになりました。埼玉県遊技業協同組合とも情報交換しながら、今後も子ども食堂の広報活動などに取り組みたいと思えます。

埼玉こども食堂 実行委員会
埼玉新聞社 東京支社 天野仁裕さん

共同助成(岐阜県遊技業協同組合)

「音育、食育、木育を通して子供の豊かな成長と地域の未来をつくる」事業

風土が生んだ無形の宝物である“わらべうた”を通して親子のふれあいを創出する子育て支援を実践

親子や子ども同士のふれあい、手まりやお手玉などの遊び、さらに子守や季節の行事などで歌い継がれてきたわらべうた。心の原風景ともいえるわらべうたを子育てに活かすことで、母親や子どもに笑顔になってほしいと飛騨地方で活動を続ける団体がある。子育て情報が氾濫する現在、わらべうたの素朴さが心を打つ。



県内各地を回り地域に伝わるわらべうたをまとめた冊子



幼稚園、保育園、児童センターにも出向きわらべうたを教えている

飛騨地方のわらべうたを8年がかりで取材してまとめた歌集をベースに様々な活動を展開

消えつつある飛騨地方のわらべうたを改めて掘り起こし、子育てに活かすことで、情緒や感性の豊かな子どもに育ててほしいという願いを込めて、様々な活動に取り組んでいる「NPO法人飛騨高山わらべうたの会」(以下、わらべうたの会)。もともとは、声楽家の童謡コンサートを開催するために、2007年に設立した市民活動団体だったが、そのときに出会ったわらべうたが、現在の活動の根幹になっている。

「飛騨地方には100曲以上のわらべうたがあるといわれています。それらは豊かな自然や伝統行事、生活様式やコミュニティなどを背景に、親子や祖父母と孫、あるいは地域の大人と子ども、子ども同士がふれあうなかから生まれてきた無形の宝物です。それを子育て中のお母さんや

お父さんなどに改めて知ってもらい、子育てや遊びに活かしてもらおうと、つてを頼りに約20名ほどのご年輩の方を訪ね歩き、歌い方や遊び方をビデオで撮影し、それを1コマ1コマ止めながら楽譜に起こし、遊び方を図解し、8年かけて制作した歌集『ひだのわらべうた』を2015年に発刊しました」

そう話す、理事長の岩塚久案子さん。その取材活動の過程で知ったのが、飛騨のひな祭り行事の「がんどうち」だった。これは日本版ハロウィンともいえるもので、子どもたちが「ひなさま見せとくれ〜」と歌いながら家々を回り、お菓子をもらうというもので、昭和初期までは一般の家庭で普通に行われていたが、今は飛騨の一部地域でしか見られなくなったものだという。わらべうたの会では、約10年前から毎年3月に定例活動と市内商業施設でのイベントで「がんどうち」の復興に取り組んでいる。

定例活動、出張講座、木育ひろば運営などで子育て中のお母さんを幅広く支援

わらべうたの会の活動だが、中心となるのは毎月第3火曜(10:30~11:30)に総合福祉センターで行われる定例活動で、これは乳幼児の親子が参加して、わらべうたやワークショップなどを楽しむというもの。

また、幼稚園、保育園、児童センター、支所などからの依頼を受けて、歌集『ひだのわらべうた』をツールとした出張講座を年間20回ほど実施しているほか、毎年7月にはJAひだと共催で、食育をテーマに、わらべうたや童謡のステージ、飛騨産の野菜やお米の試食、食育のブースなどで構成される「大地のめぐみサマーフェスティバル」を開催している。

さらに商業施設「ピュア高山」内のチャイルドランドで、高山市からの委託を受け、「ぎふ木育ひろば/高山市つどいの広場」(月・水・金曜10:00~15:00)を運営している。ここは飛騨産材や岐阜産材を使った木のおもちゃで

遊べる広場で、ワークショップや季節のイベントなども開かれる。「児童センターなどに積極的に出かけることが苦手なお母さん方にも買い物ついでに気軽に利用してもらうことで、少しでも子育ての負担を減らすお手伝いできればと思っています」と、岩塚さんは話す。

今回の助成は上述の事業全般に広く活用されたというが、「活動の幅を広げ、質を向上させるという意味で大いに助かりました」と、岩塚さん。高山市市制80周年記念映像にもわらべうたの会が取り上げられているように、その活動は地元で大いに期待されている。

岐阜県遊技業協同組合より

昔から地域に伝わる歌を次世代に伝承しながら、親子や地域の人とふれあう機会を子どもたちに提供している活動に賛同しました。これからの活動に期待しています。



食育をテーマに、わらべうたや童謡のステージを披露する「大地のめぐみサマーフェスティバル」



わらべうたワークショップには毎回多くの親子が参加

助成団体: 特定非営利活動法人 飛騨高山わらべうたの会

<https://hidawarabe.org>



豊かな自然環境の中で子育てできる幸せを少しでもサポートしたい

活動費が不足しがちななかで、今回の助成は大変に助かりました。おかげさまでやりたいと思っていたことが実現でき、夢のような1年をすごせました。ワークショップの材料などを充実させることができたうえ、当団体の活動を紹介するリーフレットも作成することができました。子育ては楽しいもの、シンプルなものだと伝え、背中を押していきたいと思っています。

NPO法人 飛騨高山わらべうたの会
理事長 岩塚久案子さん

共同助成(福岡県遊技業協同組合)

「こたけ竹育ひろば～子どもと探る小さな町の未来像～」事業

木工や竹細工、農業体験を通して異世代が集い 地域に知り合いの輪が増え、子育て環境が充実

福岡県の中央部、筑豊地区の北部に位置する小竹町は、町の中央を遠賀川が南北にゆるやかに流れるのどかな田園地帯。地域住民同士の助け合いのもとで子育て支援や高齢者の生活支援の推進を目的に設立された「NPO法人リトルバンブー」では、親子や地域住民が集い、子どもを育てながら交流する活動をスタートさせた。



子育て世代と高齢者世代の交流を育む「こたけ竹育ひろば」



家族ぐるみでの世代間交流を活発に行いコミュニティを活性化

核家族の子育て世代と地域のシニアが集い 工作や農業体験で家族ぐるみの付き合いを

小竹町の後援、AJOSCと福岡県遊技業協同組合の助成を受け、リトルバンブーが2017年度に初めて取り組んだ「こたけ竹育ひろば」は、小さな子どもを持つ親が毎月2回程度集まり、竹細工・木工、農業体験、小竹町の歴史を知る学習会などを通じて、地域のシニア世代と心の通じ合う関係性を育むきっかけにしてほしいという思いから始めたコミュニティスクールである。

参加したのは小学校4年生までの子どもを持つ子育て世代の親子8家族36名で、町内にある自衛隊官舎に暮らす家族、夫の実家にUターンした家族などを含め、基本的には親子だけで暮らす、いわゆる核家族だという。そこにサポーターとして町内の70歳前後のシニア世代(登録者26名)が加わり、親が作業や体験をしている間、子ども

たちを見守ったり、みんなで一緒に食べる昼食の準備をしたりする。

6月から3月まで毎月2回、日曜に、原則10～15時まで、小竹町が移住希望者の居住体験と町民同士の交流の場として整備した「こたけ創造舎」に集まり、町内及び隣町在住の講師から木工(カレー皿、スプーン、フォーク)、竹細工(竹カゴ)を学びながら製作したり、近隣の農家の協力を得て、サツマイモや高菜の栽培、梅干しづくりを体験したり、小竹町の歴史を学んだりするのが主な活動内容となっている。活動場所、講師、サポーター、工作材料、農業体験用の畑など、事業に必要な資源はすべて町のもので賄えるため、まさに地に足が着いた手作りの活動と呼ぶにふさわしいし、土地への愛着は、こうした体験や異世代の交流を通じて培われていくのが本来の姿だと言えるだろう。

知り合いがいることの大切さや集う楽しさを通し 地域で子どもを育てる意識に変えていく

元々、地縁がない土地に住み核家族で子育てをしている親は、どうしても孤立しがちになる。一方、若年層が雇用の機会を求めて都市部へ流出していく地方では、夫婦もしくは単身の高齢者世帯が増え、これまた孤立しやすい状況となる。リトルバンブーの「こたけ竹育ひろば」は、そうした孤立しやすい子育て世代や高齢世代を結びつける役割を果たしている。

そうして地域の中で同世代だけでなく、異世代の知り合いができることでコミュニティとして充実していくし、より子育てしやすい環境になる。子どももまた親以外の地域の大人と触れ合いながら活動することで、社会性や土地への愛着が湧いてくる。

「親も子も高齢者も、地域に知り合いがいることの大切さや集うことの楽しさを体感してもらいたい。まずは、子育て中の親世代が地域での活動に参加して『楽しい』と思うことで、子どもたちも『人と集うことは楽しい』と感じてくれ

ると思います。それが社会に出たときにも役に立つ。さらに、そこに地域住民も参加して、『地域で子どもを育てる』という意識が変わっていくことで、より暮らしやすいコミュニティになっていくと思います」リトルバンブーの井上頼子さんは、この事業の意義についてそう話す。

参加した母親からは、「自分たちでできることは手伝うし、お金を払ってもいいので続けて欲しい」「親戚が増えたようであれいい」「もし家を建てるなら、ここがいい」という声が寄せられたり、子どもたちからも、「みんなでごはんを食べるのが楽しい」「創造舎のじいじ、ばあばと遊ぶのが楽しい」といった声があがったという。木工教室と農業体験は2018年度も継続する。

福岡県遊技業協同組合より

子育て世代と高齢者の交流は地域活性化に繋がる面白い活動だと思ひ助成しました。これからも地域コミュニティの発展のきっかけになることを願っています。



地域ぐるみでの農業体験も実施



「こたけ竹育ひろば」の活動を告知するチラシ

助成団体: 特定非営利活動法人 リトルバンブー

<http://www.lbkotake.com>



安心して子育てができ、高齢者が心豊かに暮らせる土地に

助成金をいただいたことで、講師への謝礼や工作に必要な道具や教材を準備することができ、参加費用は昼食の材料代だけに済ませることができました。おかげさまで団体としての認知度も上がりましたし、活動の基盤ができましたので、今後はさらに子ども・子育て世代・高齢者のサポートという私たちのミッションの遂行に邁進していきたいと考えています。

NPO法人 リトルバンブー
副理事長 井上頼子さん

共同助成(福岡県遊技業協同組合)

「益城町よりあいコミュニティ支援プロジェクト」事業

仮設団地内の集会所で活動する手芸サークルを支え居場所や生きがいとしてのコミュニティの維持に貢献

2016年4月の熊本地震発生直後、避難所となったホテルで一部の人たちが始めた編み物会がルーツとなって誕生した「ましきアミーゴ」。仮設住宅団地に移転しても活動を続けているが、それを支援しているのが福岡県太宰府市に拠点を置く「NPO法人チャルカ・ジャパン」。多様な人が住む仮設団地のコミュニティ維持に寄与している。



仮設団地の集会所で行われる手芸サークル活動



活動を告知するチラシ

熊本県内最大の仮設団地の手芸サークルの活動を支えてコミュニティの維持に努める

熊本空港のすぐそばに整備された仮設住宅の一つ、益城町テクノ仮設団地は516戸という、熊本県内に設けられた仮設団地としては最大である。その中に設けられた集会所を活動場所にして、週3回、9時から17時頃まで集まり、古布や古毛糸などを材料に、鍋つかみ、たわし、コースター、携帯ストラップ、袋物などを作っている団体が「ましきアミーゴ」である。

「ましきアミーゴ」に参加しているのは、テクノ仮設団地で暮らす70代後半から80代前半の女性で、現在は7~8名が活動している。「当初は3~4名でスタートし、ほぼ毎日、活動していました。途中で12~13名程度までメンバーが増えましたが、公平な使用が求められる集会場という性

質上、活動場所の確保が難しくなったり、グループを離れたたり、仮設を出て行かれる方もいたりして、現在は常時参加しているのが3~4名といったところです」と話すのは、「ましきアミーゴ」の支援を続けている「チャルカ・ジャパン」の理事長、山邊悦弘さん。

「チャルカ・ジャパン」は、インド独立の父、マハトマ・ガンジーが唱えた「糸車」の思想に共感し、自立、平等、持続可能な循環型社会の実現を基本理念に、インドの身寄りのない高齢者施設や孤児院の支援などを行ってきた団体だが、熊本地震発生以降、被災地の物資支援、ヘルスケア支援、生活再建の相談活動などを行っている。熊本学園大学の学生有志が運営しているテクノ仮設団地内の「おひさまカフェ」で、後に「ましきアミーゴ」となるメンバーと知り合ったことで、その支援を行うことになったという。

外部の第三者が継続的な支援をすることで高齢住民の孤立化を防ぐための居場所づくり

「支援活動の内容としては、商品企画、販路拡大、イベントでの販売補助、商品のパッケージ・ラベルの提供などが主なものとなります。こちらからの情報発信や口コミ、さらに商品が安価だということもあって、小規模ながら各種団体などを通して商品が販売されるようになりましたし、県内の人気温泉地の黒川温泉組合などでもおみやげとして扱ってもらえるようになりました」と、山邊さん。

こうした製造・販売支援も大切だが、それ以上に重要なのが、「ましきアミーゴ」の活動を通じて、仮設団地で暮らす高齢者の集いや交流の拠点となるコミュニティを形成・維持し、居場所づくりや生きがいづくりをすること」だと、山邊さんは話す。こうしたコミュニティがなければ、高齢者はどうしても住宅内にこもりがちになり、それが孤立感を生んだり、健康を損ねる原因になったりするという。こうしたことは先の東日本大震災後の復興過程でも指摘されたことで

もあるため、きめ細かい対応が必要であることは間違い無い。

「多様な人が住む仮設住宅団地内でのコミュニティ支援は容易ではありませんが、私たちのような外部の第三者が継続的に支援をすることで、離合集散がある中でもコミュニティが維持され、住民の居場所づくりに貢献することができると思っています」と、山邊さんは話す。AJOSCと熊本県遊技業協同組合からの助成は、支援活動のための人件費、ガソリンや備品などの消耗品を含め、活動の定着のための費用として大いに役立った。今後も、復興を支えるコーディネーターとしての活動を継続していくという。

福岡県遊技業協同組合より

仮設団地で暮らす高齢者のコミュニティ作りは最重要課題です。今後も手芸による交流で孤立感を防ぐ活動に期待しています。



細かな作業で手先を操るため認知機能の向上にも役立つ



制作された作品の数々

助成団体: 特定非営利活動法人 チャルカ・ジャパン

<http://www.charkhajapan.org>



被災者のために小回りの利いた支援活動を今後も継続していく

今回は支援いただき、ありがとうございました。ほとんどの財産を失った被災者の生活再建は10年単位での時間がかかると思われそうですが、行政や大きな支援団体ではできない、小回りの利いた支援も大切だと思っています。もうしばらく継続して活動したいと思います。九州北部豪雨災害の被災地、朝倉での支援活動も行っていますので、そちらのほうもよろしく願います。

NPO法人 チャルカ・ジャパン
理事長 山邊悦弘さん

共同助成(熊本県遊技業協同組合)

「熊本地震被災地『モバイル児童館』」事業

遊ぶこと、表現することで自己を回復していく子どもに 遊びの空間と時間を届ける移動児童館

2016年4月に震度7の揺れが2回発生した熊本地震。被害が甚大だった熊本県益城町では、被災直後の避難所暮らし、さらに現在も仮設住宅での生活を余儀なくされている人が多い。そのような状況下、遊びの場所や機会を失った子どもたちのストレス発散のために移動する児童館を運営する団体がある。



遊び道具を積み仮設団地に向く「モバイル児童館」



集会所などに出向き子どもたちの遊び場を提供

子どもの感覚を刺激する遊び道具を積んで 子どもたちのもとにかけつける児童館

「モバイル児童館」とは軽トラックを改装し、そこに子どもの感覚を刺激する遊び道具(おもちゃ、トランポリン、滑り台・平均台・トンネルを組み合わせた感覚統合遊具、カラーボールなど)を積み込んで、仮設団地、公共施設などへ移動し、遊びの機会を子どもたちに提供するものである。

「NPO法人くまもとスローワーク・スクール」は、里山の光景が広がる熊本県玉名郡和水町を拠点に、不登校児童・発達障がい児向けのフリースクール活動、地域団体と連携して教育支援・就労トレーニング支援、子育て・子どもの教育に関するカウンセリングや講演活動などを行っている。熊本地震被災後、益城町総合体育館内避難所で就学前～小学生を中心に、遊び場支援、発達障がいなどを抱えた子どもたちへの寄り添い支援を実施してきた。し

かし被災者の生活拠点が仮設住宅へ移行したことに伴い、近くの公園が地震後に使えない、仮設団地敷地内に子ども遊び場がない、集会所は高齢者向けの設計になっているなどの事情で子どもたちの日常の遊び場が減ってしまい、本来、遊びの中で自己回復を図る子どもの回復機能が失われていることなどに気づいたという。

そこで、子どもの感覚を刺激する遊び道具一式を車に積み込み、必要な場所に赴いて、遊び空間・時間を提供しつつ、ダイナミックな遊びが不足している子ども、発達障がいなどを持ち、集団遊びの場に参加できない子どもに対して遊び支援を行うとともに、保護者や保育士への助言を行う事業を実施。益城町内には現在、16カ所の仮設団地があるが、子育て支援を行っているNPO法人などとコラボレーションして、そのうちの5～6カ所を回ったという。

自己表現することで自己を回復していく 子どもたちの状況に合わせて支援する

「子どもにとって、遊びは自己表現そのものです。東日本大震災後の支援活動などからも、子どもが絵を描いたり、体を動かしたりする自己表現の大切さが明らかになっています。このモバイル児童館ならどこにでも出かけることができるし、スペースに合わせて必要な遊びを提供できます。特に大人しい子、引っ込み思案な子、発達障がいなどで集団遊びが苦手な子などにとっては、フレキシブルな活動ができるモバイル児童館は適していると思います。さらに子どもたちを遊ばせている間に、母親同士の付き合いのきっかけにもなるし、母親からの子育て相談に乗ることもできます。それによって、子どもたちの変化やお母さんたちの状況を把握することにもつながります」

そう話すのは、「くまもとスローワーク・スクール」の代表理事、入江真之さん。さらにこのモバイル児童館の活動

の一環として、外部から美術系の講師を招いて、夏休みに図画工作の課題を手伝う子どもアート教室も実施した。また、春休みには、図書館が被災してゆっくりと本に親しむ機会を失った子どもたちのために絵本カーニバルも開催したほか、子ども体操教室、子どもから高齢者までを対象にしたエクササイズも実施した。「子どもは表現を通じて自己回復していく力がすごい。それに対して大人や高齢者のほうが気持ちの落ち込みや孤立感から、なかなか回復できません。今後はそちらにも目を向けた活動をしていかなければと思っています」と、入江さんは語った。

熊本県遊技業協同組合より

被災した子どもたちのストレスを発散させ、安心感を与える遊び場の提供は必要だと共感し助成しました。今後も子どもたちに寄り添う活動に期待しています。



絵本カーニバルも開催



夏休みに開催したアートスクール

助成団体: 特定非営利活動法人 くまもとスローワーク・スクール <http://www.kumamoto-sws.com>



仮設住宅という特殊な状況に置かれた子どもたちを見守りたい

今後、予想されている南海トラフ地震などが起きた際にいち早く駆けつけて子どもたちのための活動を行う基盤となるモバイル児童館の整備ができました。各種の助成が取得しにくい状況になりつつあり、活動頻度も減らざるを得ない中、仮設住宅で暮らす子どもたちの表現活動に支障が出るのが心配ですが、今後もなんとか頑張っていきたいと思っています。

NPO法人 くまもとスローワーク・スクール
代表理事 入江真之さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

「マツヤマお城下リレーマラソン2017」事業

チームでタスキをつなぎゴールを目指すことで 絆や交流の基盤づくりと子どもの健全育成に貢献

親子の絆を深め、地域での異年齢・異世代の交流の創出を目指して、2014年にスタートした松山市のリレーマラソン大会。第4回目となった2017年の大会は、あいにくの台風で2日目が中止となったが、雨天という悪コンディションにもかかわらず、熱いレースが展開された。



雨中のコンディションのなかでも多数の参加者がタスキを繋いだ



リレーマラソンを告知するポスター

公園内周回コース42.195kmをタスキでつなぐ リレー形式のマラソン大会に2,200人が参加

近年、共働き家庭の増加や核家族化により家族間・世代間でのコミュニケーションが低下しているといわれるなか、子どもたちを巻き込んで何かの活動をするという機会が、家庭や地域から失われつつある。それと同時に、地域に暮らす人々の「絆」も以前に比べて弱くなったと指摘もされている。

地域をまき込んだスポーツには、健康増進のみならず、地域活性化の基盤であるコミュニティの絆を強め、さらに次代を担う子どもたちの健全育成という機能もある。松山市体育協会、松山市陸上競技協会、愛媛新聞社の3団体で構成される「マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会」では、スポーツの持つそうした機能に着目し、特殊な

道具を必要としないランニングと、チームで一つの目標を目指すリレーを組み合わせた「マツヤマお城下リレーマラソン」を2014年から実施している。

これは、松山市の城山公園内周回コース(1周1.520m)をマラソンと同じ42.195km走る大会で、独力で最低1周を完走できる小学4年生以上の男女が参加でき(部門によって編成人数は異なる)、タスキリレー方式でゴールを目指すというもの。第4回目となった昨年(10月21・22日)は、8部門(一般・女子・マスターズ・小学生・職場対抗・ファミリー・ふるさと対抗・エンジョイランニング)に688チーム・6,007名のランナーがエントリーしていたが、台風のために2日目の競技が中止となり、4部門(一般・女子・マスターズ・小学生)に252チーム・2,200人のランナーが参加して実施された。

台風接近という悪コンディションの中で 新しい取り組みも含めて熱戦が展開

大会初日の10月21日は台風接近に伴い、朝から雨模様。時折強風を伴う激しい雨が降り続く悪コンディションの中、スタートの号砲が鳴らされた。ランナーも応援者もレインコートを着込んでの疾走、応援となったほか、運営側も全員濡れネズミの状態、200名を超える審判員、補助員、スタッフや協賛社の人々もビショビショのままで奮闘。スペシャルサポーターとして参加したスポーツキャスターの青木愛さんも過酷な現場にもかかわらず、最後までランナーの激励を続けた。

大会の様子は『愛媛新聞』の通常報道に加え、別刷り12ページ特集報道として掲載されたほか、愛媛CATVで5時間にわたって生放送された。「翌日の新聞記事での『むしろ雨でチームの絆がさらに強まった』といった参加者の

コメントに心をうたれました」と、実行委員会のメンバーの一人は話す。

また、今回は年齢制限で参加できない小学3年生以下の子どもたちを対象に、アディダスランニングアドバイザーの湯田友美さんを招いて「かけっこ教室」を実施。ステージ上にテントを設置し、その中で走ることに関する基本的な意識、フォーム、手と足の使い方などについての具体的なアドバイスがあり、また、実際に体を動かしながら体験した。参加した子どもからは、「教わった走り方を運動会でも試してみたい。大きくなったらリレーマラソンにも出てみたい」といった意見が寄せられた。この「かけっこ教室」の実施・運営にAJOSCの助成が活用された。5回目となる2018年度も10月に開催予定で、「総エントリー数700チームを目指したい」と、実行委員会メンバーは意気込みを語った。



元陸上選手の湯田友美さんを招いて行われたかけっこ教室



子どもたちは真剣な表情で指導を受けた

助成団体: マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会



より多くの方が参加しやすく、参加してよかったと思われる大会に!

4回目となった大会ですが、雨天での実施も悪天候による一部中止も、いずれも初めてのことでした。助成により、素晴らしい講師による「かけっこ教室」が実現できました。今回参加いただいた小学生、また参加できなくても興味を持ってくれた小学生たちに、ゆくゆくはリレーマラソンや他のランニングイベントに参加してもらえたら幸いです。

マツヤマお城下リレーマラソン実行委員会
愛媛新聞社 東京支社 営業部 木村祐貴さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

「子ども向け環境ワークショップ図鑑『ミホンテホン』開発」事業

子どもたちが環境について学ぶワークショップを開催するための情報発信で環境教育の促進に寄与

地球温暖化をはじめ様々な環境問題が深刻化する今日、環境教育の重要性はますます高まっている。小中学生向けの環境教育推進活動に取り組む「一般社団法人未来キャンバス」では、子どもたちが体験しながら楽しく学習できる「環境ワークショップ」を開催するための情報を広く発信するため、検索しやすいポータルサイトを立ち上げた。



子ども向け環境ワークショップ図鑑「ミホンテホン」のホームページ

環境教育に適した学びの手法であるワークショップの見本集を制作

「環境はすべての生きものにとって重要なテーマです。そもそも生きることを学ぶ環境という教科が学校の授業にないのはおかしいと思います」と話す「一般社団法人未来キャンバス」の入山忠さん。近年、文部科学省は学校教育において環境教育の推進を図る方針を示し、小中学校でも環境教育への取り組みが進められてきているが、専用の教科書もなく方法も確立されていないため、先生のなかで環境教育のあり方を模索しているのが現状だという。

環境教育の効果的な学びの手法として注目されているのがワークショップだ。環境教育では知識や理解に留まらず主体的な参画が重視されるが、体験型のワークショップなら子どもたちも楽しんで自主的に環境について学ぶこと

ができるという。最近では企業や自治体などが環境をテーマに体験学習するプログラムを積極的にやっているが学校の教育現場でもこうした環境ワークショップを模索する動きがあるものの、実践経験がないと開催へのハードルが高いという現実がある。

「活動を通して学校の先生方と接する機会も多いのですが、ワークショップを開きたくても実際にどうしたらよいかわからないという声を多くいただきます。そこで、環境ワークショップを開催したい人の手助けになるような、気軽に検索できるサイトがあったらよいと考え、『ミホンテホン』を立ち上げました。各地で行われている効果的な事例をもとに、開催者の見本手本となるように情報を発信していきます」と入山さんは語る。

小中学校と連携して効果的なモデルケースを発信

ポータルサイト「ミホンテホン」の基本仕様は、環境ワークショップが様々な視点から検索可能で、初心者でも始められるように詳しい手法や情報が記載されていることである。各ワークショップは内容によって、工作などの行程を説明する「図鑑」と、ワークショップの組み立てや注意点などを教示する「教科書」の2つのカテゴリに分けられる。ちなみに、現在アップしている図鑑には「ダンボール滑り台」、子どもたちに地元の海について考えてもらう「海のキャラクター作り」など、教科書には「海辺の野鳥観察会」などがある。これらワークショップの素材は、子どもたちが興味を持ちそうなものや環境の定義を広げ時代に沿ったものを、ネットから全国で行われている事例を選び出し、それをもとに

子どもたちをいかに楽しませるかを考えて組み立て直すという。

「自分たちが発信したものが本当に楽しくて、洗練されたもので、可能性を秘めているワークショップなのかを確認するために、今後は学校と連携して放課後などにテスト的に実施させてもらい、反応を見ながら各コンテンツのブラッシュアップを図っていきたい」と入山さん。まずは小中学校の先生に声を掛け、10校ほどモデルケースをつくって発信していき、そこから自治会や行政の担当者、イベント主催者、保護者などへと利用を広げていきたい考えだ。

「これまでバラバラだった情報の集約で、開催へのハードルが下がり、各場面で効果的なワークショップが開催され、多くの子どもたちが環境についてさらなる学びを得ることを期待したい」と語った。



ダンボールを使った工作を解説したページ



どんぐりを使うアート作品の作り方を解説したページ

助成団体: 一般社団法人 未来キャンバス <http://miraicanvas.net/company>

サイトの活用で多くの子どもたちに効果的な学びの機会を

ポータルサイトの開発のように成果が形として現れない事業はなかなか理解されない場合が多いのですが、初めての申請で採用していただけて大変うれしく思います。助成で、これまでにないサイトを構築することができました。今後は誰でも自由に書き込める開かれたサイトを目指し、知見を増やしながら利用者と共に育てていきたいと思っています。

一般社団法人 未来キャンバス
理事 入山 忠さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

「科学を通して地域コミュニケーションを図る 手作りの『科学館』」事業

空きアパートをDIYで改修した手作りの科学館で 市民や子どもたちと科学コミュニケーション

2018年1月14日、千葉県のJR柏駅近くに空きアパートを活用して作り上げたという「科学館」がグランドオープンした。大学院生らのメンバーで構成された市民団体「柏の葉サイエンスエデュケーションラボ」が運営する科学館は、気軽に科学に触れることができ、地域住民や子どもたちが日常的に科学についてのコミュニケーションを図ることができる拠点として期待される。



1年半かけてDIYで作った「手作り科学館 Exedra (エクセドラ)」



1階はくつろぐこともできる展示室と実験室

ボランティアが手作りで作り上げた科学館で 気軽に科学に触れられる時間を創出

JR柏駅西口に程近い路地の一角にある築30年を超えるという2階建てアパート。空き家となったアパートを所有者の厚意で無償利用できることになり、「柏の葉サイエンスエデュケーションラボ」(以下、KSEL)では、2016年8月にDIYによる内部改装をスタートさせた。会長を務める羽村太雅さんは、「予想をはるかに超える難工事でした」と、その模様を振り返る。

「改装には、メンバーを中心にのべ200名がボランティアで参加してくれました。サイエンスを専門とする人たちが、当然ながら改装工事はズブの素人。壁を抜き、水回りや照明を整備し、床を張り、什器や備品類を選定してと、とにかく大変でした。それに加えて、ボランティアの作業への参加の可否の確認、モチベーションを維持するための

声かけ、関係先へのあいさつ回りなど、マネジメント面での苦労もありました」

1年半近くかけて完成した「手作り科学館 Exedra(エクセドラ)」は、1階が展示室と実験室、2階が事務所兼倉庫となっている。展示室には科学に関する未就学児向けの絵本や図鑑、入門書などのほか、KSELが主催する「理科の修学旅行」で採集した化石や自由研究の成果物などが陳列されている。全体的にゆったりとしたスペースが特徴だが、「展示室は解説員として常駐しているスタッフと話したり、展示物を見てもらうことがメインですので、そのための空間作りを心がけました。子どもだけでなく、大人も寛げる場になりたいと思っています」と、羽村さん。

科学館は土・日曜開館(10:00~17:00)で、入館料は初回600円(月間パス800円、年間パス5,000円)となっている。

科学コミュニケーションによる地域活性化と 科学に親しむきっかけとなる拠点を目的に

KSELは科学コミュニケーションによる地域活性化を目指し、次世代を担う子どもたちをはじめとする地域住民が身近なところから科学に興味を持つきっかけを提供する目的で、2010年に東京大学と慶応義塾大学の大学院生4名によって創設された団体で、現在、大学院生・学部生、社会人、主婦など40名弱の幅広いメンバーで構成されている。

柏の葉地区を主な活動エリアとして、天体観望会、宇宙の話、砂の科学、雪の科学、各種の実験・工作教室など、科学をテーマにした講座や合宿などを年間100本ほど実施しているほか、小学生から高校生までを対象に、アウトドア体験しながら自然の中にある不思議な現象のルーツを探る人気企画「理科の修学旅行」、大人を対象に、

お茶とともに科学の話を楽しむ「サイエンスカフェ」などの活動を行っている。

また、街全体を科学館に見立てて展示物を設置した「街まるごと科学館」(2015年6月~9月)の活動は新聞などのマスコミにも取り上げられてきたが、「科学は難しい、とっつきにくい」という風潮のなかで、スタッフと話しながら、いつでも気軽に科学に触れられ、子どもも大人も寛いで科学コミュニケーションを図れる定常的な場所が必要(羽村さん)という思いが、手作り科学館 Exedraの発想へとつながったという。

KSELでは、その第一弾企画として、小学生から大人までを対象にした初学者向け天文講座「アストロトーク」を実施(2017年10月~18年3月)したが、備品購入などを含めた改装工事全般と同講座の企画運営、広報活動などにAJOSCの助成が活用された。



約200名のボランティアが手作りで内装を手がけた



初学者向け天文講座「アストロトーク」を告知するチラシ

助成団体: 柏の葉サイエンスエデュケーションラボ

<http://udcx.k.u-tokyo.ac.jp/KSEL>



子どもを含めた一般の方々に科学に興味を持ってもらうために

当初の考えが甘く、工事開始後、あっという間に資金が底をつくなかで、助成いただき、大いに助かりました。今後はExedraに足を運んでもらうための周知活動に努めていくことと、20、30代の若い世代、特に将来、生まれてくる子どもの母親になる女性に科学へのアレルギーを無くしてもらおうような活動に取り組んでいきたいと思っています。

柏の葉サイエンスエデュケーションラボ
会長 羽村太雅さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

「スペイン語圏からの在日児童のための副教材『日本の童話・スペイン語版』制作・無償配布」事業

南米からの在日児童の母語保持と日本語学習のためにバイリンガル副教材を制作・配布して教育現場をサポート

言葉とその多様性に関心のある市民や専門家が集まり文化活動を行っている「NPO法人地球ことば村・世界言語博物館」。外国にルーツを持つ子どもたちの母語と日本語の学習に役立ててもらおうと、日本語と外国語のバイリンガル絵本『日本の童話』を制作し、全国の学校や国際交流団体などに無料配布している。



日本語と外国語のバイリンガル絵本『日本の童話』



バイリンガル絵本では、左ページに分かち書きをした日本語、右ページにスペイン語の対訳を掲載している。

外国人労働者の子どもが抱える母語保持と日本語習得の問題

「NPO法人地球ことば村・世界言語博物館」では、在日外国人児童の母語保持と日本語学習の副教材として、2013年にAJOSCの助成を受け在日ブラジル人児童に向けて日本語・ポルトガル語対訳版を、続いてクラウドファンディングを活用して英語版を、そして昨年度、再びAJOSCの助成を受けスペイン語版を制作した。先に制作・配布したポルトガル語版の反響は大きく、ブラジル人児童の指導に苦慮していた教育現場から大変役に立ったという声を受け、ブラジル以外の南米諸国の主要言語であるスペイン語版の制作に着手したという。1990年の入国管理法の改正以降、南米から来日する外国人労働者は増え続けており、ブラジルの約10万人、ペルーの約2.6万人

を含む約18万人が在住しているといわれる(2018年現在厚生労働省)。

「ニューカマーと呼ばれ、中国や韓国のように日本国内に先住のコミュニティを持たない南米からの労働者にとって、子どもの教育は大変難しい問題で、彼らが通う学校にポルトガル語やスペイン語の教材はほとんどないのが実状です。そのため、日本語の授業についていけずにドロップアウトしてしまったり、逆に日本語が達者になるにつれ母語を忘れて親とのコミュニケーションがうまく取れなくなる子どもも増えているようです。いずれは帰国する彼らにとって両言語が話せることは大きな財産になるはずですから、少しでもその助けになればという思いで活動しています」

同法人の小林昭美、小幡由紀子両理事は語る。

日本の童話を収録したバイリンガル絵本を教材が不足する国内外の学校に提供

バイリンガル絵本『日本の童話』には、小学校低学年から中学生程度の児童を対象に、『おむすびコリン』や『ごんぎつね』、芥川龍之介『蜘蛛の糸』、宮沢賢治『注文の多い料理店』など、民話から児童文学まで7作品を収録し、それぞれ日本語と外国語の対訳で表記し、物語のイメージを喚起する挿絵を掲載している。日本語の表記は外国人にもわかりやすいように、文節ごとに区切る「分かち書き」にしており、平仮名ばかりの小学校低学年の国語の教科書で使われている表記法を参考にしたという。また、日本語と外国語の対訳を照らし合わせて読めるように文章に番号を付けるなど、バイリンガルの本ならではの工夫がなされている。

スペイン語版『日本の童話』は、日本語とスペイン語によ

るバイリンガルの朗読を収録したDVD付きで1,000部を制作し、全国の学校をはじめ母語保持教室、国際交流団体、図書館などに無償で配布するほか、読み聞かせなどの活動を行う予定で、これまで教材が不足していた学習現場での活用が期待される。さらに、外務省や大使館などに働きかけて現地の日本人学校へも配布先を広げていく考えだ。「2016年のリオオリンピック前の秋篠宮様ブラジルご訪問の際に、外務省を通してポルトガル語版を300部ほどお持ちいただき、現地の日本人学校に届けることができました。スペイン語版も同様に、ペルーなど現地の日系の子どもたちの日本語学習や日本文化の理解に役立ててもらえるように、配布ルートを探っていきたい」と小林さん。

本事業はスペイン語版の刊行をもって完結となるが、望ましい言語環境の実現と言葉の多様性を守るための支援活動を、今後も様々な形で行っていくという。



絵本の制作だけでなく、読み聞かせの活動も実施

助成団体: 特定非営利活動法人 地球ことば村・世界言語博物館 <http://www.chikyukotobamura.org>



スペイン語版を刊行することができ本事業は完結しました

ポルトガル語版に続いてこの活動に支援をいただけて、とても感謝しています。政府や企業では行き届かない分野はたくさんあり、そこに目を向け、支援の手を差し伸べるために我々NPO法人があるのだと思います。ささやかな取り組みではありますが、これからも言葉という大きな財産を守るための活動を続けていきます。

NPO法人 地球ことば村・世界言語博物館
理事 小林昭美さん(右) 理事 小幡由紀子さん(左)

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

「第4回高校生劇評グランプリ」事業

劇評を通して若い世代の舞台芸術への関心を喚起し 想像力や思考力の育成を目指す

「劇場へ行って劇評を書こう」をスローガンに、高校生による劇評を公募する「高校生劇評グランプリ」。若者の舞台芸術への関心を高め、観劇を通して想像力や思考力を伸ばし、表現力を育てることを目的として始まった。優秀な作品には最優秀賞、優秀賞、優れた成果を取めた高校へは団体賞が贈られ、公式サイトで公開される。



「第4回 高校生劇評グランプリ」の受賞者



「第4回 高校生劇評グランプリ」の開催を告知するチラシ

劇場が割引チケットを提供して 高校生の観劇と劇評執筆を応援

2013年に始まった「高校生劇評グランプリ」は、「NPO 法人日本学校演劇教育会」、「公益社団法人国際演劇協会日本センター」、全国高等学校演劇協議会、東京都高校演劇研究会などで構成される実行委員会が実施運営する。第4回目となる同グランプリは、2017年1月以降に国内で上演された舞台作品の劇評(レビュー)を2017年12月4日~2018年1月15日に公募、演劇評論家ら6人の選考委員により入賞者が決定し、3月27日に表彰式が行われた。観劇に際しては、劇場や制作会社の協力により割引となる「高校生応援チケット」が提供される。今回は人気のミュージカル『レディ・ベス』など24作品の協力を得て、のべ100人近くの高校生がこのチケットを利用して観劇を楽しんだ。また関連企画として、東京芸術劇場が

主催する劇評レクチャーシリーズ(劇評ワークショップ、観劇カフェ、トークイベント)を共催し、高校生の劇評執筆のチャレンジをサポートした。「劇評を書くのはハードルが高いので、高校生の背中を押すためにいろいろと仕掛けていく必要がある」と久保田邦明さん(NPO 法人日本学校演劇教育会)は言う。

第4回グランプリには25編の応募があり、最優秀賞に劇評タイトル『小さな戦争』(『池袋ウエストゲートパーク SONGS&DANCE』の劇評)と劇評タイトル『日本の北と南を繋ぐ舞台』(『ハイサイセバ~Hello-Goodbye~』の劇評)が選ばれた。例年より応募数は少なかったがどれも力作揃いで、選考委員からは「応募作品の水準の高さに驚いた」「1本の劇から多くを吸収し、自らの感性を磨いていた」「クリティカルな視線を持ち続けてほしい」などの講評が寄せられた。

グランプリ受賞者が舞台の魅力を発信 同世代に広がる観劇の輪

そもそも高校生を対象に本事業を立ち上げた背景には、以前のように学校の課外授業として舞台芸術を鑑賞する機会が少なくなり、若者が劇場に足を運ばなくなっているという現状がある。若者の劇場離れに危機感を持つ劇場側も割引チケットを用意してこの取り組みを後押しする。「感受性豊かな時期に、ぜひ劇場という特別な空間で生の舞台を観て感性を磨いてほしい」と久保田さん。さらに、高校生が劇評に取り組む意義について次のように説明する。

「単なる感想文と違い、舞台から得た感動を読んだ人に想像させたり、劇場に誘いその感動を共有できるように書くのが劇評です。そのためには、想像力や論理的な思

考力、表現力などが求められます。劇評を書くことは観客を育てるだけにとどまらず、例えば、入試改革によって大きく変わろうとしている高校教育においても書く力や考える力を伸ばす訓練になると思います」

目下の課題は高校生への周知を図ることで、今後は高校の教育現場への呼びかけを積極的に行っていきたいという。一方、同グランプリから新たな展開も生まれている。受賞者有志による学生グループが自主的に「高校生劇評応援プロジェクト」をスタート。専用サイトを立ち上げ、舞台作品の紹介や劇評を発表するほか、演劇人のインタビュー、稽古場レポートなどの企画記事にも取り組み、同世代に舞台の魅力を発信している。



表彰式には受賞者の家族や教員等関係者が集まった



表彰式後の懇親会では受賞者同士の交流も深めた

助成団体: 特定非営利活動法人 日本学校演劇教育会 <https://ameblo.jp/engeki-kyoiku>
<https://www.hs-theatrereview-gp.jp> (高校生劇評グランプリ公式サイト)



若い世代の観劇機会の拡大と劇評へのチャレンジを推進

運営資金に乏しく手弁当で取り組んでいた事業でしたので、今回助成をいただけて大変ありがたかったです。より多くの高校生に本事業を知ってもらうため、これまでできなかったチラシの作成やウェブサイトの拡充など、広報分野の充実に役立たせていただきました。機会がありましたらぜひまたご支援をよろしくお願いいたします。

NPO 法人 日本学校演劇教育会
理事 久保田邦明さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

「～みんな集まれ世界の子ども～」 『チャイルドアートフェスティバル』開催」事業

在日外国人児童と日本の児童がアートを通じて交流する イベントを開催して、多文化共生の大切さを発信

「絵は世界の共通語」を合言葉に、2008年より「NPO法人国際教育情報交流協会」が中心となり行ってきた子どもの絵の国際交流事業が10周年を迎えた。これを記念して、在日外国人の子どもと日本の子どもがアートを通じて友達になろうというイベントを開催。400人を超える子どもや家族が参加し、共に楽しい1日を過ごした。



「チャイルドアートフェスティバル」を告知するチラシ



イベントには多数の親子が訪れた

10年・10カ国に及ぶ子どもの絵の 国際交流事業の記念イベントを開催

「NPO法人国際教育情報交流協会」が各種団体や有識者などと連携して取り組んできた日本とアジアの子どもの絵の国際交流事業は、2008年の「日中こどもの絵展」に始まり、タイ、韓国、インド、ベトナム、ネパール、ミャンマー、台湾、ラオス、そして2017年10月のインドネシアで、10年・10カ国に及ぶ。

「～みんな集まれ世界の子ども～チャイルドアートフェスティバル」は活動10周年を記念するイベントとして、これまで交流してきたアジアの国々をはじめ世界中の在日外国人の子どもと日本の子どもの交流を目的として企画され、AJOSCの助成を受け2017年12月9日に東京の四谷で

開催された。準備の途上、10年間絵の国際交流に取り組んできたイベント運営委員長の神山充晴さんが急逝され計画遂行に大きな痛手を受けたが、運営委員全員の結束と多くの在日外国人の協力で乗り越えての実施となった。運営委員のひとり、海沼乃扶代さんは当時を振り返る。

「イベントをなんとか成功させようというみんながひとつになり、10月以降はほぼ毎週運営委員会を開いて準備を進めました。運営委員会には中国や韓国、ネパールの人たちも参加してくれました。また、PRチラシやオリジナルTシャツの制作においても、中国・韓国やタイなど『こどもの絵展』で交流してきた国々の協力をいただきました。10年間の活動で築いてきたつながりがイベント開催に向けて大きな力になったと思います」

各国の歌や踊り、日本文化に親しみ 大壁画の共同制作に挑戦

「チャイルドアートフェスティバル」は、「日本インドネシアこどもの絵展」に出品した子どもたちの表彰式で始まり、第1部では、つのだりょうこさん(元NHK歌のおねえさん)の歌に続き、中国の古箏演奏、ネパールやミャンマーの子どもたちの民族舞踊、韓国の小学生のダンスなどが披露された。続いて、子どもたちが一緒に「わたしの生まれたところ」をテーマに大壁画描きに挑戦した。第2部では、陶芸、折り紙、お茶、書道・印鑑など日本文化に親しむワークショップが開催され、また日本、韓国、ネパールのおやつを楽しむことのできるコーナーもあり、大人気だった。当日は中国、ネパール、ミャンマー、韓国、ベトナム、フィリピン、ウクライナなど多くの在日外国人と日本の子どもや家族400人以上

が来場し、楽しく友好を深めた。そして参加した子どもたち全員にオリジナルTシャツがプレゼントされた。なお、同会場には12月9日～13日の5日間、日本とインドネシアの子どもの絵327点が展示された。

「子どもたちの喜ぶ顔は次の活動への力になります。この日の体験がひと粒の種となって子どもたちの中で育ってくれるとうれしいですね」と海沼さん。

法務省によると2017年末時点で国内の在留外国人は256万人と過去最高を更新し、それに伴い外国人児童生徒も増加傾向にあるという。さらに近年は中国や韓国、南米に加え、東南アジア諸国からの在留者も増えている。「次代を担う子どもたちが国や言葉や宗教を超えて交流し相互理解を深めることは、平和で豊かな社会づくりへの一歩となる」とこの活動の意義を語った。



日本とインドネシアの子どもの絵展とワークショップ



参加の子ども全員にプレゼントされた、子どもの絵デザインオリジナルTシャツ

助成団体: チャイルドアートフェスティバル実行委員会



活動10周年の記念イベントを開催することができました

この活動にかけるひとりひとりの思いは強く熱いのですが、思いだけでは前に進めません。10周年の記念となるイベントを開催することができたのも助成をいただけたおかげです。節目の年に国内で様々な国の子どもたちが交流する機会を持てたことは大きな喜びです。今後とも事業の継続にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

チャイルドアートフェスティバル実行委員会
海沼乃扶代さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

「中高生と保護者のためのキャリアフェスタ」事業

地元で進学や就職をすることで若者の流出を減らす 試みとして、キャリアを考える機会を提供

北海道・函館市に拠点を置き、ホームステイプログラムを中心とした幅広い国際交流事業をはじめ、グローバルキャリア形成などの人材育成、若者や生活困窮者の就労・自立支援、ボランティア・環境保護活動の情報発信などに取り組んでいる団体が、中高生と保護者を対象にキャリアを考えるきっかけとなるイベントを開催した。



キャリアフェスタを告知するチラシ



講演するロシア語講師・通訳で活躍するアリョーナさん

若者の人材育成や支援サポートを行う団体が 地域の学校を知ってもらうためのイベントを開催

地方の中小都市に共通した悩みとも言えるのが、若年層の流出である。観光都市として知られる北海道・函館市も例外ではなく、2014年には過疎地域に指定されている。少子高齢化や雇用の減少など、背景には簡単に解決できない困難な問題が多いため、若年層の流出を食い止めることは一朝一夕でできることではないが、ただ手をこまねいているだけでは、問題解決の糸口さえ見出すことはできない。

函館市に拠点を置き、若者の人材育成や支援サポート事業などに取り組む「一般財団法人北海道国際交流センター」では、こうした事態に少しでも歯止めをかけるべく、2017年12月10日に市内にある金森ホールで、「ご家族、お友達と一緒に将来を考える1日にしよう!」をコンセプトに、

「中高生と保護者のためのキャリアフェスタ」を開催した。

「高校卒業と同時に、多くの若者が進学や就職のために東京方面を中心に函館から出ていきます。これを少しでも食い止めたい。そのためには、地域の大学や専門学校に進学してもらったり、企業に就職してもらったりするのが第一歩と考え、それを知っていただくためのイベントとして、今回のキャリアフェスタを企画しました」

そう話すのは、この事業の推進役となった北海道国際交流センターの島香奈未さん。開催日の半年ほど前から準備のために動き出し、講師や開催場所の選定、ブース相談コーナーに出展してもらうための大学・専門学校・企業などへの働きかけ、チラシやポスターを掲示してもらうため市内の学校や電車・バス会社への広報活動などに取り組んだ。

相談ブースや多彩な講演を用意することで 広い視野、自分なりの視点を持ってもらう

当日、12時にオープンしたフェスタは、入場無料で入退場自由。函館大学、北海商科大学、北海道情報専門学校、専門学校札幌デザイナー学院、日本工学院北海道専門学校など9校の相談ブース、その他参加団体の資料コーナーが17時まで開設されて進路相談に応じたほか、並行して講演も実施された。

講演ではまず、スペシャルゲストとしてロシア語講師・通訳で活躍するアリョーナさんが登壇。「やってみないとわからない」をテーマに、自身のキャリア形成のポイント、大事にしているモットー、仕事の秘訣などについて話した。次に公務員、歯科衛生士、保育士、民間企業で働く先輩が登場してのホンネトーク、さらに「学生のうちから『キャリアデザイン』を考える」をテーマとしたコンサルタントの長谷川



コンサルタントの講演や様々な職種に就く社会人のフリートーク会を開催

孝幸さんの講演、「日本学生支援機構の奨学金制度について」と題した日本学生支援機構の藤森義夫さんの講演、「思春期だから子供がそっけないのは仕方ない?」と題した「NPO法人キャリア個性開発コミュニケーション支援センター」監査役の福田剛大さんによる講演と続いた。

「当日は高校生を中心に保護者、学校の先生など約150名にお集まりいただきましたが、参加者からは、『勇気もらった』『アリョーナさんの話を聞いて、自分でもできるかなと感じた』『相談やパンフレットの配布などで地元の方々に存在を認知していただけた』といったお声をいただきました。函館ではこれまでにあまりない試みで、自分たちとしても初めての経験でしたが、内容的には満足しています」と、島香さん。参加者にとっては、進路を考えるうえで貴重な一日となった。



会場では大学や専門学校などが集まり相談会を実施

助成団体: 一般財団法人 北海道国際交流センター

<https://www.hif.or.jp>



地域の学校に目を向けたり、先輩の話を聞くいい機会になりました

こうしたタイプの講演やセミナーがそもそも少ないなかで、一人でも多くの若者に視野を広げ、自分なりの視点を持って進路やキャリアを考える機会を提供したいという願いで、入場無料のイベントにしたかったのですが、AJOSCの助成によってそれが実現できました。また、講師への謝礼、広報宣伝にも大いに役立ちました。これを次のステップにつなげていきたいと思います。

一般財団法人 北海道国際交流センター
経営管理室チーフコーディネーター 島香奈未さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「青少年の健全育成『住居を喪失した、元非行少年・少女の社会的居場所創出・維持』事業

本気で更生したいと考える若者の自立を支援することで再犯にいたる流れに歯止めをかけて生きる力を育む

親や頼れる大人を失った子どもを守るのが「児童福祉」だが、いったん非行を犯した子どもは保護の対象外になることもある。しかも、非行を犯す子どもの背景には親の養育態度など、生育環境に問題があるケースが少なくない。それが負のスパイラルへの入口にならぬよう、更生を目指す少年・少女の自立支援を行う団体が東大阪市にある。



更生を目指す少年や少女が入居する自立支援シェルターを整備



開催したシンポジウムを告知するチラシ

更生のための自立支援シェルターの提供で非行から抜け出す社会づくりに取り組む

一口に「非行」という言葉で括られることの多い少年・少女の問題行動や犯罪だが、その背景には様々な事情や問題がある。その中でも大勢を占めるのが、保護者の養育態度に問題のあるケースで、ネグレクト(養育放棄)を含む虐待、蒸発や死去を伴う一家離散などにより、心身の孤独や飢えに耐えかね、そこから問題行動や犯罪に走ることが少なくない。しかも、その後保護者からの引き取り拒否にあい、帰住先を失うケースもある。少年犯罪の再犯率は毎年、過去最高を更新し、2015年には36.4%(法務省調べ)と高い数字になっている。

また、児童養護施設などで育つ少年・少女たちの中には、非行や犯罪によって施設退所を余儀なくされるケースもあり、児童福祉の観点から社会的擁護の期間内にあるにも関

わらず、生活拠点がなく、反社会的集団や性産業に流入するパターンも少なくない。

しかし、そのような子どもたちの中にもやり直したいと願い、更生を誓う人がある。そうした少年・少女たちを対象に、安心して更生に集中できる社会的居場所(自立支援シェルター)を整備し、地域社会での自立支援と自立後の見守りを行うことで、非行から抜け出すための社会づくりをしようとしているのが、東大阪市に拠点を置く「NPO法人チェンジングライフ」である。

団体の理事長である野田詠氏さんは、「非行や犯罪に走る子どもは加害者ではあるけれど、生育環境などの被害者であることを見落としてはいけない」と話す。立ち直りを目指す少年・少女は、弁護士、保護観察官、児童相談所の職員などから紹介されてくるといふ。

生活拠点の準備ときめ細かいケアによって被支援者が支援者になるサイクルを築く

チェンジングライフでは2011年のNPO法人化とともに、民間のワンルームのアパートを借り上げ、そこを自立支援シェルターとして更生を目指す少年・少女に入居してもらう事業に本格的に取り組んできたが、2017年度はAJOSCの助成を受け、東大阪市内に4室を新規で確保でき、自立支援シェルターは計6室になった。

そこに生活に必要な家電(冷蔵庫、洗濯機など)や生活必需品、食材などを準備し、生活しながら6か月を目途に自立を目指してもらうのが事業の大筋だが、個々人の状況によって期間は変わってくるという。その間、常勤、非常勤合わせて5名のスタッフが手分けしてシェルターを回り、面談、役所やハローワークなどへの同行といった支援を行い、さらに自立後も継続的な相談支援、就労支援を通じて、地域社会で孤立無援にならないようなケアを行っている。

「社会性を身に付け、仲間づくりの大切さを理解してもらうという意味で、週2回、自由参加の食事会を開催しています。そこには以前に支援した人が参加してくれたりして、被支援者が支援者になるというサイクルが生まれています。予算の確保や関係機関の無理解など課題はたくさんありますが、犯罪者を生まない社会の構築をやりがいに、今後も地道に活動を続けていきたいと思っています」と、野田さんは話す。

さらに、チェンジングライフでは助成を活用し、児童福祉、少年司法、社会福祉などの専門家を招いて「制度の隙間に落ち込んだ子どもたちの支援を考える」と題した活動報告シンポジウムを11月4日に大阪市で開催した。基調講演、実践報告、パネルディスカッションで構成されたシンポジウムに全国から約200名の来場者があった。「この問題に関心を持ってくださる方がこんなにいらっしやることに驚きました。実施してよかったです」と野田さんは話す。



シンポジウムには多数の来場者が集まった



シンポジウムで講演する理事長の野田さん

助成団体: 特定非営利活動法人 チェンジングライフ <https://changinglifehome.jimdo.com>



活動を続けるうえでの勇気をいただいたことに感謝しています

自前では2、3名が限度ですが、助成のお陰で6名を支援できました。中には大学に進学した子もいて、未来につながる支援になったと思います。シンポジウムも今後の活動を考えるうえでいい機会になりました。それがきっかけで、賛助会員も15名ほど増えました。再犯を減らせば、それだけ被害者も少なくなるわけですから、今後も支援の手を緩めずにやっていきたいと思っています。

NPO法人 チェンジングライフ
理事長 野田詠氏さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「依存症者の家庭で育つ子ども向けプログラム」事業

精神的、経済的負担を強いられる依存症者のいる家庭の子どもや母親を仲間としてケアすることに取り組む

アルコールや薬物、ギャンブルなど様々な依存症があるが、依存症への病理的理解が決して十分とは言えない状況の下で、依存症者を抱えた家族にかかる負担は相当なものがある。社会的なセーフティネットとして、その家族を支援する態勢が未整備の中で、体験者自らが中心となって支援やケアに取り組んでいる。



依存問題を抱える親子向けキャンプを告知するチラシ



ギャンブル依存症に関する講演会を開催

依存症者を家族に持つ家庭の親や子どもを支える態勢がほとんどない日本の状況

依存症者と生活をともにした経験を持つ家族や支援者など約20名が中心となって、2014年に横浜市で設立された「日本のお母さんに花束をプロジェクト」。ドキュメンタリー映画の上映会や子育て中の母親向けの講演会などを行ってきたが、現在は団体の拠点を代表の清水菜美さんが移住した沖縄に置いている。

現在は回復しているが、清水さんの夫は一時、ギャンブル依存症を抱えていた。そのために別居もし、保健師としての仕事と子育てに追われながらの生活を余儀なくされたが、家族の絆を取り戻した現在、その経験をベースに日本で子育てに悩む母親を元気にしたいとの願いを込めて団体名をつけた。「どのような状況に置かれようと、子育ては苦しいだけのものではない。お母さんが笑っているこ

とで周囲が変わっていくし、それが子どもへの最高のメッセージになることを伝えたい」と、清水さんは話す。

依存症は特に日本において社会的な偏見が強く、本人や家族も恥の意識から問題を明るみに出すことも拒むケースが多い。また子どもがいると、子どもへの影響を気にして相談を躊躇する傾向も強い。依存症者を家族に持つ家庭では、その影響で精神的にも、経済的にも負担の多い生活とならざるを得ないが、自助グループなどの回復のための組織の認知も十分とは言えず、また家族や子どもへの支援網も、ほぼ手つかずといった状況にある。そうした中で、「日本のお母さんに花束をプロジェクト」では依存症者のいる家庭の母親や子どもたちをサポートする活動を続けているが、2017年度はAJOSCの助成を受け、2つの事業に取り組んだ。

親子ツアーで感情を解放する機会を提供し講演会でギャンブル依存問題について学ぶ

その一つが、依存症問題を抱える親子を対象として8月10～12日に沖縄・南城市で実施した「親子de無人島体験ツアー」キャンプである。沖縄と神奈川から計30名(大人13名、子ども17名)が参加し、自助グループが使用するテキストの読み合わせとその感想の分かち合い、無人島での自然体験などを行った。

「子どもらしい体験の機会を提供すること、また親も問題から一時離れ、普段は蓋をして感じないようにしている自身の感情を解放することでリラックスする時間を提供することを目的に実施しましたが、仲間として三日間一緒に過ごすことで、距離が縮まっていくのを感じました。参加者の親からは、子どもが普段我慢して言えないことも発散できたようで、最後にはわがまままで言うようになったという感

想も寄せられました」と、清水さんと事務局の高尾美穂さん。

もう一つが、2018年3月4日に沖縄大学の教室で4時間にわたって開かれた講演会「治る?!ギャンブル依存症～家族と子どもに伝えたいメッセージ～」である。これは依存症の本人、家族、医療関係者、回復支援者、子どもの支援に関わる人々を対象にしたもので、会場には50名以上が参加した。

1部では当事者の語りとして、家族、本人、子どもの立場から3人の発表があり、2部では依存症問題に取り組む精神科医の伊波真理雄さんと、「NPO法人ギャンブル依存ファミリーセンター ホープビル」代表の町田政明さんによる講演と質疑応答があった。会場探しやチラシの配布などで苦勞したというが、手作り感と希望が感じられる印象に残る講演会だった。



沖縄大学で開かれた講演会

助成団体: 日本のお母さんに花束をプロジェクト



依存症者を抱えた家族や子どもの支援を継続していきます

当初の助成申請プログラムから変更がありましたが、その趣旨を汲んでくださり、内容を変更しての実行を認めてくださったこと、また、実績も少なく、専門性の低い未熟な団体であるにもかかわらず、助成をいただけたことに心から感謝しております。自分たちの思いを実現でき、支援者のネットワーク作りにも役立ちました。子ども食堂など、次の活動につなげていきたいと思っています。

日本のお母さんに花束をプロジェクト
代表 清水菜美さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「不登校・中退の子どもたちの支援者向けポータルサイト『キズキ不登校・中退ナビ』の構築」事業

不登校・中退の子どもたちの支援に役立つ情報を社会に発信し、支援の強化と支援者の拡大を目指す

文部科学省の平成28年度の調査によると、小学校から高校までの不登校や中退の児童・生徒は22万人にのぼるという。こうした困難を抱える生徒の学びを支援してきた「NPO法人キズキ」が、悩める子どもたちや保護者、支援者向けのポータルサイトをweb上に開設した。当事者の悩みを少しでも軽くし、支援の参考になるよう、支援事例や体験談などに基づく情報を発信する。



不登校・ひきこもり・中退経験者を個別指導で支援



現在5校ある塾で300人が学ぶ

不登校や中退に関する情報を一元化して発信する仕組みを構築

2011年の設立以来、不登校・中退・引きこもりの生徒のための個別指導塾や、中退の危機にある生徒のサポートなど、若者の学び直しを支援してきた「NPO法人キズキ」。2016年より受益者負担の塾の事業を株式会社に移管する一方、公益事業として子どもたちへの支援と支援者の拡大を図るための活動に注力している。その第一歩としてAJOSCの助成を受け取り組んだのが、不登校や中退に関する情報を一元化して発信するポータルサイトの開設である。同団体が7年にわたる活動を通じて蓄積してきた支援のノウハウや役立つ情報を、全国にいる悩める子どもたちや保護者、支援者において不安を感じている人

ちに広く届けるのが目的だ。不登校や中退支援に対する社会的要請の高まりの背景と情報発信の役割について、同法人理事長の安田祐輔さん、職員の田口俊明さんは次のように話す。

「現在5校ある塾では300人が学び、その8割近くが不登校や引きこもりの生徒です。さらに全国から当事者や保護者の方から月に100件近くの相談が寄せられています。みなさん、不安の中で具体的な情報をすぐ求めています。こうした要請に応えるためにも、多くの人がスマートフォンで情報を得る今こそ、web上できちんと有益な情報を届ける仕組みを構築する必要があると思いました。それがポータルサイトを開設した理由です」

支援事例に基づくケーススタディや当事者や経験者の生の声を届ける

サイト名は「不登校・中退ナビ」。キーワード検索でヒットしやすいようにストレートなタイトルを付けたという。サイトには、これまでの支援活動で積み重ねてきた1,000件以上の事例に基づくケーススタディや、精神科医などの専門家によるアドバイスを掲載するほか、塾に通う不登校・中退の当事者や経験者などの生の声もキャッチアップしていく予定だ。キズキでは、設立者の安田さんをはじめ、過去に不登校や引きこもりなどを経験して現在塾の講師として活躍している人も多く、「不登校や引きこもりになってどう生きていったらよいか悩んでいる人に対しては、漠然とした情報ではなく、自分の進路を見つけ出していくための具体的なロールモデルを示すことが大事」という考えのもと記事作りを

進めている。加えて、煽るような内容や表現を避け、読んだ人の気持ちに楽になるような記事を心掛けていくという。

「サイト内に着々と記事をアップしているところですが、記事の内容にはこだわっていきたくです。今後は記事がきちんと読まれているかをデータで分析していく必要があると考えています。より多くの人に有益で鮮度の高い情報を届けるためにも、ただ発信するだけでなく、読者の反応に対応して修正していくプロセスを踏んでいきたい」と安田さん、田口さん。

当事者である子どもたちや保護者はもちろん、彼らの支援に関わっている学校の教員やスクールカウンセラー、地域社会の人々などに広く活用してもらえるようなサイトを目指している。



不登校や中退などに関する情報を発信する「不登校・中退ナビ」



同じような経験をした講師のコラムやインタビューなどを掲載

助成団体: 特定非営利活動法人 キズキ

<https://kizuki.or.jp>



何度でもやり直せる社会を目指して活動しています

不登校や引きこもりが社会問題となる中、何度でもやり直せる社会をつくるという理念の下に活動しています。困難を抱えた子どもたちの支援を強化し、支援者を増やすために、webの活用は最も効果的な方法だと考えています。成果が見えづらい事業ではありますが、ご理解をいただけてとても感謝しています。

NPO法人 キズキ
理事長 安田祐輔さん(左) 理事 田口俊明さん(右)

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「フードバンク活動を生かした生活困窮世帯の子どもへの学びの場と居場所づくり」事業

貧困世帯の子どもの低学歴化や貧困の連鎖を防ぐため、定期的な学びの場と自由に過ごせる時間を提供

経済的に厳しい家庭で育つ17歳以下の子どもの割合を示す「子どもの貧困率」が13.9%（2016年厚生労働省）という日本。2008年の発足以来、「フードバンク山梨」では、食料支援を必要としている生活困窮世帯に食品を届けるフードバンク活動を実施してきたが、学習と食事を合わせて提供する支援策「えんぴつひろば」を新たにスタートさせた。



子どもたちに学習と食事を提供する「えんぴつひろば」



「えんぴつひろば」の活動を告知するチラシ

フードバンクこども支援プロジェクトで把握した問題を解決するための新たな試みに着手

「認定NPO法人フードバンク山梨」では行政や学校と連携し、学校給食のない夏休み、冬休みに子どものいる生活困窮世帯に集中的に食料支援や学習支援を行う「フードバンクこども支援プロジェクト」を実施している。2016年冬に行った第4回プロジェクトでは511世帯、1,078人の子どもたちを支援したが、こうした取り組みを通して、これまで見えなかった多くの子どもたちの困窮状態を改めて知ることになった。

先生方へのアンケートで、貧困によって他の子どもと生活格差が生じ、それが自己肯定感の低下やいじめにつながるリスクが高まることが示されたほか、同法人が実施している「食のセーフティネット事業」で食料支援の対象となっ

た保護者へのアンケート結果や同法人に届くハガキを見ても、ひとり親や低収入の世帯が多いため、「塾に通わせられない」「子どもの学習に目が届かない」など、切実な声が寄せられているという。

このままでは将来的に生活困窮世帯の子どもの低学歴化、貧困の世代間連鎖につながりかねないと危惧する同法人では、そうした子どもたちを対象とする定期的な学習支援と食糧支援の場として、2017年に「えんぴつひろば」という事業をスタートさせた。山梨県の中央市と都留市の2会場で行われた事業だが、このうちの中央市田富総合会館を会場に行われている「田富えんぴつひろば」の講師謝礼、教材・備品費、食材費、広報活動費などの運営費用全般に、AJOSCの助成が活用された。

学習と食事、ゆとり時間を定期的に提供する「えんぴつひろば」を開設

田富えんぴつひろばには、中央市と南アルプス市の小学校6校に通う1年生から6年生の23名が登録しているが、これは同法人が通常のフードバンク活動で食料支援をしている家庭、および学校や福祉機関などで支援が必要と判断された生活保護世帯などのうち、参加を希望した子どもたちである。

原則、毎週土曜日の10:00～15:00に開催され、午前中はパズル形式のドリルを活用した学習や持参した宿題による学習（各45分）を行い、昼食をはさんで、午後はのんびりタイムと呼ばれるレクリエーションを中心とした自由時間となっている。さらに貧困によって失われている「経験」を補うため、コンサートや映画鑑賞、フルーツ狩りなども実施している。

学習時間の講師、昼食の準備や調理には、元教員、学生、一般市民などのボランティアがあたっている。「講師からは『子どもたちの人間関係づくりに役立っている』『回を重ねるにつれ、勉強に熱心に取り組むようになった』、保護者からは『普段、できなかった用事を済ませることができる』『仕事に出かけられる』といった声が寄せられています。当の子どもたちの中には、『ここが自分にとっての塾だ』『ごはんがおいしくて、お腹いっぱい食べられる』と話す子もいます」と、学習支援担当である花輪由記子理事は話す。

同じく学習支援担当の河野有良さんは、「子どもたちは落ち着いて学習したり、満足に食事をしたり、のんびりタイムに友だちやボランティアの学生と気兼ねなく触れ合うことで、自分だけの世界から周囲の世界への目が開かれるようです」と、場づくりの重要性を語る。同法人では今後さらに、この事業を広げていく予定だという。



外国人講師による英会話授業も開催



学習以外にも子どもたちが楽しめるレクリエーションを実施

助成団体: 認定特定非営利活動法人 フードバンク山梨

<https://fbyamana.fbmatch.net>



貧困の連鎖を未然に防ぐため、ボランティアと協力して活動を継続

私たちの活動は公的な助成金が少ないため、企業や市民の方々からの寄付によって成り立っています。今回、AJOSCの支援により、生活困窮世帯の子どもたちに向けて、昼食も含めて一日過ごせる学習教室を毎週、実施することができました。感謝しております。全国的にも珍しい取り組みですが、さらに活動の範囲を広げ、この事業を推進していきたいと思っております。

認定NPO法人 フードバンク山梨
理事長 米山けい子さん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「もしものときに子ども達を救いたい!『子ども&中高生SOSリーフレット制作プロジェクト』」事業

小中学生が性被害にあわないための知識や対応策を記載した、わかりやすいリーフレットを制作・無償配布

性暴力や性被害に関するニュースが報道されているのをよく見かけるが、子どもがその犠牲になった場合、測り知れない影響を心身に被ることになる。これまで子どもたちに命の大切さを伝え、自尊感情を育むための活動に取り組んできた「誕生学協会」では、子どもたちが性被害にあわないためのリーフレットを制作し、全国の小中学校に配布した。



AJOSCの助成で制作した「大切なあなたへ」[大切な心とからだの守りかた]

性犯罪や性被害に「あわない」ための予防と「あってしまった」ときの対応策をまとめる

「公益社団法人誕生学協会」では、子どもたち一人ひとりが自らの命や体を大切に思う心を育て、自己肯定感や自尊感情を高めるとともに、妊娠や出産に対する正しい知識の提供・普及、さらに、未来の少子化対策にも貢献するという考えのもと、10年以上にわたって全国の学校からの依頼を受け、毎年1,000講座近い「誕生学スクールプログラム」を実施してきた。

また、2016年度にはAJOSCの助成を受け、中高生の予期せぬ妊娠や中絶、デートDV、性被害などを予防し、性と心、体を守るための授業「ガールズエンパワメントプロジェクト」をスタートさせるとともに、もしものときの助けとなる全国の相談窓口を紹介した実践的な情報冊子を制作し、授業を受けた女子生徒に配布した。

さらに2017年度、誕生学協会では再びAJOSCの助成を活用して、小中学生が性被害にあわないための知識や、もしものときの対応策、保護者の心得、緊急連絡先などを記載したリーフレット『大切なあなたへ「大切な心とからだの守りかた」』(A4/4ページ、カラー)を制作し、日頃から性犯罪や性被害について関心を持ち、学校や家庭で話題にしてもらうために、全国の小中学校や関係団体に無償配布した。

「警察関係者が作成し、実際に配布しているものを了解を得たうえで活用させていただき、新たに編集したもので、誕生学スクールプログラムやガールズエンパワメントプロジェクトを実施した学校を中心に、希望があったところに配布しています。昨年度は約500校、18,000名にお届けできました」と、事務局長を務める安齋和子さんは話す。

何を大切に、どうやって助けを求めるかを子どもたちにわかりやすく示したリーフレット

『大切なあなたへ』を制作・無償配布する背景にある思いを、安齋さんは以下のように話す。

「毎日のように性暴力や性被害による悲惨なニュースが伝えられ、またニュースにならなくても、デートDVによる悩みや引きこもり、さらに親族や教師などからの性虐待が、残念ながらどこかで確実に起こっています。子どもたちは、こうした悲劇や事件が自分の身に起きたとき、為す術を知りません。家族や友だちにも言えず、心を痛め、大人になるまで長い間苦しみ続けることも多いです。それを学校側が未然に防ぎ、適宜、救いの手を差し伸べることも現実的には難しい状況です。さらに子どもたちは緊急時や困ったときに他者に助けを求めることがなかなかできないという現実があります」

そうした子どもたちが悲惨なことに直面したとき、いつ、どこに(誰に)、どうやって助けを求めたらいいのかをわかりやすく示す包括的なSOSカード(リーフレット)として、『大切なあなたへ』を制作したという。「子どもにわかりやすいように、表現方法を工夫し、プライベートゾーン(水着を着て隠れる部分、口)の大切さ、日頃から気をつけること、被害にあった自分を責めないこと、まわりにいる大人が気をつけるべきこと、性被害にあったときの連絡先などが記載されている。

また、同協会では今回の助成を活用し、主に中高生が性に関する知識・情報・感覚を身に付け、自身の持つ生きる力への気づきを促すウェブ検定『SHE(Sexual Health Education)検定』を性暴力撲滅に向けた啓発活動を手掛ける「NPO法人しあわせなみだ」と協働開発。そのサイトを2018年2月に立ち上げている。



性に関する正しい知識・情報についての問題をときながら理解できる「SHE検定」<http://she.shiawasenamida.org/>

助成団体: 公益社団法人 誕生学協会

<http://www.tanjoh.org>



やがて母や父になる子どもたちに命の大切さを伝えたい

虐待やいじめ、不登校や引きこもり、貧困の連鎖など、子どもたちを取り巻く環境が悪化する中で様々な支援が展開されていますが、その基本には子どもたち自身が自尊感情を高めるにはどうすればいいかという視点が欠かせません。そのために心、体、性を含めた自分の命を大切にすることの重要性を今後も私たちの活動を通して訴えていきたいと思います。

公益社団法人 誕生学協会
代表理事 大葉ナナコさん

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(やすらぎ・いたわり)

「生活困窮家庭の児童学習支援 『無料学習塾～レインボースクール～』」事業

学ぶ意欲はあるが経済的理由で学習塾や家庭教師を利用できない子どもを対象にした無料学習塾を開設

厚生労働省の発表によると、子どもの貧困率(相対的貧困率)は2016年に13.9%となっている。貧困が原因で進学を断念せざるを得ない子どもも決して少なくなく、いわゆる貧困の連鎖が社会問題となっているが、宮崎市に拠点を置き、子育て・家庭教育、青少年健全育成を事業とする団体が、無料の学習塾を開設した。



無料学習塾「レインボースクール」の開校式



マンツーマンに近い形で指導する学習支援が好評

生活困窮世帯の小学校4年生から6年生を対象とした無料学習塾を週1回開設

「NPO法人家庭・青少年教育ネットワーク」では、2017年度にAJOSCの助成を受け、学ぶ意欲はあるが、経済的理由で学習塾や家庭教師を利用できない小学校4年生から6年生の児童を対象とした無料学習塾「レインボースクール」を開設した。同法人の池本要理事長は、「虹は1色ごとにすばらしいが、それが7色まとまることで、さらにすばらしいものとして輝く。それと同じように、それぞれに個性や資質を持つ子どもたちが一緒に学び合うことで、さらに心豊かで明るい人間に育ってほしいという思いで、レインボースクールという塾名にしました」と、設立の意図を話す。

同法人の所在地である宮崎市大塚台地区の小学校を通じて、小学校4年生から6年生の児童全員に募集チラ

シを配布したところ、15名程度の募集定員に対し、4年生3名、5年生3名、6年生8名が参加することになった。6月にスタートしたレインボースクールは、原則週1回(水曜日)、17時から20時まで、大塚台市営住宅B集会所を会場に開かれた。

学習指導として、普段使っている教科書やワークブックなどを教材に、1時間目(17:15～18:25)は学校の宿題を、休憩をはさんだ2時間目(18:40～19:30)は苦手克服を目的に各自の課題に取り組んだ。また、毎月最終週には、協調性や対人関係能力を向上させるためのSST(ソーシャルスキルトレーニング)を行ったほか、特別活動として、8月に1泊2日のキャンプ、12月にクリスマス会を実施した。さらに希望者には、保護者支援として子育て教育相談も行った。

マンツーマンでのきめ細かい学習支援で 子どもの学力向上と地域の意識啓発

このレインボースクールの一番の特徴と言えるのが、学習指導を担当する学習支援員の多さである。地元の大学に通う大学生を中心に、教職員OB、一般社会人20名が登録者として参加し、基本的に子どもと支援員が1対1、もしくは2対1と、ほぼマンツーマンで学習指導にあたった。そのため、参加した子どもからは、「わからないとき、疑問をもったとき、すぐに聞くことができてよかった」「学校とは違ってマンツーマンで指導してもらったので、わからないときはすぐ質問もでき、理解しやすかった」といった声が寄せられた。また、6年生のために英語の指導を組み込んだことも好評だったという。

「6月から3月までの10ヵ月間で43日、教室を開設し、児童はのべ456名、学習支援員はのべ316名の参加となりま

した。児童の中には学校での成績が向上し、保護者から感謝の連絡を受けたり、無料だったので経済的、精神的に助かったという声も聞かれました。中にはレインボースクールを居場所として捉えている子どももいました。また、地域の方々に子どもの貧困問題について考えていただく機会となりましたし、地域の子どもは地域で育てるという意識啓発や機運の醸成を図ることができたと感じています」と、池本さんはレインボースクールの成果について振り返る。

今回の事業を通じて、行政機関や地域の関係団体の同法人に対する理解と認識が深まり、今後の協力態勢の基礎が築けたことに加え、地域に貢献したいという長年の希望が実現できた。規模や期間は縮小せざるを得ないものの、2018年度もこの事業を実施していくという。その継続と成果に地域の期待は大きい。



8月に開催したキャンプには多数の子どもたちが参加



学習支援するだけでなく、子どもたちの居場所づくりにも寄与

助成団体: 特定非営利活動法人 家庭・青少年教育ネットワーク



生活困窮家庭への経済的支援や子どもの学力向上に寄与したい

20年間、宮崎県教育委員会に籍を置いて社会教育に取り組んできましたが、この分野は誰かがやらないと、受益者に機会や場を提供できません。学習支援員は有償でなくては事業の継続が難しいことが経験的にわかっているので、謝礼の確保などの問題がありますが、今後も助成金などを活用し、地元の退職校長会などの協力を得て事業を継続できればと考えています。

NPO法人 家庭・青少年教育ネットワーク
理事長 池本要さん

特別助成 熊本地震復興支援事業

「子どもの笑顔をつくる『移動遊園地』プロジェクトin熊本」事業

参加して楽しむ遊びイベントを開催して熊本地震被災地の子どもたちを笑顔に

熊本地震で被害の大きかった熊本県菊池郡大津町で「オーズコドモカーニバル」が開催された。「被災した子どもたちが笑顔になれる場を」と、「NPO法人グリーンバード」が主催して本年度2回目。競技やゲーム、ワークショップ、バザーなどが楽しめ、スタッフの一員として仕事体験もできる。子どもたちが参加して楽しむイベントとなった。



子どもが思いっきり遊べるイベント「オーズコドモカーニバル」を開催



イベントを告知するチラシ

全国約80チームのネットワークを生かして被災地支援活動を展開

「NPO法人グリーンバード (green bird)」は「きれいな街は、人の心もきれいにする」をコンセプトに、全国に約80チームを組織して清掃活動を展開している団体である。東日本大震災以降はそのネットワークを生かして被災地の人たちと交流しながら、宮城県仙台市の泥かき作業・農作業補助や、福島県いわき市で「オーガニックコットンプロジェクト」などの支援活動を行ってきた。そして、2016年4月に発生した熊本地震。たまたま熊本チームのメンバーに被害の大きかった大津町の役場職員がいたことから、すぐに現地の状況が伝えられ、熊本近隣チームの有志を募り支援活動を開始した。有志の一人、福岡チームの谷村真澄さんは次のように話す。

「被災地でいろいろ見聞きして見てきたのが、子ども

たちの心のケアの問題でした。余震への不安や恐怖で寝付きが悪くなった子がたくさんいて、同様にその親が抱える不安やストレスも深刻になっていました。そこでグリーンバードとしてできることを話し合い、『子どもが笑顔になれば、みんな笑顔になる』をコンセプトに、子どもが思いっきり遊べるイベントを開催することにしました。年に一度の移動遊園地を楽しんでもらえたらいいなと思いました」

こうして「オーズコドモカーニバル」は、大津町、現地の「NPO法人こども・サポートみんなのおうち」の協力のもと、大津中央公園を会場に2016年7～8月に3日間開催されて好評を呼び、さらにAJOSCの助成を得て2017年の11月3～5日の開催が実現した。当初9月の開催予定も台風で延期を余儀なくされたが、期間中1,000人以上の親子が来場した。

子どもスタッフと限定通貨を導入した参加型イベントを開催

イベント会場は、ミニ遊園地エリア、競技場エリア、ワークショップエリア、バザーエリア、縁日エリアなどに分かれ、それぞれに子どもが楽しめるコンテンツが盛りだくさん。基本的な構成は前年と同じだが、今回はさらに「子どもが主体となってイベントに参加できるような仕組み」を取り入れたという。それがイベント限定の通貨「オーズ」の導入だ。会場内で遊ぶにはオーズが必要で、入場料500円で3オーズとオリジナルウォレットがもらえるほか、使わなくなったおもちゃなどを持ってくとオーズと交換でき、それを使って竹ぼうくりレースなどの競技や、アクセサリ作りや工作が楽しめるワークショップに参加したり、バザーで買い物をする事ができるという仕組みだ。

さらに、今回は子どもの運営スタッフを募集し、イベントの手伝いをしてくれた子どもたちには報酬としてオーズが支払われる。子どもたちが初めての仕事体験、ボランティア体験ができるよい機会となり、小学生から高校生まで20人近くがスタッフとして参加した。

イベントを振り返り、谷村さんは「たくさんの笑顔と子どもの可能性が感じられた3日間だった」という。

「今回はただ遊ぶだけでなく、イベントに参加しているという実感が大きかったのだと思います。子どもたちは皆とても満足そうでした。特にスタッフとして参加した子は、自分から仕事を見つけてどんどん主体的に動いてくれるようになり、1日でかなりの成長を見せてくれました。そして、そんな子どもたちを見守る親御さんも本当にうれしそうでした。次につながるイベントになったと思います」



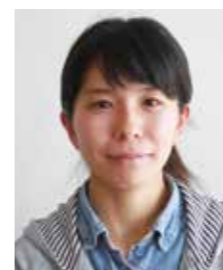
子どもたちが楽しめるように工夫をこらしたコンテンツが盛りだくさん



イベントには数多くの親子連れが訪れた

助成団体: 特定非営利活動法人 green bird

<http://www.greenbird.jp>



子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができました

熊本地震発生2年目となり各方面からの援助が減るなか、助成をいただけて本当に感謝しています。おかげさまで2016年に続いてさらにバージョンアップした内容でイベントを開催することができ、子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができました。今後も地域の方たちが主体的に参加できるような支援活動を続けていきたいと思っています。

NPO法人 green bird
谷村真澄さん

特別助成 東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業

「福島県への継続文化支援活動」事業

人形劇を中心とする文化的事業を通じた復興支援によって被災地の子どもたちに明るい笑顔を取り戻す

子どものためにより優れた舞台芸術を提供することを目的に設立された「札幌市こどもの劇場やまびこ座」と、全国初の公立人形劇場として誕生した「札幌市こども人形劇場こぐま座」では、子どもたちが元気を取り戻すことが周囲の大人や被災地の元気を取り戻すことにつながると考え、東日本大震災の被災地支援を続けている。



福島県内の幼保などを中心に「福島応援人形劇公演」を27回実施



鑑賞後、子どもたちは人形劇の舞台裏も見学

現地で求められる支援の形を見極めながら劇場使用団体などと支援プロジェクトを発足

「札幌市こどもの劇場やまびこ座」館長の矢吹英孝さんは、東日本大震災直後の2011年6月に福島市、郡山市、南相馬市などを中心に、東京電力福島第一原発事故の影響で放射線量が比較的高いエリアに足を運んだ。札幌市で舞台芸術や人形劇を提供する劇場として活動している自分たちが、現地の子どもたちのためにどんな支援ができるか、その形を探ることが目的だった。そこでは、当然のことながら子どもたちは外遊びができない状況が続いていた。行政や子どもたちを対象に活動を続ける市民団体、NPO法人、施設など、現地の関係者と話し合いを続ける中で、人形劇などの公演にとどまらず、「自分たちも一緒に加わって、相互交流という形で何かをしたい」という、支援に対する要望が出された。

そこで、矢吹さんたちは、子どもたちのために何かをしたいと思いつきながら悶々としていた、やまびこ座やこぐま座に出演している約40団体の劇団やアーティストに声をかけ、「やまびこ座・こぐま座東日本大震災復興支援プロジェクト」を立ち上げ、現地のニーズを最優先しながら、「福島県への継続文化支援活動」事業を始めることになった。

同プロジェクトがスタートしたのは、大震災翌年の2012年度のこと。やまびこ座、こぐま座での公演時において募金箱を設置し、義援金を募るほか、ゴールデンウィーク中に両劇場で実施してきた特別企画を東日本大震災チャリティ公演として実施し、そのほか毎年、事業実施に向けた打ち合わせや現地調査を踏まえたうえで、福島県内での人形劇や伝統人形芝居の上演を中心に、様々な支援活動を展開してきた。

社会に対する自らの役割を見つめ直しつつ継続的に頻度・密度の高い支援事業を実施

昨年度、AJOSCの助成を受けた同プロジェクトでは、福島市、二本松市、郡山市、川俣町などの幼稚園、保育園、学童保育、公共施設、復興住宅などで「福島応援人形劇公演」を27公演（入場者・参加者数2,300名）、地域交流事業である「あそびの劇場～札幌のやまびこ座・こぐま座からあそびのキャラバン隊がやってくる～」を3回（同933名）、人形浄瑠璃体験ワークショップを28回（同1,151名）、川俣高校アウトリーチ活動を3回（同22名）実施した。

このうち、「あそびの劇場」は、現地のスタッフも一緒に参加して公演の合間や待ち時間に工作会や昔あそび、木のおもちゃ、折り紙、お絵かきなどを子どもたちに楽しんでもらうものである。また、人形浄瑠璃体験ワークショップは、

子どもたちに日本の伝統芸能に触れる機会を提供し、その楽しさや魅力に気づいてもらうことを目的に行われているものだが、その一環である「復活! 高倉人形プロジェクト」は、かつて郡山市日和田地区で活動し、現在は衰退してしまった人形浄瑠璃の高倉人形を復活させようというもので、子どもたちに交じり、地域の大人たちも参加している。川俣高校アウトリーチ活動は、川俣高校3年生の選択授業「子どもの発達と保育」の中で、人形劇を通じた子どもとの関わりをテーマに人形劇の指導を行うものである。

「やまびこ座・こぐま座を利用している人形劇団や現地のコーディネーター、大学生のボランティアなどにご協力をいただきながら、人形劇が子どもたちや社会に対して持つ役割を改めて見つめ直すいい機会になっています」と、矢吹さんは活動を振り返った。



人形浄瑠璃体験ワークショップを開催



積み木や折り紙など様々な遊びが体験できる「あそびの劇場」を実施

助成団体: やまびこ座・こぐま座東日本大震災復興支援プロジェクト <http://www.syaa.jp/sisetu/gekijou/index.html>



「忘れないでください」という現地の方々の声を胸に刻んで活動

子どもたちの明るい顔や元気な笑い声に接し、関係者から継続に対する感謝のお言葉を聞くと、逆にこちらが元気づけられます。やはり現地に足を運ぶことでしか見えてこないものがあります。そうしたものを北海道の皆様へ伝えていくことも使命の一つだと思っています。助成をいただくことで、継続した支援活動を行うことができます。ありがとうございました。

札幌市こどもの劇場やまびこ座
館長 矢吹英孝さん(左) 同主任指導員 安田晃子さん(右)

特別助成 東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業

「被災地の子ども達の育成プロジェクト」事業

東日本大震災の被災児童や被災地の支援と 若者対象の防災教室を実施

東日本大震災から7年。今も被災地には惨禍の爪痕が残り、心が傷ついたままの子どもたちがいて、疲弊したコミュニティがある。神奈川県大和市を拠点に、被災地や被災した子どもたちの支援を続けるとともに、震災の経験を学ぶことで防災に役立ててほしいと若者を対象に防災教育に取り組むボランティア団体がある。



多数の高校生が参加した「宮城県被災地防災研修」



震災当時の様子を語る住民と話を聞く高校生たち

支援の網の目からこぼれた住民を支援しながら 神奈川県の若者への防災教育に取り組む

阪神淡路大震災後に地域でのネットワークの必要性を感じ、1999年に立ち上げたという「一般社団法人やまと災害ボランティアネットワーク」（以下、YSV）では現在、幼児から大学生などへの福祉と防災を組み合わせた福祉防災教育、被災児童・被災孤児・高校生語り部などの支援、被災地へのボランティアバス運行、ボランティアの派遣・コーディネートなどの活動を展開している。

東日本大震災後は、被災した子どもたちの支援活動やコミュニティ支援活動などを通して継続して被災地との関わりを続けているが、「被災地では公的であれ、民間であれ、様々な支援が行われていますが、そうした支援の網の目からこぼれた方々があります。そうした方々、特に子どもたちを応援しているんだよという気持ちを伝えるために活動

を続けています」と、YSVの代表理事の市原信行さんは、活動の根底にある思いをそう話す。

震災直後、被災地支援に出かけた市原さんは、そのまま被災者と一緒に避難所で半年間、生活をともにし、さらに2013年まで仮設住宅やアパートで暮らした経験を持つ。そのなかで、ボランティアとして来た兵庫県立舞子高校環境防災科の生徒たちが、宮城県東松島市野蒜地区の被災したお寺の墓所を埋め尽くした土砂を黙々と取り除き、骨を拾い集める作業を目の当たりにし、地元の神奈川県でもこうした高校生たちを育てたいという思いで、福祉防災教育活動に力を入れるようになった。「ボランティアや支援活動に取り組んでいるのは年輩の方々が多く、尻すばみになりがち。子どもたちに現地の情報を発信して、一緒に仲間として活動してもらえれば将来的に効果的」という思いもあるという。

被災地防災研修や児童養護施設の支援で 防災やボランティアに対する意識向上を図る

こうした活動の一環として実施した事業にAJOSCの助成が役立てられているが、その一つが、高校生を参加対象にして、2017年8月7日～9日に行った「宮城県被災地防災研修」である。これは2012年から毎年行なっているもので、今回は神奈川県内を中心に静岡、京都、熊本、千葉の高校生35名が参加した。7月22日に事前説明会を行い、研修初日の夜に横浜駅西口からバスで出発、2日目に旧大川小と石巻西高で津波の犠牲者に献花をした後、子どもを亡くした保護者や教師から当時の話を聞き、被災地の住民や高校生と交流を図り、さらに宿舎で防災への理解を深めるための意見交換、DITS（SNSを使用した災害情報投稿システム）の使い方などの研修を行った。最終日は奥松島宮戸島月浜地区の漁師さんに話を聞いた後、海岸の清掃を行い、帰路に就いた。参加した高校生からは、「実際に被災地を見て、被災した方々の話を聞

けて有意義だった」「不自由なく生活できていることに感謝したい」といった感想が寄せられた。

また、8月3日～6日には自然と触れ合う機会の少ない仙台市内の児童養護施設に入所している子どもたちを石巻市網地島に招き、自然体験学習や島の高齢者の人々と交流する「児童養護施設の子どもの交流支援in網地島」を実施した。これは地元の有志が2007年に始めた「網地島ふるさと楽好」がベースとなったものだが、YSVでは2012年からその支援を行っている。今回は大和市在住を含む大学生6名と社会人6名のボランティアも現地入りし、参加した子どもたち約40名の体験学習やイベントのサポート、島民の手伝いなどを行った。

さらに、2018年3月9日には大和市の文化創造拠点シロウスで、10日には神奈川県民センターで、震災時に東松島市で被災し、当時の被災状況や今の被災地の様子などを語り伝える活動に取り組んでいる高校生と大学生などを招いて福祉防災講演会を開催した。



児童養護施設の子どもの交流支援をサポート



大学生や社会人が参加し、子どもたちの食事の準備などを手伝った

助成団体: 一般社団法人 やまと災害ボランティアネットワーク <http://ysvn.web.fc2.com>



現地や協力機関とのネットワークを深めながら被災地支援を続ける

マスコミ報道だけでは被災地の現在の状況がなかなか伝わらないのが現状です。今後も被災地の子どもたちやコミュニティと関わり続けながら、未来を担う若い人たちに生の情報を伝えていきたいと思っています。若者には、その力があると信じています。活動を継続するために今回の助成は大いに役立ちました。今後も助成を継続していただければ幸いです。

一般社団法人 やまと災害ボランティアネットワーク
代表理事 市原信行さん

特別助成 東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業

「避難者交流サロンを市民と避難者の交流サロンへ転換する」事業

被災地からの避難者も地域の1人として共生するために 交流サロンや様々な活動を通して関係を深める

2011年の東日本大震災、原発事故の発生直後から千葉県松戸市内に避難してきた人々を支援しているNPO法人や市民団体が一つになって結成した「東日本大震災復興支援松戸・東北交流プロジェクト」。現在、千葉県東葛飾地域に居住する広域避難者の支援に活動の幅を広げ、さらに新たな取り組みも始めた。



被災者交流会を告知するチラシ



定期的に被災者同士の交流や相談会を行っている

避難者と一言ではくれない現状の中で より個別性の高い支援態勢構築の必要性

全国避難者情報システムによれば、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故によって千葉県東葛飾地域5市に避難している人の数は1,156人となっている。その内訳は、松戸市261人、柏市438人、我孫子市70人、流山市223人、野田市164人で、それを避難元別に見れば、福島県1,022人、宮城県68人、岩手県42人、その他24人である(2017年11月30日現在)。

この数字はあくまでも統計として合計したものであり、たとえば原発事故の場合、避難指示区域からの避難者、それ以外の区域からの自主避難者など、事情や背景の異なる避難者が混在している。さらに大震災から7年が経過し、その避難者のあり様も様変わりしつつある。「もはや、『避

難者』という一言ではくれない」と、事務局長の奥田義人さんは話す。

「避難者のみなさんの意識の多様化、多極化が拡大しています。大きく分ければ、あくまでも避難を帰還までの一時的なものとする見なす人、避難先に定住を決めた人、避難先から新たな定住地を求めて移住する人など、仕事や家族形態、帰還後の生活環境などによって、その考え方は千差万別であり、一律に避難者と位置づける表層的な見方では整理できない複雑さがあります」

将来的に帰還、定住、移住と、いずれを選択するにせよ、避難者が日々、暮らしているのは、現にいま住んでいる地域社会である。そこで一人の地域住民として生活を営んでいけるよう、これからは「個別性のある支援態勢が求められる」と、奥田さんは話す。

交流の拠り所となる開放的なサロンを運営しつつ 避難者と市民が一層深く関わる道を模索

その基本となるのは、避難者の話を聞いたり、避難者同士、あるいは避難者と支援者が交流するための拠り所となる場所だという。そのために松戸・東北交流プロジェクトでは、JR松戸駅そばで「黄色いハンカチ」という交流サロンを運営している(2018年5月にJR北小金駅前に移転)。毎週月～木曜の10:00～16:00オープンで、利用料は200円(飲み物とお菓子付)。「孤独にさせないことをモットーに、一人でやってきても、そこにいる人と気軽に交流でき、地域と関わるための第一歩となるような雰囲気づくりを心掛けています」と、奥田さん。運営には12名の運営委員があたるが、そのうちの6名は避難者が担っているという。

このサロンを拠点に、松戸・東北交流プロジェクトでは、手芸、囲碁、園芸、歌唱、健康などのやりがい講座、避難者・市民の手作り品の販売、避難者交流会、相談会、自

主避難者交流会、防災講座、支援コンサートなど、様々な支援活動や交流活動に取り組んでいる。南相馬市からの自主避難者である副代表の高田良子さんは、「交流や活動を通じて、ここに集う人の心が『個』にとどまらず、『公』を考えようという気持ちに変わっていくのがすばらしい。受け身だけでは、人は変わることができません。その意味で、自分のあり様を考えるきっかけづくりになっていると思います」と、自分たちの活動を振り返る。

松戸・東北交流プロジェクトでは、従来から暮らしている市民同士の絆が希薄化しつつある現状を踏まえ、この傾向を打破する手がかりとして、避難者と市民との交流の場としてサロンを活用することで、単なる避難者支援という枠を超えた市民活動へと展開していくことに取り組んでいる。そのための広報活動費や講師・ボランティアへの謝礼を中心にAJOSCの助成が役立てられた。



被災者やスタッフが参加しクイズ大会やミニコンサートを行った活動報告会



医師を招いて相談会なども実施

助成団体: 東日本大震災復興支援松戸・東北交流プロジェクト <http://yellowhandkerchief.web.fc2.com>



避難者と関わり続けることで3.11以前／以後の変化を忘れない

今回の助成申請をきっかけに、AJOSCが続けてきた活動を初めて知り、驚いています。われわれの活動資金はAJOSCのような機関からの助成や補助金に頼らざるを得ないのが現状ですが、そこに甘んじることなく、避難者支援のためにも収入を図る方向に持っていきたいと思っています。今回の助成でその態勢づくりに着手できました。ありがとうございます。

東日本大震災復興支援松戸・東北交流プロジェクト
事務局長 奥田義人さん

特命助成

「ぱちんこ依存問題に関する相談および回復支援」事業

動き出した国の「ギャンブル等依存対策」の一翼を担いながらも、パチンコ・パチスロユーザーが真に必要な支援を模索

「認定NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク（以下RSN）」は2006年に全日本遊技事業協同組合連合会の支援によって発足して12年を経た。パチンコ・パチスロ産業21世紀会の支援、会費、有志の寄付金、AJOSCの助成によって、電話相談、遊技業界への問題啓発や研修、研究協力などの事業を安定的に継続している。非営利だからこそできる時代や状況に合わせた問題解決支援の提供を継続していくことがNPO法人の使命と考えている。



パチンコホール店に貼り付けを依頼している啓発・告知用ポスター



無料配布している遊び方安全度の自己診断アプリ

年間約5,000件の電話相談に対応

電話相談事業では、専門的なトレーニングを受けた相談員が電話相談にあたっている。相談時間は平成29年11月より、受付時間を22時までに延長した。平成29年5月からは、パチンコ・パチスロ産業21世紀会に所属のホール従業員がRSNに出向し、3ヵ月間相談業務の支援と依存問題対応の研修をする制度を開始した。平成29年1月1日から同年12月31日までの相談件数は、4,923件（沖縄RSN3,832件、全商協RSN支援室719件、夜間（延長時間）の相談372件）であった。当該年度の事業報告書に

ついては、3月末発行、4月下旬に配布している。また、本人・家族を対象とした対面相談会を「一般社団法人RCPG(Resourceful Center of Problem Gambling)」の協力を得て、東京で開始した。

支援連携事業としては、RSN・「認定NPO法人ワンダーポート」共催「家族個別相談」事業、ホール従業員向け「のめり込み防止・啓発ポスター」提供（平成28年7月25日～）、パチンコの遊び方・安全度の自己診断アプリ「パラーズキル&ハイド」の無料配布、「公益財団法人日工組社会安全研究財団」のパチンコ依存問題研究会における調査・研究協力（パチンコ・パチスロ遊技障害全国

調査の結果を平成29年8月に報告）、パチンコ・パチスロ産業21世紀会「安心パチンコ・パチスロアドバイザー講習会」の企画・実施協力、RSN・「認定NPO法人ワンダーポート」共催「依存問題や生活課題を有する人たちへの必要な支援 -就労と社会参加について考えるセミナー」の開催、依存の問題の支援に携わる人たちの勉強会（沖縄、横浜）協力、全日本遊技事業協同組合連合会「遊技関連依存問題検討会PT」協力、播磨社会復帰促進センター受刑者教育用DVD改訂版作成協力、ATA-net（多様化する嗜癖・嗜虐行動からの回復を支援するネットワーク）研究協力、公明党「ギャンブル等依存症対策検討PT」での講師などの活動を行った。

広報・啓発や学会発表 各地でセミナーを実施

このほか啓発などの活動としては、全日本遊技事業協同組合連合会機関誌「遊報」における「パチンコ・パチスロ依存講座」（全4回）の連載、RSNさくら通信、安心娯

楽通信（月一回配信）の発行、学会発表（第2回犯罪学合同大会・第33回日本社会病理学会）などをおこなった。また、日工組社安研遊技障害研究会のプロジェクト、海外専門書の翻訳監修を行い、出版・配布したほか、遊技事業者に依存問題をより広く理解してもらうために、遊技業界従事者対象の講演会での講義、10件のRSNの視察受け入れと意見交換会、ラスベガス、バンクーバーにおいてカジノや地域のギャンブル問題と対策の現状を視察し、対策にあたる団体、組織、研究者らとの意見交換を行った。また、平成30年2月には、「一般社団法人RCPG」と協力し、RG(Responsible Gaming)研究会を発足、セミナーの開催など知見を社会還元に向けている。

ぱちんこ依存問題相談機関
リカバリーサポート・ネットワーク
050-3541-6420
月～金（祝祭日除く）10:00～22:00 相談無料
※16時以降は夜間対応になります。



各地でセミナーや講演会を実施



大阪府遊協・青年部会視察の様子

助成団体: 認定NPO法人 リカバリーサポート・ネットワーク

<http://rsn-sakura.jp>



より一層、サービスを高めたい

AJOSCの助成によって、純粋に「非営利」の活動を続け、微力ながらも私たちの活動を社会に役立てることができていることに感謝しています。先駆的な事業であるだけに、理解が広がりにくく様々な困難もありますが、日本で唯一のぱちんこ依存問題に特化した民間相談機関としてのサービスをこれからもより一層高めたいように取り組んでいきます。

認定NPO法人 リカバリーサポート・ネットワーク
代表理事 西村直之 さん



京都府内の社会福祉事業を支援するために 30年にわたって基金から寄付・助成を継続

京都府遊技業協同組合 「公益財団法人 京遊連社会福祉 基金創立30周年記念」事業



京都府遊技業協同組合
理事長
公益財団法人
京遊連社会福祉基金
代表理事
白川鐘一さん

選考理由

継続という愛の力

一時的な援助やボランティアも意義はありますが、真にサポートしようとするなら、永続的な支援が必要です。そのためには温かい意思と覚悟、組織がなくては継続できません。京遊連社会福祉基金は、自治体が行う社会福祉事業を支援するほか、各種団体へ助成金を贈るため昭和62年に設立され、それ以来、自治体や福祉団体に寄付を続けてきました。公益財団として確固たる意志と組織が年代を超えて「愛」を受け継いできました。全日本社会貢献団体機構の先達に敬意を捧げます。

社会貢献活動審査委員会
委員長代行
脇田 直枝氏



遊技業界が行う社会貢献活動の礎となる 社会福祉基金を全国に先駆けて設立

ペレストロイカ、円高不況、NTT株、『サラダ記念日』……といった言葉が人々の口に入った1987年（昭和62年）春、一つの福祉基金が京都でこの声をあげた。その名称は、「財団法人 京遊連社会福祉基金」。発足の事情を伝える当時の新聞記事には、「遊技業界のこうした基金の設立は全国で初めて」（京都新聞）、「業界では全国初の試み」（読売新聞）、「全国に先駆けての設立」（朝日新聞）という文字が躍っている。

現在、遊技業界では、全日遊連をはじめとする業界全国組織から都府県方面ごとの協同組合、支部組合、さらに個々の組合員ホールにいたるまで、企業の社会的責任を果たすべく、様々なレベルで社会貢献活動や地域貢献活動に取り組んでいるが、組織としての確固とした体制を整え、公平性や透明性といったコンプライアンスに基づき、社会福祉に資する事業を行うという明確な目的を持って誕生した京遊連社会福祉基金は、文字通り、業界の先駆けであり、今日の遊技業界による社会貢献活動の“礎”となるものだ。

その立ち上げの動機について、現在、代表理事を務め、京都府遊技業協同組合（以下、京遊協）の理事長でもある白川鐘一さんは、「当時は、パチンコ業界に対する世間のイメージにも厳しいものがあり、そうした状況



長期にわたる社会貢献活動に対し、京都府知事から授与された感謝状



京遊連社会福祉基金30年の歩みをまとめた記念誌には、数々の社会貢献活動が紹介されている

の中で、世の中のためになることを行うことで業界の地位向上を図るとともに、何とかしてこの業界を守り育てていこうという先達たちの強い意志があったのだと思います」と話す。

その意志に基づき、京遊協の前身である京都府遊技業組合連合会（以下、京遊連）の役員有志から拠出された寄付金と京遊連が積み立ててきた予算剰余金を合わせた5億円を基本財産（基金）として、京遊連社会福祉基金は設立されたが、それは1973年から京遊連が行ってきた「善意の箱（ホール内の落ち玉や遊技客の余り玉を現金換算して積み立てた資金を社会福祉活動に役立てる）」事業や、1983年から86年にかけて行われた「国体の箱（1988年の京都国体の基金協賛を目的とする）」事業などの精神を引き継ぎ、社会貢献活動を一層、継続的、効果的に実施していくための施策であった。なお、同基金の基本財産は現在、13億円に積み増しされているほか、2011年には公益財団法人に移行認定された。

公的支援の網の目からこぼれた団体に対して公平かつきめ細かい助成を実施

京遊連社会福祉基金の活動は、大別すると寄付事業と助成事業の2本立てとなっている。寄付事業は、京都府および府内の自治体やその関係機関が取り組んでいる障がい者支援、高齢者福祉、勤労者福祉、青少年健全育成、地域活動支援などの社会福祉行政を応援する目的で行われるもので、その中には、今年3月の開催で第29回を数えた「全国車いす駅伝競走大会」への第1回目から継続して行っている協賛事業などがある。

一方の助成事業は、社会福祉団体などをはじめ、府内で活動を行う各種団体に対して、その活動費や施設費を1団体200万円を上限として助成するものだが、同基金の根幹とも言える事業で、常務理事・事務局長を

務める坂崎稔さんは、「公的な助成や援助を受けられずに、活動資金の確保に苦慮している団体がたくさんあります。そうした公的支援の網の目からこぼれた団体に幅広く、かつきめ細かく支援の手を差しのべることが助成事業の目的です」と話す。そのため助成金額も一律ではなく、数万円規模から200万円まで、その団体が必要とする金額に幅広く対応しているという。

助成事業では、公平さや有効性を担保するためにしっかりとした態勢で臨んでいる。まず、毎年7月から8月にかけて、助成を申請する団体をホームページ上で公募し、申請理由、組織形態、活動内容などを申告してもらい、それに基づき、同基金内に設けられた弁護士や家裁調停員などの有識者からなる選考委員会（5名）が協議・

検討したうえで助成の決定を行っている。助成金寄贈後は、それが目的に合わせて確実に使われていることを同基金として事後検証しているという。ちなみに昨年は、23団体に対して、計1,070万円が助成された。

また、助成金の寄贈にあたっては、毎年11月に京遊協と合同で寄贈先団体、マスコミ・業界紙誌、組合員などを招いた贈呈式を行っているが、団体にとっては自分たちの活動が一般に認知される契機になるとともに、今後の活動の励みにもなっているという。さらに、マスコミ・業界紙誌の取材を受けることで、同基金や京遊協の広報活動の一環になり、組合員にとっては社会貢献活動の動機づけにもなるうえ、何よりも同基金に対する社会的信頼感の醸成につながっている。



自治体や社会福祉団体への寄付・助成金贈呈式



青年部会を中心に大会をサポートしている「視覚障害者オープンゴルフ大会」



社会福祉法人に贈られた福祉車両

基金創立30周年の記念事業として 創立功労者表彰や特別寄付・助成

同基金が本年3月31日までに寄付をした自治体は85、助成を行った社会福祉団体はのべ400団体に及び、その累計は8億5,370万9,956円となっているが、昨年、同基金では創立30周年を迎えたことで、記念事業を実施した。その中心となったのは、京都府知事、京都市長などの来賓、寄付・助成団体、初代理事長を務めた高山正一氏（故人）をはじめとする創立功労者（故人はその親族・関係者）、組合員など約250名以上を招いて4月5日にANAクラウンプラザホテル京都で開催した記念式典だった。

式典では、基金創立功労者表彰として19名に感謝状と記念品を授与するとともに、特別寄付・助成事業として、京都府、京都市のほか、「社会福祉法人 京都府共同募金会」など8団体に対して、計1,300万円の寄贈を行った。また、国際日本文化研究センター教授・井上章一さんによる「リオデジャネイロで京都と日本を考える」と題された記念講演が行われた。さらに、記念事業として、同基金の30年の歩みをまとめた記念誌の編集・制作も行い配布した（300部）。

同基金の30年にわたる活動、および30周年記念事業が社会貢献大賞の受賞対象となったが、代表理事の白川さんと常務理事の坂崎さんは、「地道な活動が認められ、素直にうれしいし、感謝申し上げます。この栄誉を汚さぬよう、今後も財源確保の努力を続けながら、活動を継続していきたい。と同時に、業界の次代を担う若い世代の人たちに基金の精神をどのように引き継いでいくかが、私たちの使命だと思っています」と、受賞の感想を語った。

なお、京遊連社会福祉基金の事業とは別に、京遊協では社会貢献活動として、自治体や福祉団体への福祉車両の寄贈、また青年部会が中心となって視覚障害者オープンゴルフ京都大会の運営費支援およびマーカーボランティアとしての参加、チャリティゴルフ大会の開催などを継続して行っている。



音楽の力で被災地に元気を届けるために 現地で復興応援コンサートを実施

大阪府遊技業協同組合 「大遊協 Presents 熊本地震復興応援」事業



大阪府遊技業協同組合
理事長
平川容志さん

選考理由

この部門での最優秀賞には、前年度に引き続き大阪府遊技業協同組合の卓越した社会貢献活動が選定された。活動の中心は、2016年4月に発生した「熊本地震」の被災者への物心両面の復興支援である。甚大な被害を受けた益城町の文化会館ではShionによる復興応援コンサートを実施。これに小中学生を招待。また、中学校の吹奏楽部との合同演奏も組み入れ被災した子どもたちを元気づけた。さらに、大阪日本橋でのストリートフェスタでは、「がんばろう熊本」を標語に熊本物産展などを実施。売上金は義援金として寄付された。これらの活動には、組合員がボランティア参加していることも評価に値する。毎年の優れた社会貢献活動に心からの敬意を表したい。

社会貢献活動審査委員会
委員
野口 昇氏



2017年のファン感謝デーのテーマに 熊本地震復興支援を掲げて被災地支援

2016年4月に発生し、気象庁震度階級では最も大きい震度7を2回も観測した「熊本地震」。関連死を含め、約270名の方々が亡くなり、今なお仮設住宅等での生活を余儀なくされている人々がいる。復旧・復興に向け、遊技業界でも地震直後から様々な形での支援に取り組んでいるが、大阪府遊技業協同組合（以下、大遊協）では昨年、「大遊協 Presents 熊本地震復興応援」と銘打った支援事業を実施した。

大遊協副理事長の田中孝明さんは、その根本にあった思いを、「1995年1月に起きた阪神・淡路大震災を経験したことが大きい。被災地の過酷な状況を肌で実感しているため、組合員の間にも何とか現地の人たちを支援したいという思いが強い。東日本大震災の復興支援事業を行ったときもそうでしたが、阪神・淡路大震災で支援していただいた恩返しという意味も込めて、今回の事業に取り組むことになりました」と話す。

この事業は、特に甚大な被害となった熊本県益城町を対象に、地域の未来を担う小・中学生や仮設住宅などに入居している被災住民の人々に、「音楽の力で『心のケア』と『元気を届ける』ことを目的」（大遊協、業務第二課課長・小川清さん）にしたもので、大阪を拠点に活動するプロの交響吹奏楽団「Osaka Shion Wind Orchestra（通称、Shion）」と益城町立木山中学校吹奏楽部による「大遊協



「大遊協 Presents 復興応援コンサート」を告知するポスター



コンサートには無料招待された小・中学生、一般客が数多く来場



「第13回日本橋ストリートフェスタ2017」では熊本県の物産展や写真展を開催し、売上金を寄付

Presents 復興応援コンサート」（後援：熊本県遊技業協同組合、益城町教育委員会）、および同楽団員による町立広安西小学校と益城中学校での楽器演奏指導会、さらに益城中学校と木山中学校への卓球マシンと卓球玉の贈呈を行った。

子どもたちに貴重な経験を届ける 楽器演奏指導会や物産展を実施

復興応援としてコンサートや楽器演奏指導会が選ばれたのは、元々、益城町が吹奏楽活動が盛んな土地であるという地域特性に着目したためだ。昨年3月29日に益城町文化会館で開催されたコンサートには、無料招待された小・中学生、一般客を合わせて約300名が足を運び、吹奏楽の有名曲からディズニーのメドレーまで10曲以上の演奏を楽しんだ。プロとの合同演奏に参加した中学生からは、「貴重な経験をさせていただきました」「この経験をこれからは生かして頑張ります」といった声が多く寄せられた。

さらに、子どもたちに大好評だったのは、翌日に行われた小学校と中学校での楽器演奏指導会で、これは楽器の各パート毎に、楽団員から指導を受けるというもので、「プロの方に教えてもらうことができて本当にうれしかった」「基礎がいかに大切かが分かった」と、感動や感謝の声が寄せられた。吹奏楽に励む子どもたちにとっては、プロの演奏家からレッスンを受けるということは、「テニスなら錦織、サッカーなら本田、野球なら大谷から教えてもらうようなもので、見ていて感動ぶりが伝わってきました」と、大遊協の田中さんは話す。

また、大遊協では、「ファン感謝デー」（3月24～26日）前の19日に開かれた「第13回日本橋ストリートフェスタ2017」に参加し、トマト、イチゴ、お米などの熊本県の物産展や写真展を開催し、その売上金を熊本県に義援金として寄付したほか、熊本県からマーチングバンドFIRE STATEを招き、フェスタのパレードに参加したり、前述のShionメンバーとのステージ合奏などを実施した。



埼玉県内で実施されている子ども食堂を 活動資金の援助でバックアップ

埼玉県遊技業協同組合 「子ども食堂に対する 運営資金支援」事業



埼玉県遊技業協同組合
理事長
山田茂則さん



県内のホールにポスターを掲示し、子ども食堂への支援活動を周知

子どもの貧困率が問題視される中で 埼玉県内の子ども食堂の実態を調査

厚生労働省の「2016年国民生活基礎調査」によれば、「子どもの貧困率（平均的な所得の半分に満たない家庭で暮らす18歳未満の割合）」は、13.9%（約7人に1人）だった。この数字は、先進国の中でも高い水準にあり、特にシングルマザーなど、大人1人で子どもを養育している家庭の貧困率は、特に高い傾向にある。

このように一人親や貧困など、様々な事情を抱えて困窮する家庭の子どもへ、ボランティアが中心となって作った夕食を無料または低料金で提供するとともに、子どもの孤食対策、居場所づくりなども行う「子ども食堂」が、全国的な広がりを見せている。埼玉県内には約80か所の子ども食堂があるが、そのほとんどがNPO法人や任意団体、さらに個人のボランティアによる運営であり、食材費のほか、会場の賃貸料、告知チラシの制作費、ボランティア保険料などの経費負担が課題となっているのが現状である。

こうした実態を踏まえ、埼玉県遊技業協同組合（以下、埼玉遊協）では、県内で運営されている子ども食堂（コミュニティカフェ、地域食堂などを含む）の活動の手助けとなるよう、運営資金を支援することを決定し、2017年度から事業を実施している。現在は、埼玉遊協のみならず、各支部組合や傘下の組合員ホールでもお菓子やジュースなどの物品提供、人的支援なども始まっており、子ども食堂の運営者から感謝の声が多く寄せられている。



遊技客へお菓子の提供を呼びかける「善意の箱」



支援している子ども食堂のひとつ「とまと」へお菓子を寄贈

負担が過重な子ども食堂の実施団体に 公募によって活動資金を援助

埼玉遊協では、2015年12月に県内の子ども食堂の調査研究を開始し、2016年6月から子ども食堂の視察を行うとともに、多くの運営責任者と面談を実施し、その実態や運営上の課題などを把握したうえで、2017年3月の理事会において、子ども食堂への運営資金の支援を決めるとともに、支援内容を規定する「子ども食堂等支援事業実施要領」および「子ども食堂等支援実施細則」を制定して、その活動をスタートさせた。

具体的な支援内容としては、『読売新聞（埼玉版）』に公募のための広告を掲載するとともに、ホームページによる公募を行い、支援の申し込みがあった子ども食堂について、埼玉遊協内に設置した執行部と総務・広報委員会で構成する「子ども食堂等支援特別委員会」において、支援対象の適格性（営利目的でないこと、政治目的でないことなど）を審査したうえで、支援決定通知書を送付。その後、子ども食堂開催ごとに、現金（1回の開催ごとに5,000円が上限）を支給している。なお、公募は年度を4回に分け、その期間に活動を行う団体を対象に募集を受け付けている。

事業の初年度となった2017年度は、第1期（4～6月）に10団体、第2期（7～9月）に21団体、第3期（10～12月）に23団体、第4期（1～3月）に24団体と、のべ78団体に計2,461,000円を支給した。

なおこの事業は、埼玉県共助社会づくり課、埼玉県社会福祉協議会、埼玉県子ども食堂ネットワークと連携して実施しており、県および社協などが2018年1月19日に開催した「共生・共助つながりフォーラム～広がれ子ども食堂の輪！全国ツアーin埼玉～」に参加した。また、埼玉県子ども食堂ネットワークへの参加を要請されている。



安全で安心な町づくりを支援するため 防犯パトロールカーを市区町村に寄贈

千葉県遊技業協同組合
「地域の安全・安心対策支援」
～県内全市区町村に防犯PC配備～
事業



千葉県遊技業協同組合
理事長
田中幸也さん



各ホールに夢まる防犯パトロールカー寄贈式を報告するポスターを掲示して周知に努める

夢まるふあんの地域振興事業として 2006年から防犯パトロールカーを寄贈

千葉県遊技業協同組合（以下、千遊協）、千葉日报社、千葉テレビ放送、ベイエフエムによって設立された「夢まるふあと委員会」では、2005年から「夢まるふあと」という名称で様々な社会貢献活動を展開している。これは千遊協の加盟ホールに来店した遊技客から「夢玉（こぼれ玉）」や景品交換時に発生する「余り玉」を基金として寄付してもらい、それを原資として積み立てたものを、千葉県内の福祉施設やボランティア団体、地域づくりや地域おこしに取り組む自治体や関係団体、文化財保護などの文化活動の支援金として毎年、拠出していこうというものである。

その一つが「ちばふるさと振興サポート」という地域振興事業だが、その一環として、「夢まるふあと」では2006年から県内の市区町村に犯罪の防止に効果を発揮する防犯パトロールカー（通称、青パト）を寄贈することで、千葉県が推進する安全で安心な町づくり活動を支援する事業を継続してきた。寄贈先の選定にあたっては、公正を期すため、千遊協の社会貢献委員とメディア3社の担当者による実務者会議を開催して厳正な審査を行い、毎年5台の寄贈先市区町村を決定し、贈呈式を行って寄贈を実施してきた。

事業開始から12年目を迎えた昨年、市川市、浦安市、市原市、袖ヶ浦市、芝山町の4市1町に5台を寄贈したことで、県内60の全市区町村に60台の青パトが配備される



寄贈式には森田県知事や小出市長（市原市）も参加し謝辞を述べた



挨拶をする森田県知事

ことになった。青パトの公募には例年、市区町村からの問い合わせや多数の応募が寄せられているほか、寄贈した青パトは地域防犯パトロール隊と連携した活動や、児童・生徒の見守り活動などに効果を上げており、寄贈先からの評価も高い。

昨年の5台の防犯パトロールカーの寄贈で 県内60の全市区町村に配備を達成

昨年11月1日に千葉市中央区で実施された贈呈式には、寄贈を受ける各市町長などのほか、来賓として森田健作知事、県警生活安全部の部長が出席した。夢まるふあと委員会を代表して、副委員長を務める千遊協の田中幸也理事長は、「今回で発足時から目標とした全市区町村への寄贈が終わったが、これからも続け、県内の犯罪抑止に貢献していきたい」と挨拶。また、森田知事からは、「寄贈された青パトを県民のために有効利用して、日本一、安全安心な千葉をつくろう」という挨拶があった。

青パトのレプリカキーを贈呈された5市町を代表して挨拶した市原市の小出譲治市長は、「青パトは犯罪抑止に役立つ。効果的に活用して地域社会の安全安心の確保に全力を尽くす」と謝辞を述べた。さらに後日、青パトを贈呈された各市町から感謝状が贈られたほか、袖ヶ浦市からは市政の発展への功績が認められ表彰を受けた。

贈呈式の模様は、千葉テレビニュースで放映されたほか、翌日の『千葉日報』に記事として掲載された。また、夢まるふあと委員会ではポスターを作成して傘下の各ホールに掲示し、ホールを訪れる遊技客へ協力への感謝と実積の報告をしている。この寄贈事業のこれまでの総額は約7,500万円に上り、これでひとまず当初の目的を達成したことになるが、2018年以降も森田県知事が積極的に推進する「防犯ボックス事業」との連携を図りながら、事業を継続していく方針だ。



障がい者スポーツを支援していくために 「障害者スポーツ応援協定」に署名

兵庫県遊技業協同組合 「2020年東京パラリンピック競技大会に向けた障害者スポーツ応援事業及び恒久的な支援」事業



兵庫県遊技業協同組合
理事長
岡本芳邦さん



2003年から継続支援をしている「全国車いすマラソン大会」

車いすマラソンやスペシャルオリンピックスの 支援で障がい者のスポーツ参加を応援

兵庫県遊技業協同組合（以下、兵遊協）では、組合運営の基本の一つに「社会貢献活動の積極的な推進による県民からの信頼の獲得」を掲げ、企業の社会的責任を果たすために様々な社会貢献活動に取り組んでいる。その中でも特に障がい者施設などへの各種支援に取り組み、端玉賞品への授産商品の導入やイベント等での授産商品販売の協力、障がい者福祉団体への財政的支援や車いす対応の福祉車両の寄贈などを継続的に行っている。

また、障がい者がスポーツに親しむことを通じて、健康づくり、生きる喜びや希望の実感、自立や社会参加につながるなどの思いから、障がい者施設や団体の活動への支援を行っているが、とりわけ毎年、兵庫県篠山市で開催される「全国車いすマラソン大会」には2003年の第15回大会から支援を続けており、毎年、兵遊協理事が協賛団体として開会式に出席して、選手の激励を行っている。これまでの大会支援総額は2,200万円に上っているが、この大会では、開会式場、パンフレット、ポスター、スタート／ゴール地点のアーチ、スタッフジャンパー、競技用車いすのゼッケンに組合の名称が協賛団体として表示されており、兵遊協の社会貢献活動の広報にも役立っている。

さらに、昨年のトピックスとして、知的障がいを持つアスリートによる競技大会である「スペシャルオリンピックス日本2017近畿ブロック大会」に対して、兵遊協が実施している



障害者スポーツ応援協定締結式において井戸知事を囲んで記念撮影



支援した「スペシャルオリンピックス日本2017近畿ブロック大会」

「はあ〜とふるふあんど」の「ふるさと振興サポート」部門を通して95万円を贈呈したことがあげられる。この大会は4年に1回開催され、昨年9月に行われた第2回大会には、近畿地方2府4県から選手、コーチ、ボランティアなど約650名が参加し、陸上、サッカー、水泳、テニスなど9種目で熱戦が繰り広げられた。

東京パラリンピック競技大会に向けて 「障害者スポーツ応援協定」を締結

このような障がい者に対する継続的な支援活動が評価され、一昨年末には公益財団法人「兵庫県障害者スポーツ協会」から、2020年の東京パラリンピック競技大会に向けて障がい者スポーツの輪を広げ、選手のサポートと、そのレガシーを継承していくため、県下の大学、団体、企業との協定を進める「障害者スポーツ応援協定」への締結の依頼を受け、兵遊協として検討を重ねた結果、これまで以上に障がい者スポーツへの応援を図ることで、東京パラリンピックの成功の一助になるという結論に達したため、同協定を締結することにした。

昨年2月には、神戸ポートピアホテルで「G7神戸保健大臣会合開催記念 国際義肢装具協会世界大会2019プレイベント」と題された関係者による講演、パラリンピックアスリートによるトークショーに引き続いて障害者スポーツ応援協定の締結式が行われ、井戸敏三兵庫県知事の挨拶の後、兵遊協を含む県下の企業、団体、大学など46団体に対して、知事から順次、協定書の授与が行われた。こうした協定は全国でも初めての試みであり、新聞、テレビ、ラジオなどでも大きく報道された。

さらに7月には、県庁内で行われた障害者スポーツ応援協定団体研修会に参加し、日本財団パラリンピックサポートセンターによるセミナーを受講したほか、9月には第17回全国障害者スポーツ大会「愛顔つなぐえひめ大会」の兵庫県選手団結団式にも、評議員として出席し、出場選手にエールを送った。



八王子の3組合が手を携えて 継続的な活動で地域貢献

八王子3組合（八王子組合・高尾組合・南大沢組合） （東京都遊技業協同組合） 「八王子3組合合同『青少年育成支援』」事業



高尾遊技場組合
組合長
小澤国生さん

八王子遊技場組合
組合長
宮本勲さん

南大沢遊技場組合
組合長
阿部恭久さん

選考理由

障がい者支援事業として、24年前から身体障がい者を招待しての「ふれ愛ボウリング大会」を開催。昨年は5施設より150名を招待して楽しんでもらった。施設の人たちから毎年心待ちにされているこの事業は、永年継続により地域の認知度も高い。また、社会福祉協議会を通じて毎年寄付を続けて7回目の昨年は、経済的な問題を抱える児童の学力向上のための「無料塾」を支援、児童の居場所づくりにも貢献した。青少年育成と地域貢献を目的とする、地味ではあるが価値ある活動に敬意を表したい。

社会貢献活動審査委員会
委員
松尾 守人氏



福祉作業所に通う障がい児者を 招いてボウリング大会を実施

八王子・高尾・南大沢の3遊技場組合では、昨年11月24日に第24回目となる「ふれ愛ボウリング大会」を開催した。この大会は、1993年に当時の八王子組合と高尾組合が地域の青少年育成支援事業の一環として、身体に障がいを持つ子どもたちを招いて始めたもので、それ以来途切れることなく続けられている。

当日、八王子市内にある5つの福祉作業所に通う障がい児者、職員など約150名が、会場のSAP日野ボウルに集合。約3時間、ボールがガターに落ちないようにバンパーレーンが施された貸し切りのボウリング場で思い切りゲームを楽しんだ。普段、なかなか経験できないことを施設の仲間とともに楽しめるとあって、参加者は自分の投球のみならず、仲間が投げる一投一投に歓声を上げていた。

この大会を開催するにあたって、第1回目から窓口になっているのが、八王子市に拠点を置いて障がい者の支援事業所を運営する社会福祉法人「八王子いちょうの会」だが、崎田京子理事長によれば、「作業所のみならず、このボウリング大会の時期を覚えていて、心待ちにしている」とのこと。この大会に長年関わっている組合関係者は、参加する子どもたちの成長に目を見張ることもあるという。なお、大会終了後には、3組合から八王子いちょうの会に寄付金10万円が贈呈されている。



障がいを持つ子どもたちを招いて開催した「ふれ愛ボウリング大会」



約150名の参加者が貸し切りのボウリング場でゲームを楽しんだ



ボウリング大会終了後に「八王子いちょうの会」に寄付金を贈呈

地元の社会福祉協議会への寄付を 通じて助成事業を資金的に支える

この「ふれ愛ボウリング大会」のほかにも、3組合では合同で、毎年、社会福祉法人「八王子市社会福祉協議会」へ100万円の寄付を行っている。この事業は2011年から始まったもので、3組合に加盟する38店舗（八王子20店、高尾8店、南大沢10店）から、1店舗当たり25,000円を拠出し、不足分を組合費から補充している。同協議会が受け取る寄付としては大口で、継続して寄付していることもあり、八王子市や同協議会から高い評価を得ている。

寄付金の半分は社会福祉協議会の活動資金に充てられるが、同協議会では残りの半分を使い、公募のうえで、八王子市内で安心して住み続けることができる地域づくりを進める団体への助成を行っている。昨年12月8日に行われた寄贈式には、前年度に助成を受けた2団体（学習意欲がありながら、家庭の経済的な理由で学習塾に通うことのできない生徒を支援するため無料の学習塾を運営）の代表者も出席し、1年間の活動の報告があった。

2018年度の同協議会の助成事業としては、引きこもりや発達障がいの家族を持つ人々の支援を中心に活動している、「ひきこもり家族会『ぶなの会』」と「NPO法人かたつむり」の2団体に贈られることが決定したという。

この他にも3組合では、八王子消防署が実施している「はたらく消防の写生会」向けに、毎年、鉛筆2,000本を小学校などに寄贈している。

八王子遊技場組合の宮本勲組合長は、「地元で商売をさせていただいている以上、少しでも地元還元するのは当たり前のこと。遊技業を取り巻く状況は厳しいものがありますが、業界全体としてあきらめずにこうした活動を継続していくことで社会的認知も高まる。皆さんに愛される業界になっていくために必要な活動だと思います」と、社会貢献活動、地域貢献活動の重要性について話した。



救うことのできる命を救うために AEDの寄贈で地域貢献

東濃遊技業組合 (岐阜県遊技業協同組合) 「地域貢献を目指したAED等 導入プロジェクト」事業



東濃遊技業組合
組合長
新井恭成さん



多治見市へのAED寄贈式

突然の心停止の救命に役立つAEDを 息の長い事業として継続的に寄贈

日本では、1年間に約7万人が心臓突然死で命を失っている。1日では約200人、7.5分に1人が心臓突然死で亡くなっていることになる。その原因の多くは「心室細動」と呼ばれる重い不整脈で、それによって心停止の状態になることで、数秒で意識を失い、数分で脳をはじめとする全身の細胞が死んでしまう。心停止の人の救命には迅速な心肺蘇生と電気ショックが必要で、電気ショックが1分遅れるごとに救命率は10%ずつ低下していく。119番通報をして、救急隊の到着を待っていたのでは、突然、心停止した人のうち、9.2%しか救命できないという(以上、日本AED財団のホームページより)。

この電気ショックを行う機器がAED(自動体外式除細動器)である。かつて日本では、医師しか使用が認められていなかったが、2003年には救急救命士、さらに2004年からは一般市民も使えるようになり、学校、駅、商業施設、スポーツ施設などに設置されているのはご存知のことと思う。

岐阜県東濃地区(多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市、中津川市)と可児市、可児郡の一部のパチンコ・パチスロホール24店舗が加盟する東濃遊技業組合では、地域における社会貢献活動として、地域住民の人命救助の観点から、突然の心停止の一次救命処置に有効なAEDの設置に取り組んでいる。この活動は2009年度に始まったものだが、同組合では単発的ではなく、地域社会への恩返し



9年間で寄贈されたAEDは累計で64台になる



旭ヶ丘第1町内会集会所に設置されたAED



区民館や老人福祉施設など各所に設置されている

を長く続けられるよう、無理のない範囲でできるものをもと検討した結果、このAED寄贈プロジェクトに取り組むことになったという。昨年までの9年間で上記自治体に寄贈されたAEDは、累計で64台、金額にして約1,321万円となっている。

毎年、地域の6つの自治体に AED1~2台を目途に寄贈

毎年、7月初めにAEDおよび救護マットを用意し、各市長に贈呈しているが、昨年度は多治見市、中津川市に2台、他4市に1台の計8台(約154万7,000円相当)を寄贈した。AEDは、その耐久年数が概ね5年とされていることから、毎年、各自治体に1~2台を目途に寄贈を続けている。

各自治体では、それぞれが保有・管理する老人福祉施設、研究施設、教育施設、レジャー施設などの中から設置場所を順次、選定して設置しているが、設置にあたっては、該当施設の担当者を対象に、取り扱いの講習会などを実施しているという。

寄贈にあたって自治体に意向を確認すると、訓練用AED関連商品や屋外設置BOXなど直ちに活用できるものを具体的に希望するところもあるということで、この寄贈プロジェクトが自治体から大いに期待されていることがわかる。幸いにも東濃遊技業組合が寄贈したAEDが実際に使われた事例は聞いていないということだが、自治体の中には突然、市民が倒れたときに、周囲にいた人がすぐにAEDを準備したり、救急隊員に出勤を要請する事例などがあったという。同組合の活動がAEDに対する市民の意識の向上につながっていることがうかがえる。傘下の組合員ホールの従業員の間にも「AED講習を受けてみたい」という人が多くいるということで、組合として突然の出来事に即座に対応できる人材を育てることも使命だと考え、今後の活動につなげていきたいという。



島原半島の安全・安心な街づくりを 資金援助と物品寄贈で支える

島原半島遊技場組合 (長崎県遊技業協同組合) 「安全・安心街づくり」事業



島原半島遊技場組合
組合長
藤山剛士さん

南島原市に対して全自動血圧計や 振り込め詐欺対策機器を寄贈

長崎県の島原半島で営業している11ホールが加入する島原半島遊技場組合。同組合管内には、島原市、南島原市、雲仙市の3自治体があるが、同組合では安全・安心な街づくりに協力するため、地元自治体や防犯協会などに健康器具や防犯機器の寄贈や資金支援のほか、イベントへの参加などを継続的に行っている。

昨年2月、同組合では、南島原市に対し、市民の健康管理に役立つよう、全自動血圧計2台(50万円相当)を寄贈した。この寄贈に対し、南島原市長からは「来庁する市民の健康管理に役立てたい」との謝辞があったが、その言葉通り、寄贈された全自動血圧計は南島原市役所のロビー内に設置され、来庁した市民が待ち時間などに自由に活用する姿が見られる。

また、南島原市防犯協会に対し、後を絶たない特殊詐欺抑止のために「振り込め詐欺見張隊」という機器を50台(50万円相当)寄贈した。この機器は電話の着信時に、「この電話は振り込め詐欺等の犯罪被害防止のため、会話内容が自動的に録音されます」と、発信者側にアナウンスされるもので、これによって振り込め詐欺犯だった場合には抑止効果が生まれると同時に、高音質で通話を録音できることから、振り込め詐欺犯の特徴などが判別しやすくなり、録音データを警察に提出することで、犯人の声を声紋分析し、逮捕の糸口をつかむことができるとされている。



全自動血圧計と振り込め詐欺対策機器の寄贈式



寄贈式には南島原市長、南島原警察署長、島原半島遊技場組合長など、約20名の関係者が参加



長崎県防犯協会連合会の総会で感謝状を授与



長崎県防犯協会連合会から贈られた感謝状

寄贈に際して、南島原警察署長からは「今なお減少を見ない特殊詐欺防止になるよう有効活用したい」という謝辞があった。寄贈された振り込め詐欺見張隊は南島原市内の希望する高齢者世帯に貸し出され、特殊詐欺抑止に貢献している。

なお、南島原市役所で行われた全自動血圧計と振り込め詐欺見張隊の寄贈式には、南島原市長、南島原警察署長、島原半島遊技場組合長など、約20名の関係者が参加したが、その模様は地元のケーブルテレビで放映され、市民に広く周知された。

長崎県防犯協会連合会に対して 40年近くにわたって資金支援を継続

同組合では、2016年に島原市に防犯カメラ2台(100万円相当)を寄贈しており、島原警察署長から感謝状が授与されたほか、寄贈式の模様が地元紙の『長崎新聞』に掲載された。寄贈された防犯カメラは、水の都と呼ばれる島原市の観光スポット「鯉の泳ぐまち」に設置され、観光地の安全・安心に寄与している。なお、2018年には雲仙市(防犯協会)に対し、防犯啓発看板を寄贈したことで、3年間で島原半島の3自治体の「安全で安心な街づくり」に貢献するという当初の計画を達成した。

このような寄贈にあたっては、より効果を上げるため、組合が独自判断で内容を決めるのではなく、地元自治体や警察などと事前協議を重ねたうえで、要望に沿ったものを贈るようにしている。

さらに同組合では、1979年から長崎県防犯協会連合会に毎年、7万円の資金支援を続けているが、長年の資金支援に対し、昨年5月には同連合会総会の席上で、会長から感謝状が授与された。また、2015年8月には、同組合の組合長以下5名が「防犯・暴力追放パレード」に参加している。今後も、島原半島における安全・安心な街づくりに寄与するための活動に積極的に参加していく方針である。



地域社会の共感を獲得するために 自ら汗をかくボランティアを实践

東京都 株式会社ミリオンインターナショナル 「(株)ミリオンインターナショナル における社会貢献活動」事業



株式会社ミリオンインターナショナル
代表取締役社長
小島豊さん

選考理由

若者たちの貧困が報じられる今、次代を背負う若者たちの育成のために、社会福祉団体と共に「返済無しの奨学金プログラム」創設、支援。余り玉や端玉賞品の一部を基金として活用するなど優れた工夫をしている。

また、地元市民が楽しみにしている高円寺地区の阿波おどり祭りに従業員がボランティア参加し「ホール」が地元民に歓迎され、親しまれる存在になっている。そのほか、心身障がい者施設や養護施設、また、盲導犬育成施設への継続的支援など多岐にわたる福祉貢献をしていることは賞賛に値する。



社会貢献活動審査委員会
委員
永井 多恵子氏

地域とともに歩むことをモットーに 自己成長の機会としてボランティアを

東京都と埼玉県で13ホールを展開する株式会社ミリオンインターナショナルでは、企業理念に「地域社会すべての人々に共感していただける企業を目指す」という「共感経営」を掲げ、パチンコファンのみならず、地域社会から必要とされる企業を目指している。その姿勢が顕著に表われているのが、同社が取り組んでいる様々な社会貢献活動だが、「当社では広告協賛や寄付・寄贈といった経済的支援に加え、ボランティア活動への参加などを含め、可能な限り人的協力、すなわち自分たちで汗をかくことにしています。と言うのも、よりよい街づくりに貢献していくには、地域の皆様とのコミュニケーションを通じて、ともに歩んでいく姿勢が大切だと考えているからです」と、同社の社会貢献活動の窓口となっている経営管理グループの佐藤初巳さんは話す。

こうした姿勢は同社代表をはじめとする上層部が率先して社会貢献活動に取り組んでいることの影響や共感に基づくものだが、「ほとんどの社員がボランティア活動への参加経験がありますが、純粋に自分自身の経験、自己成長の機会と捉えて参加しているようです」と、佐藤さん。自ら汗をかくことを大切にする同社の社会貢献活動に対する姿勢は、東日本大震災の際に東京都遊技業協同組合が実施した「石巻湊地区ボランティア隊派遣」事業に参加したのべ242名の組合員中、51名が同社の社員やアルバイトスタッフであったことにも示されている。



ホールに設置されたpp奨学金の募金箱



「東京高円寺阿波おどり」では、広告協賛ほかゴミ回収や誘導など人的支援も実施



「島田療育センター」のわいわい祭りに守る会の一員として社員が参加

pp奨学金、阿波おどり、福祉施設支援など 様々な社会貢献活動を継続的に実施

現在、同社が取り組んでいる社会貢献活動の代表的なものには、全日遊連阿部理事長、日遊協深谷前会長が遊技業界に呼びかけ「社会福祉法人さほうと21」とともに立ち上げた「pp奨学金(パチンコ・パチスロ奨学金)」への協力がある。これはホールを訪れる遊技客の善意によって得られた余り玉(メダル)や端玉賞品取引額の一部を募金として活用し、経済的に就学が困難な学生に、就学支援として返済義務のない給付型の奨学金を支援するもので、同社店舗内にも専用の募金箱が設置され、2016年12月の事業発足から現在までに総額237万3,930円を寄付している。

また、2009年の高円寺店出店以来、継続しているのが、東京3大祭りの一つ「東京高円寺阿波おどり」への広告協賛と、期間中のごみ回収、参加者の誘導、水分供給などにボランティアスタッフとして参加していることである。毎年、社内でボランティアスタッフの公募を行うというが、公休で構わないので参加したいという申し出が多いという。大きなイベント時だけでなく、毎日、商店街の清掃活動を続けていることもあり、しっかりと地域と良好な関係を築いていることがうかがえる。

この他にも、1961年に当時の都遊連日本橋組合組合長の故・島田伊三郎氏が私財を投じて提供した土地にできた、我が国初の重症心身障がい者施設「島田療育センターを守る会(松下恵代表)」の一員として継続して資金支援するとともに、施設の夏の催事である「わいわい祭り」で模擬店を運営するなどのボランティアにも取り組んでいる。さらに、10年ほど前に当時の練馬区・氷川台店の店長が始めた児童養護施設「錦華学院」への日用品・文具などの寄付を近隣4店舗とともに毎月行ったり、埼玉県・朝霞店で定期的に開催しているフリーマーケットの収益金を盲導犬育成団体「アイメイト協会」へ継続的に寄付している。



お客様との協力で設立・運営する 基金を通じて子どもたちを支援

山形県 株式会社マルキ

「いじめ撲滅企画ちびっこプロレス
教室&ステージ並びにチャリティー
にっこ祭り2017G.W.及び児童養
護施設への支援」事業



株式会社マルキ
代表取締役会長
井上 静夫さん



「マルキ子どもにっこ基金」の募金箱

マルキ子どもにっこ基金を通じて 未来ある子どもたちを支援

1946年に山形市で創立された株式会社マルキは、現在、Zest6店舗から成るパーラー事業部とボウリング場・パティンテイングセンター・飲食店などから成るアミューズメント事業部の2部門を中心に事業を展開しているが、企業理念として、「お客様に愛され、信頼・安心感を提供できる企業」を目指し、「お客様に期待され、社会に貢献できる企業活動」に力を入れていることからわかるように、特に社会貢献活動に積極的に取り組んでいる。

県内の児童養護施設（山形学園、米沢市興望館、寒河江学園、新庄市双葉荘、鶴岡市七窪恩園など）への端玉景品（お菓子）募金をはじめ、子どもたちへのクリスマス募金、災害義援金への参加など、ホールを利用している遊技客と一体となったボランティア活動が主体だが、その他にも献血バスを呼び年2回の献血活動、県健康福祉部への協賛、警察署と協力しての交通安全や指名手配犯逮捕呼びかけCMのLEDビジョン放映など、様々な社会貢献活動を行っており、多方面から高い評価を得ている。

特に2008年2月にはお客様の協力を得ながら、未来ある子どもたちへの支援を中心に活動することを目的とした「マルキ子どもにっこ基金」を設立し、児童養護施設で暮らす子どもたちの支援、さらに国内外で子どもたちのために活動するNPO法人などの団体や国際機関（カンボジアでの学校設立、世界の子どもにワクチンを日本委員会、セー



「チャリティーにっこ祭り」を告知するポスター



多数の観客が集まったチャリティープロレス



児童養護施設へお菓子等を寄贈し活動を支援

ブ・ザ・チルドレンなど）への寄付などを行っている。

いじめ撲滅のためのプロレスイベントと 県内の児童養護施設への継続支援

マルキでは、昨年4月29日、30日の両日、山形ファミリーポウル駐車場とゲームプラザ Be-in2階駐車場を会場に、「いじめ撲滅企画第6弾マルミアミューズメントチャリティーイベント2017G.W.『チャリティーにっこ祭り』を開催した。

このイベントは、プロレスを通じて子どもたちに勇気を与え、いじめ撲滅を訴えるとともに、マルキ子どもにっこ基金に対する協力への感謝を、地域の子どもの笑顔に変えて還元することを目的にしたもので、いじめ撲滅ちびっこプロレス教室、チャリティープロレス（プロレスリングZERO1、一般社団法人あなたのレスラーズ）、いじめ撲滅ショー（ミッチーチェン）、飲食・遊びブース・スタンプラリーなどを実施した。

2日間で約2,000名の来場者があったが、イベント開催にあたっては、のべ70名の従業員がボランティアとして参加し、会場の準備から実施までを担った。また、チラシの配布や参加呼びかけのため、関係団体を事前に訪問し、山形県、山形県青少年育成県民会議、山形市教育委員会の後援を得た。

また、2003年から継続している児童養護施設への支援活動では、端玉景品のお菓子をお客様に寄付してもらい、2ヵ月ごとに毎回3施設に届けたほか、施設の要望に応じて子どもたちのために使ってもらえるよう、クリスマスプレゼントとして各20万円を5施設へマルキ子どもにっこ基金から寄付した。この他にも、児童養護施設の一つ、山形学園が主催したイベントへ従業員のべ8名が運営ボランティアとして参加した。募金を通じてこうした活動を行うことで、児童養護施設に対する理解と認知度が向上しており、お客様を中心に支援の輪が広がっている。



森林整備のボランティア活動で 郷土の自然の大切さについて学ぶ

長野県
株式会社サンティア
「地球温暖化や水害防止に向けた
『サンティアの森づくり』」事業



株式会社サンティア
代表取締役社長
矢崎真治さん



里親となった森林の整備資金の寄付や草刈りなどを実施

長野県の「森林の里親促進事業」に
賛同して南箕輪村で森林整備

地域社会からの理解と信頼がなくては成立しないパチンコ・パチスロホール業界において、いまや社会貢献活動は欠かすことができないものだが、従来からある寄付や資金援助に加え、最近では自ら体を動かし、地域のために汗をかくボランティア活動が増えつつある。長野県内でアミューズメント事業、ホテル事業を営む株式会社サンティアでは、長野県が推進している「森林の里親促進事業」の趣旨に賛同し、2013年から協力企業の一つとして参加している。

この事業は、全面積の約8割を森林が占める長野県が森林の荒廃を阻止する目的で行っているもので、企業が里親となり、森林を所有する県内の集落が里子となり、企業と地域が交流を深めながら森林整備を進めるというものである。里親となった企業は森林整備の資金や労働力を提供することで、地球環境保全に貢献する企業というイメージを広くアピールできるほか、里子となった地域の施設や豊かな自然をレジャーの場などとして活用できるというメリットがある。

サンティアが里親となっている森林は、長野県上伊那郡南箕輪村の村有林で、その整備資金として毎年、12万円を寄付するとともに、同村有林内の経ヶ岳登山道大泉ダムルート付近を春と秋の年2回、若い従業員が中心となって草刈り、枝打ちなどの作業を実施している。なお、作業にあたっては、NPO法人森のライフスタイル研究所の指導



指導を受けながら森林整備作業を進める



急斜面での作業も多く体にこたえる

員からの指導を受けているほか、同法人、上伊那郡地方事務所（林務課）、南箕輪村産業課、同村内のボランティア団体「経ヶ岳友の会」と連携を密にして取り組んでいる。

若い従業員が中心となって深い森で 下草刈りや枝払い作業に取り組む

作業には毎回、サンティアの若い従業員を中心に10名前後が参加するほか、上記の連携先の人々も加わり、総勢30名ほどになるという。まず、経ヶ岳登山道大泉ダムルートに集合し、徒歩で30分ほどかけて作業場所へと向かうが、深い森であるため、そこにたどり着くのも一苦勞。また、急斜面での作業となるため、刈り払い機などは使わず、カマやノコギリなどを用いて人手で行う。昼食をはさんで、午前と午後2時間ずつの作業となるため、相当な体力と気力を必要とする。

普段は室内で働くことが多く、自然に触れる機会が少ない従業員にとって、深い森林での作業は容易ではないが、かえって新鮮であり、また、作業を行った分だけは確実に成果が得られることから達成感も大きいという。昨年は作業活動10回目を記念して、南箕輪村主催でバーベキュー親睦会を開催してもらい、総勢35名が参加したという。

作業場所はトレイルランニングコースや地元の中学校のマラソンコースなどにも近く、南箕輪村からは目立つ場所に「サンティアの森」の看板を設置したいという申し出があり、年内に設置予定とのこと。そうなればさらに、作業に参加した従業員にとって愛着がわく場所になるに違いない。

県が行う事業に参画する形で実施している森林保護活動だが、それにボランティアとして参加することで、郷土の自然の豊かさを見つめ直すことにつながるだけでなく、近年問題となっている温暖化や水害を考えるきっかけにもなるだけに、教育効果の高い社会貢献である。



盲導犬育成の支援と啓蒙活動で お客様や従業員の意識も向上

福岡県 株式会社イクティス 「九州盲導犬協会への盲導犬 育成資金の募金・贈呈及び 啓蒙活動」事業



株式会社イクティス
代表取締役
満江多佳子さん



九州盲導犬協会への盲導犬育成資金の贈呈式

盲導犬への理解を深めるとともに 九州盲導犬協会への継続的寄付

福岡県に拠点を置き、同県、大分県、兵庫県、大阪府で計18のヴィーナスギャラリー、スロパラⅢといったホールを展開する株式会社イクティスでは、2001年から盲導犬育成のための支援と盲導犬に関する情報発信や啓蒙活動に取り組んでいる。

この事業を始めるきっかけになったのは、同社の施設を利用しているお客様に盲導犬ユーザーの人がいたこと、同社グループの代表者が盲導犬ユーザーの人と交流があったことだ。そうした交流の中で盲導犬の育成には多額の費用がかかるうえ、盲導犬を必要としている人に対して、盲導犬の数が圧倒的に足りていないこと、また盲導犬が貸与されることで、目の不自由な人々の行動範囲が大きく広がり、外出の機会が増えることなどを知ったという。

同社の企業理念に「お客様に喜んで頂くために」というフレーズがあり、そのお客様とは、ホールに来場する遊技客だけではなく、地域でともに暮らす障がいを持つ人々も含まれ、そうした人々に対して、企業として何かできることはないと考え、盲導犬育成支援を開始した。公益財団法人九州盲導犬協会が福岡県内にあることから、地元で恩返ししたいという思いもあったという。九州盲導犬協会からは16年におよぶ支援活動が認められ、感謝状も授与されている。



九州盲導犬協会から感謝状を授与



活動を伝えるポスターをホールに掲示し、遊技客に周知

ホール来場者からの活動への関心と 従業員の仕事のやりがいにつながる

イクティスでは毎年4月、100万円を九州盲導犬協会へ寄贈しているが、そのときに全社員が参加して贈呈式を実施するとともに、同協会に依頼して盲導犬に関する講演や盲導犬の訓練のデモンストレーションをしてもらっているという。

この贈呈式にはRKB毎日放送、FBS福岡放送、KBC九州朝日放送など、地元の放送局各社が取材に訪れ、報道番組などで放映されていることから盲導犬に対する関心が高まるうえ、その番組を見たというホール来場者から、「なぜ、盲導犬育成支援事業をしているのか?」という支援活動に対する問い合わせを受ける機会も増えてきたと、同社では話す。その趣旨を説明すると、「盲導犬についてよく知らなかった」という人が多く、同社の活動が盲導犬理解の一助となっていることを実感しているという。また、贈呈式後は、活動の内容をはじめ、盲導犬の現状などをまとめたポスターを作成し、全店舗や関連施設に掲示することで、来店客への情報発信と盲導犬への理解を呼び掛けている。

こうした活動を通じ、社員の中に盲導犬に対する関心が高まり、盲導犬に関して自ら進んで情報収集を行ったり、街中で盲導犬に出会ったときに、適切な対応ができる人が増えているという。同時に、自分たちの活動が社会貢献につながっていることを実感できることで、仕事のやりがいやモチベーションにもつながっているという。

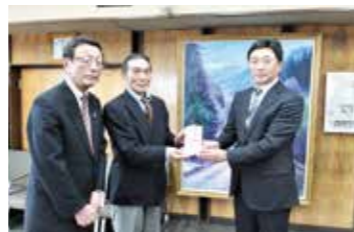
同社では今後も地域社会の皆様への感謝の気持ちを忘れず、地域社会に盲導犬への理解が一層広がることを期待するだけでなく、社業や社会貢献活動を通じて地域社会から愛される企業を目指し、努力を重ねていくという。

最終審査ノミネート賞

都府県方面部門

●青森県遊技業協同組合 「文部科学大臣杯争奪第26回大会 鷹揚旗全国選抜剣道大会2018への後援」事業

全国各地から選抜された小・中学生約1,000人が参加する剣道大会を平成26年から運営を後援。



●静岡県遊技業協同組合 「静岡県教育委員会・青少年等育成3事業 支援のための寄付金の贈呈」事業

海外への留学支援を行う「ふじのくにグローバル人材育成事業」や将来の夢や希望などを中学生が発表する「わたしの主張事業」、子どもたちが共同生活しながら通学する「地域における通学合宿事業」の3事業を支援。



●奈良県遊技業協同組合 「ギャンブル依存対策施設に寄付 ～4年連続貢献活動～」事業

ギャンブルなどの依存症者の社会復帰支援やセミナーを行う一般社団法人ワンネスグループに活動資金を4年連続で寄贈。



●山口県遊技業協同組合 「障害者福祉作業所に対する物品支援活動」事業

福祉作業所の老朽化した作業道具や娯楽用品を刷新し、快適な作業環境を構築するため、県内13カ所の作業所に要望する物品を贈呈。



●香川県遊技業協同組合 「断続的な『安全・安心街づくり活動』と『暴力団排除活動』の支援」事業

安全・安心な地域社会を実現するため、香川県防犯協会連合会や香川県暴追センター等に対し、資金及び物品等の継続的な支援を実施。



支部組合部門

●青森県遊技業協同組合 上十三・下北支部 「防犯カメラの寄贈」事業

地域の犯罪抑止と安心・安全の実現のため、野辺地町・むつ市・三沢市に対しそれぞれ防犯カメラ設置費用を寄贈。



●千葉県遊技業協同組合 船橋遊技場防犯組合 「『電話de詐欺』被害防止対策」事業

高齢者に対する電話詐欺対策のため、船橋市、船橋警察署と連携を図り電話機に簡単に接続し使用できる「詐欺防止装置」180台を船橋市に寄贈。



●奈良県遊技業協同組合 生駒支部、奈良西支部 「支部全店舗での月1回の清掃活動の実施～日本列島クリーン大作戦～」事業

地域に根ざし愛されるホールを目指し、生駒支部、奈良西支部の全店舗で月に1度、ホール周辺や通学路等の清掃活動を実施。



●福岡県遊技業協同組合 柳川遊技場組合 「九州北部豪雨援助」事業

九州北部豪雨による被災者支援のため、バスタオルの物品支援と被災住宅の瓦礫の片付けにボランティア参加。



組合員ホール部門

●札幌方面遊技事業協同組合 昌栄株式会社 BIG大王 「冬期間における雪害対策への貢献」事業

近隣住民の雪捨て場としてホール駐車場を開放。運ばれた雪は従業員が小型重機で除雪し、雪の排泄運搬費はホール自らの費用で実施。



●宮城県遊技業協同組合 株式会社カツヨシ商事 「第5回みやぎ元気マラソン2017」事業

地域活性化や交流のために未就学児から高齢者まで多数参加する「みやぎ元気マラソン」を2013年から継続実施し、資金面および大会運営スタッフ等の人的支援。



●茨城県遊技業協同組合 有限会社伸和商事

「シンワ杯 第6回学童野球大会の開催について」事業

青少年健全育成のため、毎年、県内の学童野球チームの参加を募り軟式野球大会を継続開催。



●埼玉県遊技業協同組合 サンキョー株式会社 SAP草加店

「SAP草加店『SAP草加 防犯パトロール隊』による安心安全まちづくり活動」事業

草加市松江自治会の実施している「地域防犯パトロール」に共催し、ホール従業員による専従パトロール隊を結成。下校時や夜間パトロールを実施。



●広島県遊技業協同組合 プローバグループ (NPO フォルツアプローバ)

「スポーツを通じた地域振興、青少年育成」事業

青少年健全育成や健康増進のため、幅広い年代の方が楽しめる大規模なフットサル大会を開催。



●長崎県遊技業協同組合 ひぐちグループ 株式会社ひぐち、三宝商事株式会社

「第8回まるみつ献血運動～けんけつ まるみつ まるみつが社会のためにできること～」事業

県民が多く集まるイベント会場において、長崎市赤十字血液センターと連携した献血活動を継続実施。



募集と審査の結果

第13回「社会貢献大賞」は都府県方面組合が実施した事業のほか、規模は小さくとも地域への貢献度が高い支部組合や組合員ホールが実施した事業を、事業の実施主体ごとに募集した。

29都府県方面組合から81件の申請があり(昨年は35都府県方面組合から80件の申請)、申請の内訳は、実施主体別で、都府県方面組合23件、支部組合18件、組合員ホール40件であった。

3月23日(金)の常任幹事による第1次審査会、4月12日(木)の「社会貢献活動審査委員会」(杉浦正健委員長、脇田直枝委員長代行)で審査した結果、下記の事業を顕彰することとした。その結果、第13回社会貢献大賞に京都府遊技業協同組合の「公益財団法人京遊連社会福祉基金創立30周年記念」事業に決定したほか、都府県方面部門の最優秀賞には大阪府遊技業協同組合の「大遊協 Presents 熊本地震復興応援」事業に決定し、あわせて合計12の事業を表彰することとした。審査結果と顕彰事業の詳しい事業内容は、この「社会貢献活動年間報告書」に記載されている。

今回より第1次審査で選出され最終審査にノミネートされた事業に「最終審査ノミネート賞」を授与することにした。

社会貢献活動 データ編

■全国データ

- 98 社会貢献、社会還元 拠出額状況／年別 拠出額と拠出件数／年別 現金・物品の割合
- 99 平成29年拠出元別 拠出額と割合／平成29年拠出元別 現金・物品の割合
- 100 社会貢献、社会還元 拠出分野別状況／平成29年分野別 拠出額と割合
- 101 平成29年分野別 現金・物品の割合
- 102 都府県方面別 社会貢献、社会還元金集計表(総金額)
- 103 都府県方面別 社会貢献、社会還元件数集計表(総件数)
- 104 都府県方面別 社会貢献、社会還元金集計表(現金明細)
- 105 都府県方面別 社会貢献、社会還元金集計表(物品明細)
- 106 都府県方面別 社会貢献、社会還元件数集計表(現金件数・物品件数)
- 107 平成29年 社会貢献・社会還元の実施状況調査結果総評

■都府県方面データ

※各都府県方面の理事長は平成30年7月1日現在のものです

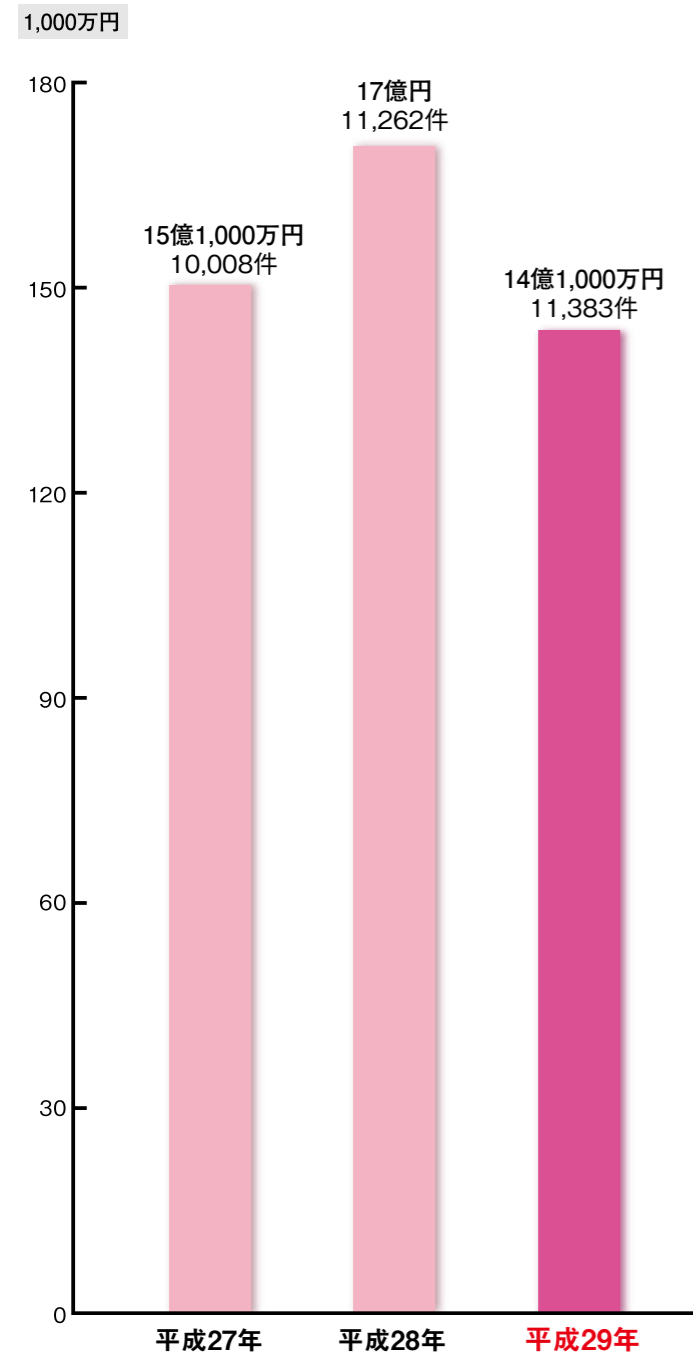
北海道	126	新潟県	145	広島県
108 北海道・札幌方面	127	山梨県	146	山口県
109 北海道・旭川方面	128	長野県	四国	
110 北海道・釧路方面	129	静岡県	147	徳島県
111 北海道・北見方面	中部		148	香川県
112 北海道・函館方面	130	富山県	149	愛媛県
東北	131	石川県	150	高知県
113 青森県	132	福井県	九州	
114 岩手県	133	岐阜県	151	福岡県
115 宮城県	134	愛知県	152	佐賀県
116 秋田県	135	三重県	153	長崎県
117 山形県	近畿		154	熊本県
118 福島県	136	滋賀県	155	大分県
東京	137	京都府	156	宮崎県
119 東京都	138	大阪府	157	鹿児島県
関東	139	兵庫県	158	沖縄県
120 茨城県	140	奈良県		
121 栃木県	141	和歌山県		
122 群馬県	中国			
123 埼玉県	142	鳥取県		
124 千葉県	143	島根県		
125 神奈川県	144	岡山県		



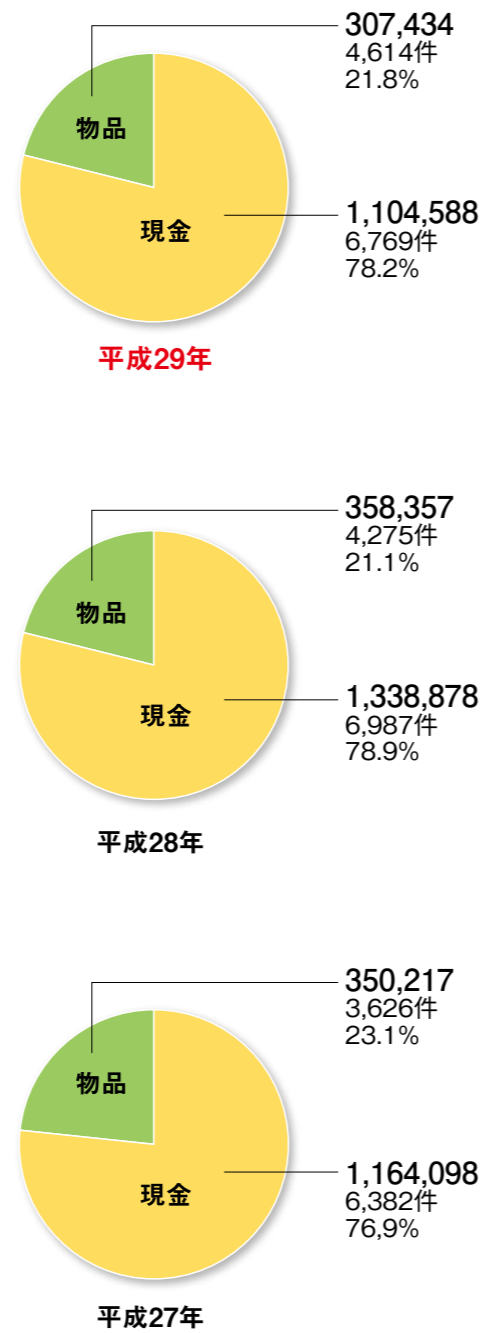
資料提供 全日本遊技事業協同組合連合会(平成29年全日遊連および各都府県方面組合のデータ)

平成29年 社会貢献・社会還元の実施状況調査結果

■年別 抛却額と抛却件数

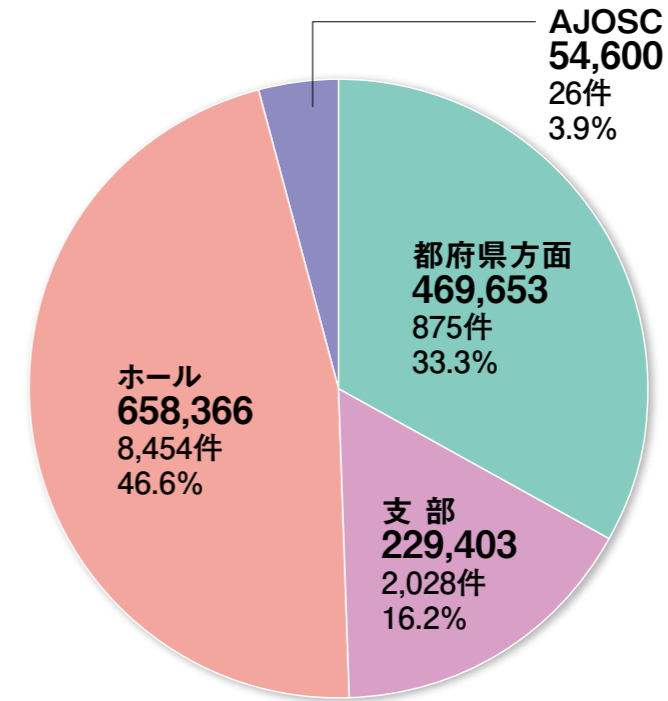


■年別 現金・物品の割合 (単位:千円)



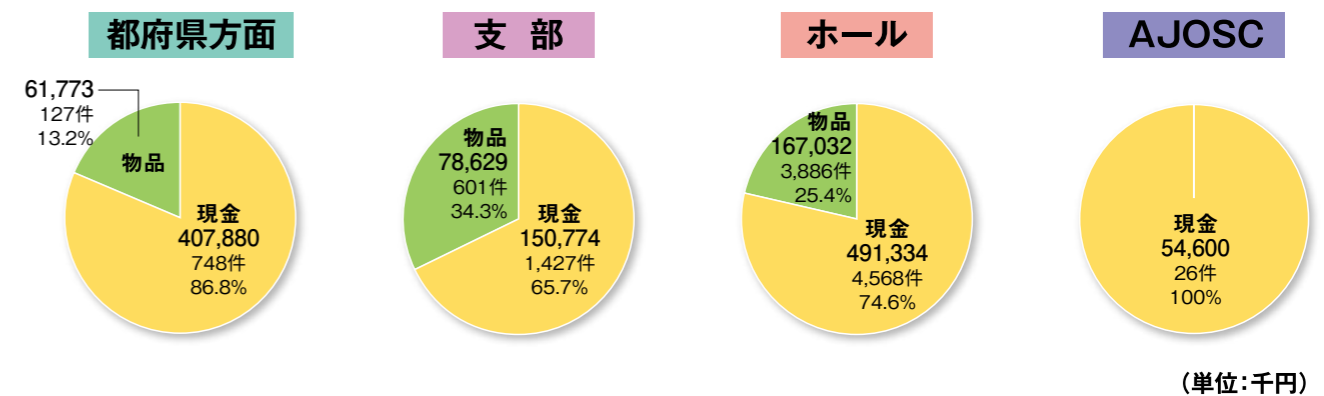
■平成29年 抛却元別 抛却額と割合 (単位:千円)

総抛却額……1,412,022,421円
総件数……11,383件



■平成29年 抛却元別 現金・物品の割合

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。



対象期間	平成27年	平成28年	平成29年	
抛却総額 (件数)	1,514,315,342円 (10,008件)	1,697,235,537円 (11,262件)	1,412,022,421円 (11,383件)	
内訳	現金抛却額 (件数)	1,164,098,136円 (6,382件)	1,338,878,234円 (6,987件)	1,104,588,129円 (6,769件)
	物品抛却額 (件数)	350,217,206円 (3,626件)	358,357,303円 (4,275件)	307,434,292円 (4,614件)

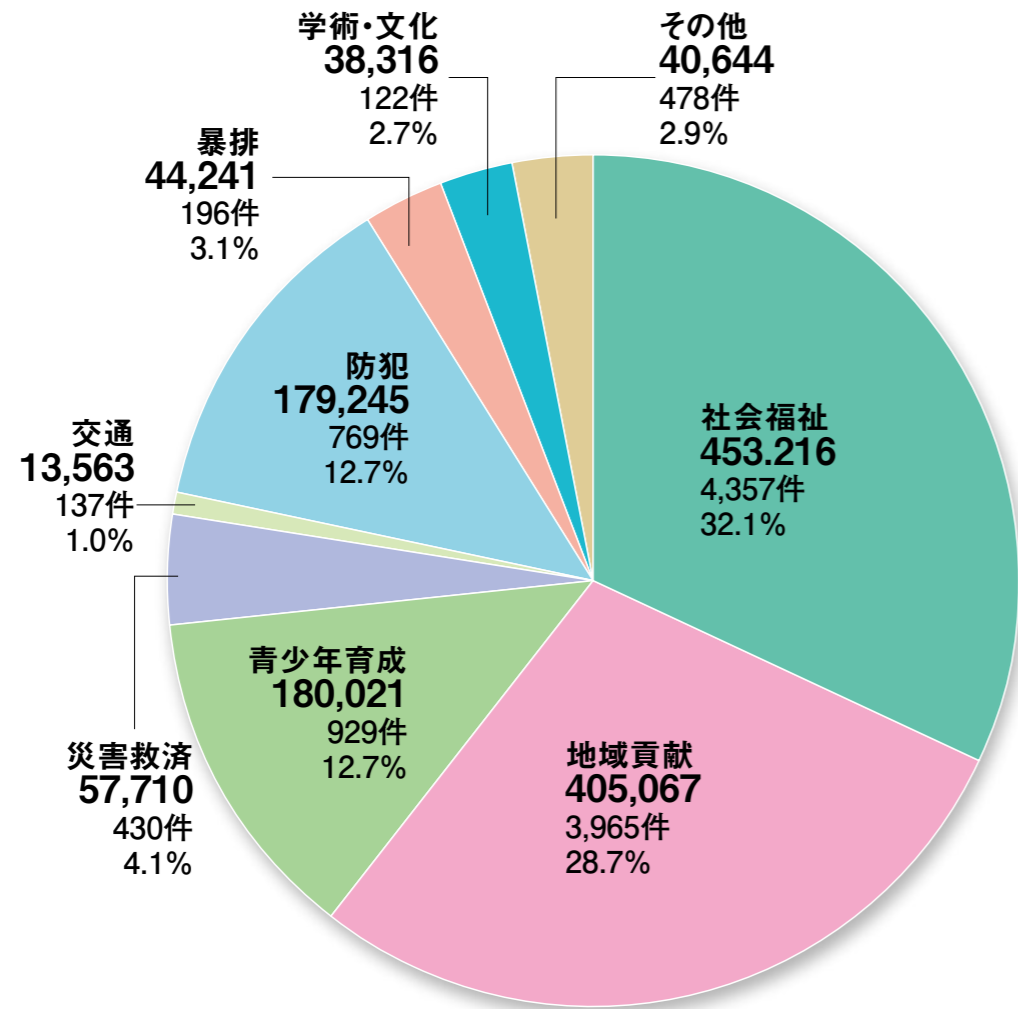
抛却元	都府県方面	支部	ホール	AJOSC	
抛却総額 (件数)	469,653,386円 (875件)	229,403,168円 (2,028件)	658,365,867円 (8,454件)	54,600,000円 (26件)	
内訳	現金抛却額 (件数)	407,880,295円 (748件)	150,773,936円 (1,427件)	491,333,898円 (4,568件)	54,600,000円 (26件)
	物品抛却額 (件数)	61,773,091円 (127件)	78,629,232円 (601件)	167,031,969円 (3,886件)	—

全国データ

平成29年 社会貢献・社会還元の実施状況調査結果

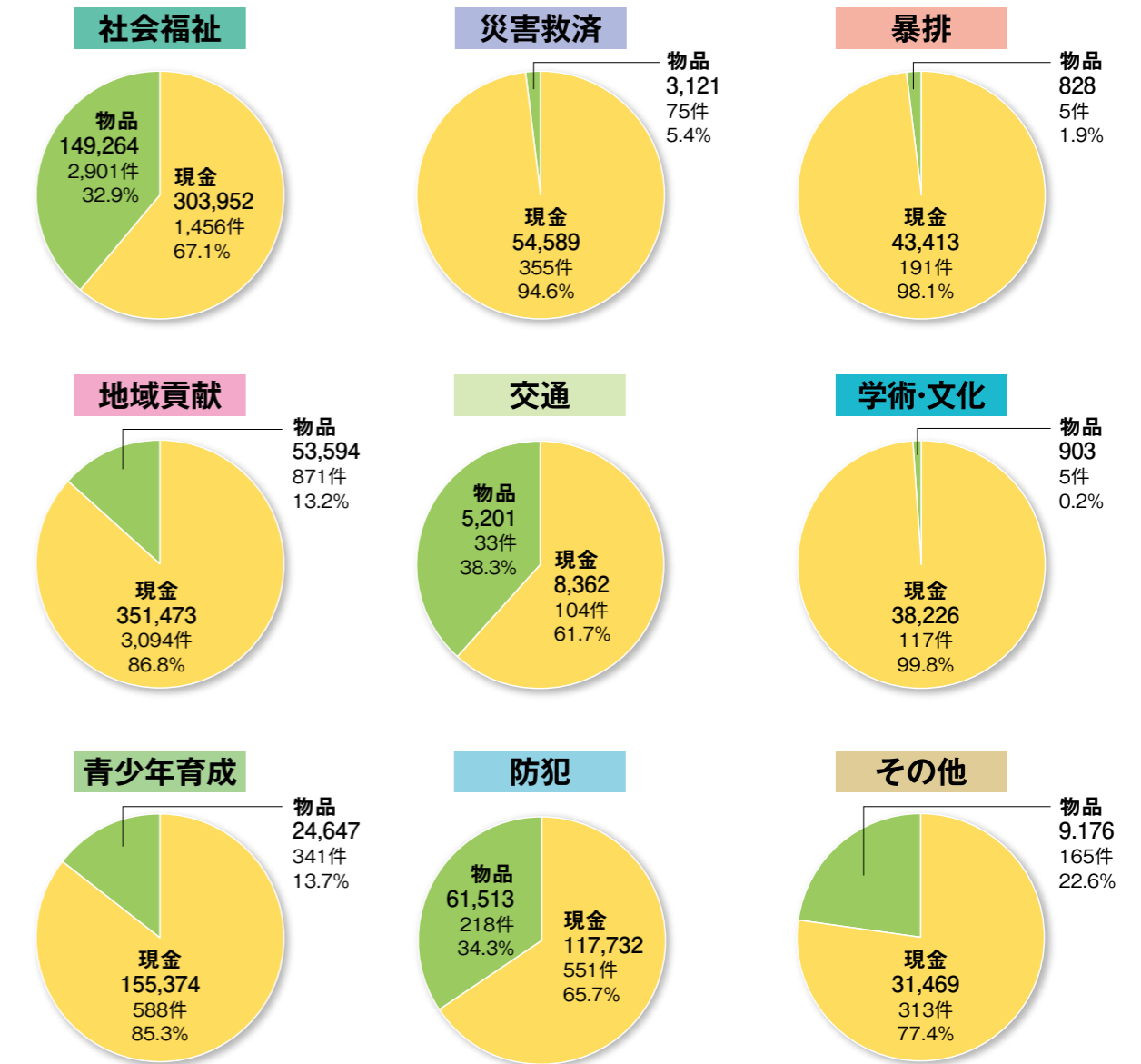
■平成29年分野別 拠出額と割合 (単位:千円)

総拠出額……1,412,022,421円
総件数……11,383件



■平成29年分野別 現金・物品の割合 (単位:千円)

現金総額……1,104,588,129円
件数……6,769件
物品総額……307,434,292円
件数……4,614件



拠出内容	社会福祉	地域貢献	青少年育成	災害救済	
拠出総額 (件数)	453,216,397円 (4,357件)	405,066,982円 (3,965件)	180,020,558円 (929件)	57,709,765円 (430件)	
内訳	現金拠出額 (件数)	303,952,369円 (1,456件)	351,473,165円 (3,094件)	155,373,507円 (588件)	54,588,565円 (355件)
	物品拠出額 (件数)	149,264,028円 (2,901件)	53,593,817円 (871件)	24,647,051円 (341件)	3,121,200円 (75件)

拠出内容	交通	防犯	暴排	学術・文化	その他	
拠出総額 (件数)	13,562,788円 (137件)	179,244,620円 (769件)	44,240,792円 (196件)	38,316,168円 (122件)	40,644,351円 (478件)	
内訳	現金拠出額 (件数)	8,361,720円 (104件)	117,731,518円 (551件)	43,412,800円 (191件)	38,225,848円 (117件)	31,468,637円 (313件)
	物品拠出額 (件数)	5,201,068円 (33件)	61,513,102円 (218件)	827,992円 (5件)	90,320円 (5件)	9,175,714円 (165件)

平成29年 社会貢献・社会還元の実施状況調査結果

都府県方面別 社会貢献、社会還元金集計表(総金額)

(総金額) ※総金額は現金と物品を現金換算した金額の総額です。

都府県方面(組合)	拠出内容(金額)										合計
	社会福祉	地域貢献	青少年育成	災害救済	交通	防犯	暴排	学術文化	その他		
北海道	札幌	9,044,239	3,351,938	315,000	100,000	39,920	9,219,692	300,000	645,600	3,501,906	26,518,295
	旭川	1,134,308	1,540,000	310,000	0	0	687,501	0	1,010,000	0	4,681,809
	釧路	380,402	4,467,000	260,000	0	22,800	200,000	130,000	0	25,000	5,485,202
	北見	0	40,000	0	100,000	0	800,000	0	0	0	940,000
	函館	4,107,704	1,411,000	1,098,500	0	5,200	2,536,400	100,000	40,000	0	9,298,804
東北	青森	7,156,474	2,586,877	1,477,588	1,128,624	608,000	3,453,984	30,000	67,400	858,672	17,367,619
	岩手	8,036,277	10,777,102	543,856	1,292,000	252,000	2,063,200	665,000	1,821,260	233,000	25,683,695
	宮城	7,671,393	3,803,309	544,624	582,494	110,000	1,739,000	1,520,000	0	90,000	16,060,820
	秋田	2,150,106	3,136,400	20,000	0	0	1,268,732	360,000	0	310,000	7,245,238
	山形	4,112,000	1,582,380	527,959	665,100	0	2,762,756	0	0	10,000	9,660,195
	福島	2,572,250	2,998,000	367,600	600,000	250,000	2,888,400	606,000	105,000	441,932	10,829,182
関東	東京	28,701,532	139,917,278	12,473,880	1,743,589	512,000	8,770,310	71,712	1,200,000	7,235,629	200,625,930
	茨城	3,247,000	1,895,769	1,500,000	100,000	0	1,000,000	200,000	0	59,000	8,001,769
	栃木	3,038,586	5,586,177	1,086,761	371,669	0	108,000	250,000	60,000	0	10,501,193
	群馬	670,703	1,695,549	1,966,000	1,074,685	64,800	914,230	160,000	50,000	461,960	7,057,927
	埼玉	17,677,163	10,022,886	1,957,776	1,292,871	1,246,800	1,573,134	530,000	13,105,000	182,171	47,587,801
	千葉	13,900,368	3,690,299	3,515,400	2,043,503	0	13,418,400	2,720,000	3,900,000	185,300	43,373,270
	神奈川	71,443,196	13,601,644	33,791,029	1,899,214	761,400	6,386,173	2,032,880	5,000	510,000	130,430,536
	新潟	4,974,000	1,635,964	5,000	0	0	200,000	500,000	0	130,000	7,444,964
	山梨	2,929,350	1,232,000	100,000	0	0	970,000	320,000	0	1,112,900	6,664,250
	長野	5,518,891	8,464,000	2,787,050	1,384,516	233,000	4,361,897	0	210,000	5,000	22,964,354
	静岡	19,774,201	8,716,200	8,195,930	20,000	162,000	1,094,000	1,180,000	600,000	749,327	40,491,658
中部	富山	9,591,240	1,207,060	982,000	1,558,467	162,000	3,519,000	50,000	30,000	0	17,099,767
	石川	1,533,197	60,000	332,000	0	345,000	800,000	0	0	0	3,070,197
	福井	1,047,000	378,567	1,051,200	0	0	1,499,997	200,000	0	0	4,176,764
	岐阜	9,787,502	2,699,141	715,000	1,929,296	0	2,243,100	620,000	10,000	8,438	18,012,477
	愛知	32,366,960	7,394,641	739,136	2,284,358	1,410,000	21,662,691	6,030,000	0	600,540	72,488,326
	三重	4,301,858	2,003,406	10,920,000	1,971,210	36,000	813,000	30,000	0	35,000	20,110,474
近畿	滋賀	9,829,318	1,819,469	819,376	325,061	609,288	542,958	0	0	484,446	14,429,916
	京都	36,907,753	1,884,298	22,450	172,671	0	210,000	0	30,000	10,000	39,237,172
	大阪	26,155,380	2,118,150	17,520,310	1,013,200	421,000	38,175,149	2,610,000	8,734,688	300,000	97,047,877
	兵庫	23,211,237	16,905,114	5,210,940	410,000	40,000	6,851,000	3,931,000	454,000	1,474,036	58,487,327
	奈良	1,832,491	1,090,000	500,000	3,000	90,000	2,630,000	1,200,000	2,100,000	0	9,445,491
	和歌山	3,349,566	720,000	538,000	68,387	120,000	420,000	210,000	0	999,000	6,424,953
中国	鳥取	2,738,180	1,554,311	62,000	0	108,000	582,444	370,000	5,000	193,200	5,613,135
	島根	2,126,380	4,758,254	6,304,404	460,000	0	0	120,000	10,000	0	13,779,038
	岡山	10,779,944	47,250,070	4,967,780	200,000	50,000	500,000	0	1,314,660	1,067,600	66,130,054
	広島	4,003,074	5,760,866	3,654,300	0	670,000	4,950,760	10,915,200	30,000	423,200	30,407,400
	山口	3,131,143	1,275,795	1,824,534	115,000	0	2,215,000	530,000	4,000	628,000	9,723,472
四国	徳島	49,091	321,379	0	0	0	0	100,000	20,000	0	490,470
	香川	1,124,742	1,913,000	3,059,718	1,000,000	0	1,000,000	250,000	25,000	160,000	8,532,460
	愛媛	824,696	5,694,831	2,562,300	31,921	1,609,140	896,824	100,000	15,000	344,600	12,079,312
	高知	2,245,950	9,848,288	525,200	0	0	100,000	750,000	0	50,000	13,519,438
九州	福岡	7,165,378	6,817,402	2,856,332	2,519,604	20,000	4,188,000	1,279,000	27,000	906,860	25,779,576
	佐賀	3,491,754	2,227,971	170,000	192,000	0	1,478,800	300,000	5,000	307,800	8,173,325
	長崎	3,194,840	2,403,049	1,291,602	1,772	0	1,458,000	655,000	10,000	2,885,601	11,899,864
	熊本	7,442,994	9,947,490	1,626,617	8,046,417	2,117,840	5,296,812	1,010,000	345,000	6,442,704	42,275,874
	大分	3,804,120	10,077,100	403,462	23,060	20,000	3,028,000	335,000	132,560	1,705,843	19,529,145
	宮崎	4,406,413	3,922,812	3,071,960	7,736,076	443,200	3,148,340	300,000	10,000	1,880,000	24,918,801
	鹿児島	4,004,230	5,047,830	487,724	50,000	630,000	540,120	100,000	30,000	1,292,989	12,182,893
	沖縄	4,529,823	15,814,916	3,558,260	0	393,400	4,078,816	570,000	2,155,000	2,342,697	33,442,912
小計		443,216,397	405,066,982	148,620,558	44,509,765	13,562,788	179,244,620	44,240,792	38,316,168	40,644,351	1,357,422,421
全日遊連		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
AJOSC		10,000,000	0	31,400,000	13,200,000	0	0	0	0	0	54,600,000
合計		453,216,397	405,066,982	180,020,558	57,709,765	13,562,788	179,244,620	44,240,792	38,316,168	40,644,351	1,412,022,421

全日遊連 平成30年3月31日

都府県方面別 社会貢献、社会還元件数集計表(総件数)

(総件数)

都府県方面(組合)	拠出内容(件数)										合計
	社会福祉	地域貢献	青少年育成	災害救済	交通	防犯	暴排	学術文化	その他		
北海道	札幌	186	63	3	1	2	14	3	2	25	299
	旭川	9	21	2	0	0	3	0	2	0	37
	釧路	4	14	3	0	2	2	2	0	1	28
	北見	0	3	0	1	0	2	0	0	0	6
	函館	70	28	14	0	1	12	1	2	0	128
東北	青森	184	128	12	66	8	26	3	4	17	448
	岩手	119	162	12	6	8	32	10	9	5	363
	宮城	211	110	21	7	4	14	8	0	4	379
	秋田	31	56	1	0	0	10	6	0	3	107
	山形	73	24	24	3	0	34	0	0	1	159
	福島	63	87	7	2	4	14	3	2	9	191
関東	東京	100	127	34	18	5	73	1	12	29	399
	茨城	22	34	1	1	0	1	1	0	2	62
	栃木	73	27	4	3	0	1	1	1	0	110
	群馬	8	53	5	3	3	6	2	1	16	97
	埼玉	503	196	14	12	11	13	5	3	4	761
	千葉	134	83	11	15	0	9	2	11	3	268
	神奈川	226	224	34	11	12	46	17	1	3	574
	新潟	20	24	1	0	0	6	1	0	2	54
	山梨	27	43	1	0	0	3	1	0	9	84
	長野	37	83	13	7	2	20	0	2	1	165
	静岡	89	196	39	1	6	6	7	1	8	353
中部	富山	74	36	12	19	3	25	1	2	0	172
	石川	7	3	2	0	4	3	0	0	0	19
	福井	14	12	14	0	0	7	1	0	0	48
	岐阜	177	60	8	15	0	15	4	1	1	281
	愛知	149	157	8	30	7	24	5	0	6	386
	三重	135	66	24	16	1	6	1	0	2	251
近畿	滋賀	27	37	6	5	4	11	0	0	8	98
	京都	91	82	1	3	0	4	0	1	1	183
	大阪	144	38	26	12	6	69	3	11	1	310
	兵庫	146	171	26	6	2	45	25	5	21	447
	奈良	19	15	1	1	3	5	1	3	0	48
	和歌山	156	36	5	1	3	1	5	0	6	213
中国	鳥取	104	45	3	0	1	10	5	1	8	177
	島根	90	83	44	3	0	0	3	1	0	224
	岡山	89	48	14	1	1	1	0	6	7	167
	広島	43	71	39	0	3	32	27	1	5	221
	山口	27	46	42	2	0	11	2	1	6	137
四国	徳島	2	23	9	0	0	0	1	1	1	37
	香川	8	34	16	1	0	1	2	3	3	68
	愛媛	23	166	40	4	10	11	1	2	4	261
	高知	25	81	44	0	0	1	3	0	1	155
九州	福岡	155	88	51	95	1	29	5	2	31	457
	佐賀	88	50	4	12	0	6	1	1	1	163
	長崎	66	103	30	1	0	10	9	1	51	271
	熊本	102	109	16	16	4	12	2	5	26	292
	大分	94	129	18	1	1	15	8	12	61	339
	宮崎	50	92	80	20	3	6	1	2	5	259
	鹿児島	17	96	14	1	4	8	1	1	37	179
	沖縄	45	202	59	0	8	54	5	6	43	422
小計		4,356	3,965								

都府県方面別 社会貢献、社会還元件数集計表(現金件数・物品件数)

(現金件数)

都府県方面(組合)	拠出内容(件数)									合計	
	社会福祉	地域貢献	青少年育成	災害救済	交通	防犯	暴排	学術文化	その他		
北海道	札幌	19	56	3	1	2	13	3	2	25	124
	旭川	9	21	2	0	0	3	0	2		37
	釧路	3	13	3	0	2	2	2	0	1	26
	北見	0	1	0	1	0	2	0	0	0	4
	函館	11	27	1	0	0	9	1	2	0	51
東北	青森	12	113	12	64	8	25	3	3	14	254
	岩手	49	131	10	4	8	32	10	7	5	256
	宮城	59	92	20	7	4	13	7	0	4	206
	秋田	3	34	1	0	0	4	6	0	3	51
	山形	9	22	3	2	0	4	0	0	1	41
	福島	20	87	5	2	4	13	3	2	7	143
	東京	76	101	29	18	4	33	0	12	23	296
関東	茨城	8	24	1	1	0	1	1	0	2	38
	栃木	12	25	3	2	0	0	1	1	0	44
	群馬	2	26	5	3	3	5	2	1	5	52
	埼玉	211	182	5	12	10	8	5	3	4	440
	千葉	45	60	6	15	0	1	2	11	1	141
	神奈川	155	160	15	9	2	15	15	1	2	374
	新潟	3	21	1	0	0	6	1	0	2	34
	山梨	8	43	1	0	0	3	1	0	9	65
	長野	21	73	12	5	1	16	0	2	1	131
	静岡	41	117	25	1	6	6	7	1	8	212
中部	富山	10	32	8	5	3	25	1	2	0	86
	石川	0	3	1	0	1	3	0	0	0	8
	福井	12	10	12	0	0	5	1	0	0	40
	岐阜	47	20	7	15	0	15	4	1	1	110
	愛知	49	128	6	29	6	11	5	0	5	239
	三重	7	43	15	16	1	5	1	0	2	90
近畿	滋賀	13	34	4	2	3	0	0	0	8	64
	京都	49	76	1	1	0	4	0	1	1	133
	大阪	59	34	20	12	5	53	3	11	1	198
	兵庫	86	154	15	6	2	44	25	5	21	358
	奈良	11	15	1	1	3	5	1	3	0	40
	和歌山	8	34	5	1	3	1	5	0	6	63
中国	鳥取	27	36	3	0	0	9	5	1	6	87
	島根	14	65	7	3	0	0	3	1	0	93
	岡山	39	41	10	1	1	1	0	4	7	104
	広島	34	67	34	0	3	28	27	1	5	199
	山口	8	43	15	2	0	11	2	1	6	88
四国	徳島	2	7	0	0	0	0	1	1	0	11
	香川	6	34	10	1	0	1	2	3	3	60
	愛媛	17	139	26	4	7	6	1	2	4	206
	高知	9	76	8	0	0	1	3	0	1	98
九州	福岡	76	53	49	62	1	27	5	2	2	277
	佐賀	8	32	4	0	0	4	1	1	1	51
	長崎	22	78	29	1	0	10	9	1	3	153
	熊本	14	101	13	16	0	2	2	5	25	178
	大分	12	59	18	1	1	14	8	12	42	167
	宮崎	6	69	25	20	0	4	1	2	5	132
	鹿児島	13	88	11	1	3	6	1	1	1	125
	沖縄	21	94	51	0	7	42	4	6	40	265
小計		1455	3094	571	347	104	551	191	117	313	6,743
AJOSC		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全日遊連		1	0	17	8	0	0	0	0	0	26
合計		1,456	3,094	588	355	104	551	191	117	313	6,769

(物品件数)

都府県方面(組合)	拠出内容(件数)									合計	
	社会福祉	地域貢献	青少年育成	災害救済	交通	防犯	暴排	学術文化	その他		
北海道	札幌	167	7	0	0	0	1	0	0	0	175
	旭川	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	釧路	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
	北見	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
	函館	59	1	13	0	1	3	0	0	0	77
東北	青森	172	15	0	2	0	1	0	1	3	194
	岩手	70	31	2	2	0	0	0	2	0	107
	宮城	152	18	1	0	0	1	1	0	0	173
	秋田	28	22	0	0	0	6	0	0	0	56
	山形	64	2	21	1	0	30	0	0	0	118
	福島	43	0	2	0	0	1	0	0	2	48
	東京	24	26	5	0	1	40	1	0	6	103
関東	茨城	14	10	0	0	0	0	0	0	0	24
	栃木	61	2	1	1	0	1	0	0	0	66
	群馬	6	27	0	0	0	1	0	0	11	45
	埼玉	292	14	9	0	1	5	0	0	0	321
	千葉	89	23	5	0	0	8	0	0	2	127
	神奈川	71	64	19	2	10	31	2	0	1	200
	新潟	17	3	0	0	0	0	0	0	0	20
	山梨	19	0	0	0	0	0	0	0	0	19
	長野	16	10	1	2	1	4	0	0	0	34
	静岡	48	79	14	0	0	0	0	0	0	141
中部	富山	64	4	4	14	0	0	0	0	0	86
	石川	7	0	1	0	3	0	0	0	0	11
	福井	2	2	2	0	0	2	0	0	0	8
	岐阜	130	40	1	0	0	0	0	0	0	171
	愛知	100	29	2	1	1	13	0	0	1	147
	三重	128	23	9	0	0	1	0	0	0	161
近畿	滋賀	14	3	2	3	1	11	0	0	0	34
	京都	42	6	0	2	0	0	0	0	0	50
	大阪	85	4	6	0	1	16	0	0	0	112
	兵庫	60	17	11	0	0	1	0	0	0	89
	奈良	8	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	和歌山	148	2	0	0	0	0	0	0	0	150
中国	鳥取	77	9	0	0	1	1	0	0	2	90
	島根	76	18	37	0	0	0	0	0	0	131
	岡山	50	7	4	0	0	0	0	2	0	63
	広島	9	4	5	0	0	4	0	0	0	22
	山口	19	3	27	0	0	0	0	0	0	49
四国	徳島	0	16	9	0	0	0	0	0	1	26
	香川	2	0	6	0	0	0	0	0	0	8
	愛媛	6	27	14	0	3	5	0	0	0	55
	高知	16	5	36	0	0	0	0	0	0	57
九州	福岡	79	35	2	33	0	2	0	0	29	180
	佐賀	80	18	0	12	0	2	0	0	0	112
	長崎	44	25	1	0	0	0	0	0	48	118
	熊本	88	8	3	0	4	10	0	0	1	114
	大分	82	70	0	0	0	1	0	0	19	172
	宮崎	44	23	55	0	3	2	0	0	0	127
	鹿児島	4	8	3	0	1	2	0	0	36	54
	沖縄	24	108	8	0	1	12	1	0	3	157
小計		2,901	871	341	75	33	218	5	5	165	4,614
AJOSC		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
全日遊連		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		2,901	871	341	75	33	218	5	5	165	4,614

全日遊連 平成30年3月31日

平成29年 社会貢献・社会還元の実施状況調査結果総評

平成29年1~12月

総額14億1,202万円の拠出

報告：全日本社会貢献団体機構 事務局

平成29年は、地域貢献の活動が活発に

平成29年1月から12月までの1年間に展開された社会貢献活動を対象に、都府県方面組合、各支部組合及び各組合員ホールからの報告をもとに、社会貢献・社会還元の実施状況調査の結果を取りまとめた。

拠出金総額は、約14億1,202万円であった。内訳は、現金が約11億0,459万円、物品(現金換算)が約3億0,743万円である。前年比で総額では、約2億8,521万円の減(前年の約83.2%)、件数で121件の増(同約101.1%)となった。内訳は現金が、約2億3,429万円の減(同約82.5%)で、物品が5,092万円の減(同約85.8%)となった。前年は、熊本地震への義援金が2億4,517万円あったが、熊本地震への義援金が落ち着き平年通りの拠出金額となった形になった。

拠出元別の金額は、総額で、都府県方面組合が約4億6,965万円、支部組合が約2億2,940万円、組合員ホールが約6億5,837万円となり、前年比で都府県方面は約3,515万円の減(同93.0%)、支部が約446万円の減(同98.1%)、組合員ホールが約2億3,230万円の減(同73.9%)であった。今回の調査では、組合員ホールの拠出額の落ち込みが目立つこととなったが、これも前年に組合員ホールが熊本地震へ顕著に支援を行ったことによるものである。

拠出内容別の金額および構成比は、多い順で、①社会福祉関連約4億5,322万円(構成比32.1%)、②地域貢献関連約4億0,507万円(同28.7%)、③青少年育成関連約1億8,002万円(同12.7%)、④防犯関連約1億7,924万円(同12.7%)、⑤災害救済関連約5,771万円(同4.1%)、⑥暴排関連約4,424万円(同3.1%)、⑦学術・文化関連約3,832万円(同2.7%)、⑧交通安全関連約1,356万円(同1.0%)となった。

災害復興支援の一年から地域貢献の一年に

拠出金の前年度比では、「災害救済関連」への拠出が、2億6,690万円の減(前年の17.8%)、「地域貢献関連」が6,488万円の増(同119.1%)、「学術文化関連」が1,143万円の増(同142.5%)となった。前年は、災害復興支援が顕著な年と言えるが、平成29年は、地域貢献活動が目立った年と言える。

寄贈先の特徴として、新たに子ども食堂への支援が現れ始めている。子ども食堂の活動は全国的にも広がってきており2,000ヵ所以上開かれている。遊技業界でも埼玉県遊技業協同組合のように組合をあげて支援をするところも出てきている。今後も子ども食堂への支援が期待される。

寄贈された物品の内容で特徴的なことは、車いすは

490万円相当130台が寄贈され、別途購入費等として100万円の現金の寄贈があり、合わせて590万円が寄贈された。防犯カメラは1,420万円相当が寄贈され、防犯カメラの購入費として別途95万円の現金寄贈があり、合わせて1,515万円寄贈された。毎年1,500万円前後の寄贈がされており、平成29年も例年通りの水準で寄贈された。福祉や防犯を目的とした福祉車両等は、1,334万円相当8台寄贈され、別途車両購入費として2,382万円の現金寄贈があり、合わせて3,716万円が寄贈された。AEDの寄贈は近年減少傾向にあり需要が一巡して来ていることが見られる。

ボランティア活動等の社会貢献活動では、各都府県方面組合から2,257件(昨年2,147件)の具体的事例報告が寄せられた。特徴としては、「清掃活動」「献血活動」「パトロール活動」といった奉仕型の貢献活動が全体の61.9%と前年に比べ1.1ポイント増加した。奉仕型の中では、熊本地震へのボランティア活動が一段落し、「災害ボランティア活動」が減ったものの、「清掃活動」が大幅に増加している。

また、「祭り・イベントへの参加・協力」「スポーツ大会への参加」などの参加型の貢献活動が全体の20.6%と前年に比べ3.3ポイント増加している。参加型の中では、「祭りや地域のイベントへの参加・協力」が大幅に増加している。

今後の課題と展望

平成29年は、遊技業界には様々な課題が発生し経営的に厳しい状況にあり、組合員ホール数が減少する中、社会貢献・社会還元活動は例年並の拠出金額となった。拠出金額では、熊本地震の復興に尽力した前年を下回ったものの、件数では、「現金」「物品」「ボランティア活動等の社会貢献活動」ともに前年を上回っている。ここにも地道な活動を不断の努力で続けていることがわかる。

また、近年注目され始めた子ども食堂へもいち早く組合をあげて支援をするなど、本当に困っているところにいち早く支援をすることができるというこの業界の支援の強みが現れている。

平成29年は「地域貢献活動」や、「ボランティア活動等の社会貢献活動」の中でも奉仕型の貢献活動が際立っていた。こうした地域に密着した活動はいわば相手の顔が見える活動である。相手の笑顔が見えるということは、社会貢献活動を行う側にも大いに励みとなる。社会貢献活動を持続可能な活動にしていくには、こうした貢献活動を行う側にもやりがいを感じられる活動が重要となるだろう。

今後も地域に根ざした活動に期待したい。



札幌方面遊技事業協同組合
合田康広 理事長

■方面遊協

- 3月に実施した札幌方面遊技事業協同組合ファン感謝デーの収益金の一部である229万5,000円を、社会福祉活動への支援を目的として、北海道新聞社社会福祉振興基金に寄付【写真①】
- 岩見沢教育大と連携した、多職種・多世代・多志向の理念に基づき地域に密着したスポーツ活動を行っているスポーツクラブ「スポーツライフデザインいわみざわ」への支援金の寄付ならびに同団体の活動発表の場となる「社会貢献フォーラム in 札幌」への代表学生の参画を協賛【写真②】
- 札幌方面遊技事業協同組合等北海道遊技産業団体がすすきの観光協会と協同して、北海道観光の顔である「すすきの地区」における「ごみ拾いボランティア活動」を実施



北海道新聞社からの感謝状【写真①】

■支部

- 苫小牧防犯協会・苫小牧警察署と協同した全国防犯運動において、その活動支援としてポケットティッシュの提供及び支部組合員が参加したホール敷地内等での防犯啓発活動を推進（苫小牧地区遊技業組合）
- 室蘭・登別地区における防犯運動期間・新入学時の交通安全運動等において、支部組合員の運動参加と新聞広告による啓発活動を年間を通じて推進（室蘭・登別遊技場組合）



岩見沢教育大が行う地域スポーツを支援【写真②】

■ホール

- 例年冬期間、近隣住民の雪捨て場として、ホール横第2駐車場を開放し、住民が運び込んだ雪は、毎朝従業員が小型重機を使い除雪、さらに堆積した雪の排泄運搬作業をホール自らの費用で行い、雪害対策に貢献（昌栄株式会社BIG大王）【写真③】
- 新和グループは2011年より、地域医療への支援と地域貢献を目的として、札幌医科大学に対して医療・福祉機器の寄贈と大学院ロビーでの患者・医療関係者・地域住民とを繋ぐアンサンブルコンサートを継続的にを行い、本年は3月に医療用ベンチを寄贈、10月にコンサートを開催（株式会社新和ホールディングス）
- さっぽろ雪祭り薄野広場で「臓器移植医療推進啓蒙活動」として、氷像の制作展示と臓器移植医療推進ポスターを会場及び隣接店舗に掲示（株式会社正栄プロジェクト）

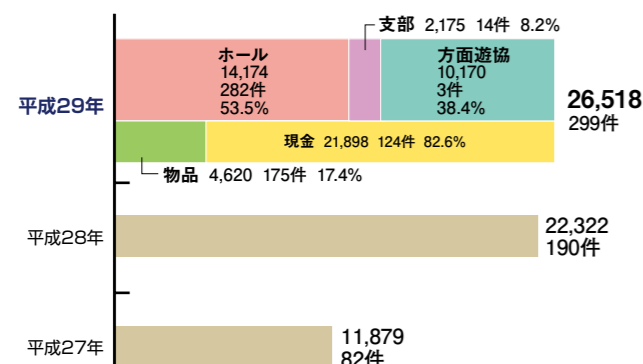


雪捨て場としてホール駐車場を開放【写真③】

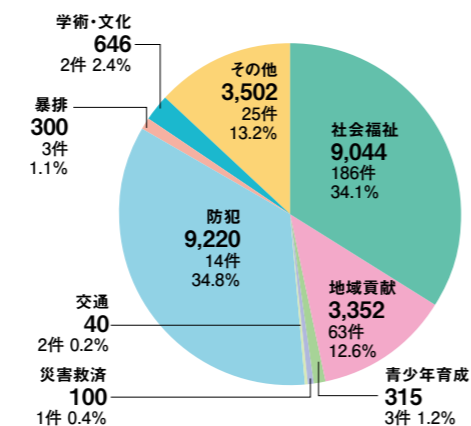
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



旭川方面遊技事業協同組合
山本淳一 理事長

■方面遊協

- 北海道パチンコ・パチスロファン感謝デー実施に伴う、社会貢献活動支援資金の中から北海道新聞社社会福祉振興基金へ50万円を寄付
- 北海道パチンコ・パチスロファン感謝デー実施に伴う、社会貢献活動支援資金の中から旭川方面防犯団体連合会へ20万円を寄付



旭川市育英事業基金へ寄付【写真①】

■支部

- 組合員ホールに募金箱を設置し「はあーとふるBOX募金」を実施。今年度は旭川市育英事業基金へ30万円、旭川中央防犯協会へ約24万円、旭川東防犯協会へ約24万円、稚内市社会福祉協議会へ約29万円、その他、羽幌町社会福祉協議会などにも寄付（旭川遊技場組合・稚内遊技場組合・羽幌遊技場組合）【写真①】



「旭川冬まつり」の案内係にボランティア参加【写真②】

■ホール

- 旭川出身の作家、故三浦綾子さんの書齋移転復元の分館建設に対し、三浦綾子記念文化財団へ100万円の寄付（株式会社山本ビルアルファグループ）
- ホールスタッフ10名で「旭川冬まつり」のボランティアに参加し、案内係・ゴミ回収等を実施（株式会社山本ビルアルファグループ）【写真②③】
- 稚内市が実施する「クリーンアップ稚内」の海岸清掃活動にボランティア参加。海岸に漂着した漁具、ロープ、ペットボトル、空き缶等のゴミを回収（マルハン稚内店）

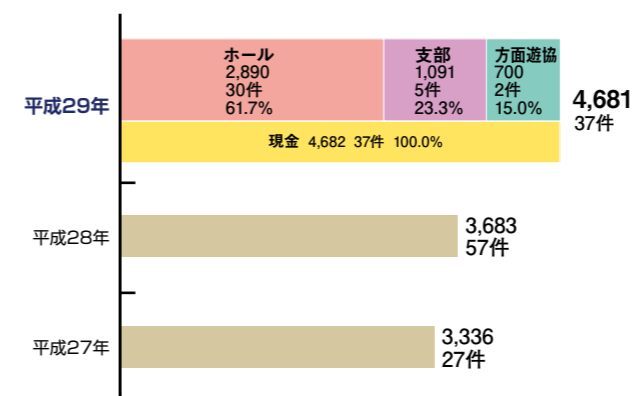


「旭川冬まつり」でゴミの回収を実施【写真③】

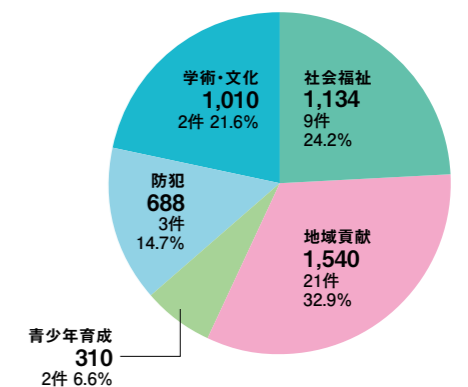
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



釧路方面 釧路方面遊技業協同組合



釧路方面遊技業協同組合
中村和利 理事長

■方面遊協

- 社団福祉法人ままりも学園へ寄付金を贈呈【写真①】
- 釧路市・根室市防犯協会及び釧路市・中標津町暴追協の事業運営に対する支援
- 組合員ホール駐車場にて従業員等71名が献血に協力

■ホール

- 少年野球大会（小学生の部及び中学生の部）やソフトバレーボール大会を開催（株式会社忠和商事）【写真②③】
- くしろ霧フェスティバル会場内でドリンク販売係、機材撤去作業・運搬、ゴミステーションでのゴミの回収等を実施（ライジング釧路）
- 店内に、エコキャップ回収ポスター及びBOXを設置し、従業員及びお客様に回収を呼びかけ（ガリバー釧路店）



寄付金を贈呈【写真①】



少年野球大会を開催【写真②】



ソフトバレーボール大会を開催【写真③】

北見方面 北見方面遊技業協同組合



北見方面遊技業協同組合
温山壽男 理事長

■方面遊協

- 北見方面防犯協会連合会に啓発資材の購入資金として50万円を寄付
- 北見地域防犯協会に30万円を寄付
- 北見ぼんちまつりに運営資金を寄付【写真①】
- 北見市消防後援会へ資金援助

■ホール

- 北見ぼんちまつりへのスタッフの参加や端野カレーライスマラソンへのボランティアスタッフ参加（マルハン北見店・端野店）
- 北海道網走養護学校、社会福祉法人網走桂福祉会サンライズ・ヨビト等へお菓子を寄贈（マルハン網走店）
- 日本赤十字社に協力し、ホール駐車場にて献血活動を実施し、延べ30名が参加（マルハン網走店）

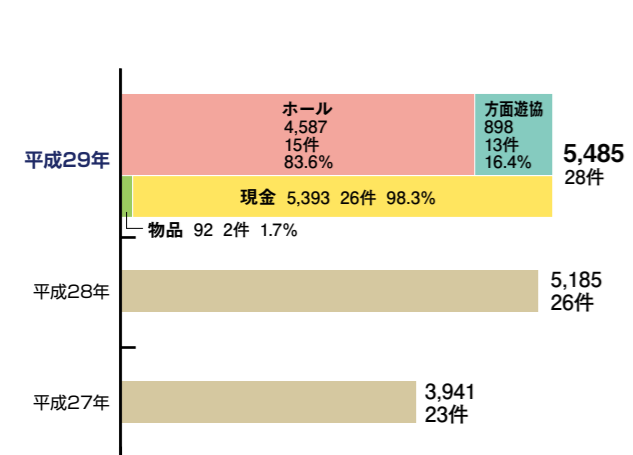


運営資金を寄付した北見ぼんちまつりのポスター【写真①】

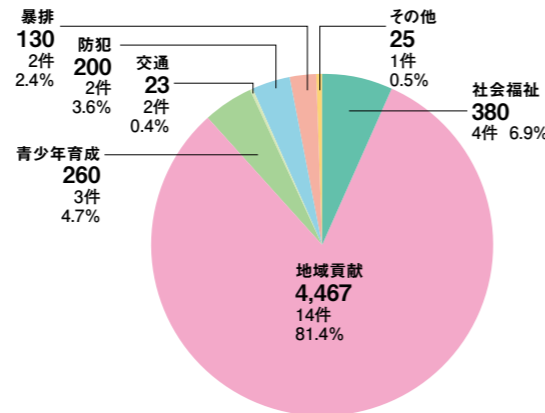
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



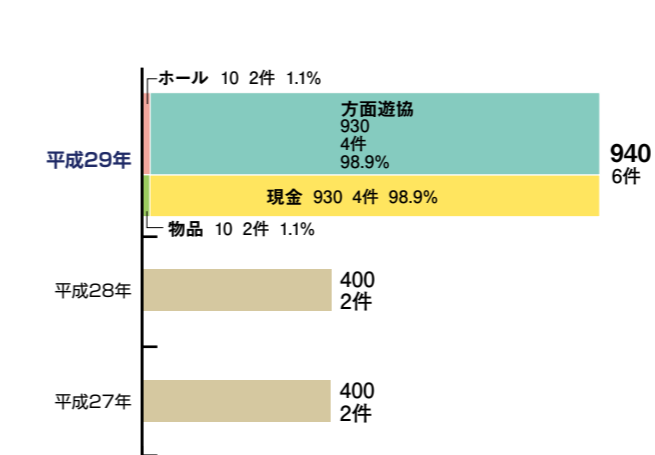
■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



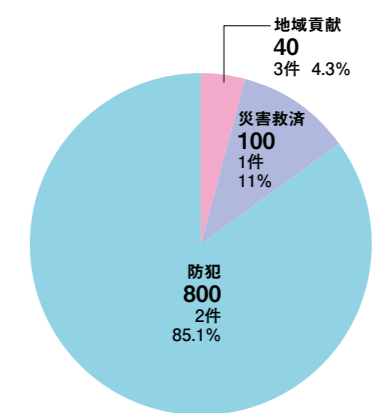
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





■方面遊協

- 地域住民の安心・安全のため、街頭防犯カメラ3台を函館中央地区防犯協会へ寄贈【写真①】
- 社会福祉協議会に継続的に寄付【写真②】
- 北海道警察函館方面本部交通課と連携し、季節ごとに行われる交通安全運動週間の啓もう活動として、組合員ホールに対してチラシ、ポスター、電光掲示板等による協力依頼を実施
- 地域の防犯パトロールで使用する青色回転灯15台を函館中央地区防犯協会へ寄贈

■ホール

- 「はこだて物々交換」を週2回開催し、多くの人を楽しめるスペースを提供（パチンコ富士）
- 地元警察の振り込め詐欺撲滅、飲酒運転防止等のキャンペーンに参加（パーラー桃太郎）
- 「花を植える活動」に賛同し、ホールが面する通り沿いに花を植付け（パーラーヤマト八雲店）



防犯カメラを寄贈【写真①】



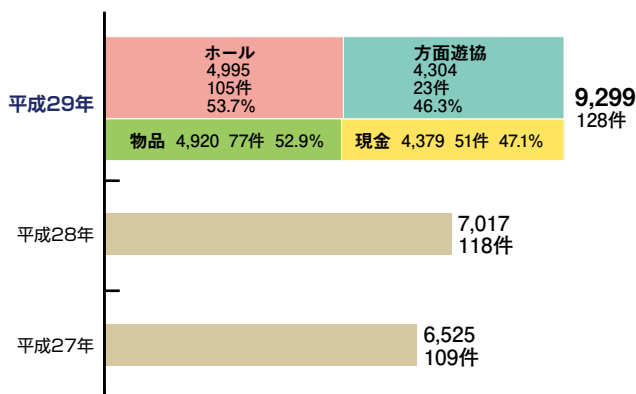
寄付金贈呈式【写真②】

DATA

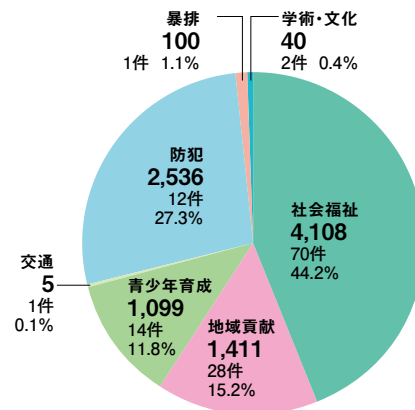
※物品は現金換算した金額です。
※クラブに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）

■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





剣道大会を後援 [写真①]



青森県交通安全母の会連合会を支援 [写真②]



少年野球大会を支援 [写真③]

■ 県遊協

- 「文部科学大臣杯争奪・鷹揚旗選抜剣道大会」を後援し、30万円を寄託 [写真①]
- 青森県交通安全母の会連合会に対し30万円を寄付 [写真②]
- 「第3回 青森県遊協チャリティゴルフコンペ」の収益金30万円を青森市身体障害者福祉会に寄付

■ 支部

- 青森南地区防犯協会による青森南警察署管内の小学生児童に配布する 交通事故防止を兼ねた防犯及び特殊詐欺防止標語入り反射リストバンド1,200個の作成費用16万2,000円を支援 (青森支部)
- 弘前市小学校招待野球大会に協賛金30万円と参加チームに対し記念品 (ボール1ダース) を贈呈 (中弘南支部) [写真③]
- むつ地区防犯協会及びむつ警察署から学童連れ去り等抑止対策として防犯カメラ設置資金30万円を寄付 (上十三・下北支部)

■ ホール

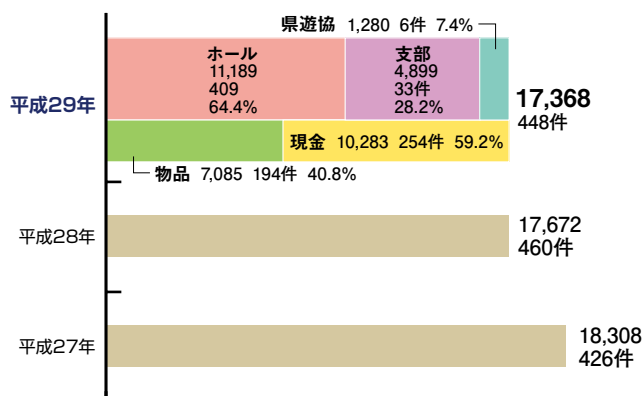
- 児童福祉施設等にお菓子を寄贈 (朝日会館・ライジング堅田・マルハン黒石店・ガイア藤崎店・USA弘前店・ガイア根城店等)
- 十和田中央病院に対し血圧計3台を寄贈 (ジャムフレンドクラブ野辺地)

DATA

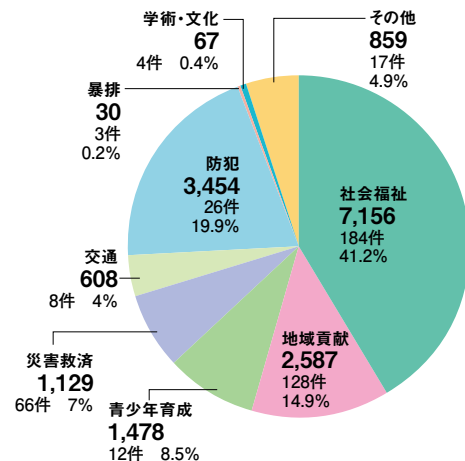
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■ 年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)

■ 平成29年現金・物品の割合 (単位: 千円)



■ 平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)





岩手県遊技業協同組合
工藤 嘉 理事長

■県遊協

- 岩手ヤクルト(株)との共催で、各ホールで正月三が日に無料配布するヤクルト商品への年賀シール貼付作業を、県内4施設の知的障がい授産施設に委託し、謝礼金として計20万円を寄付
- 「第14回いわてパチンコ・パチスロカーニバル」の益金を、「安全で安心できる街づくり」を目的とした社会福祉事業、犯罪被害者支援、防犯や交通安全、暴力団追放運動などの関係機関・団体へ80万円を寄付【写真①】
- 岩手県赤十字血液センターと連携し、年間事業の社会貢献活動として、各支部組合およびホールと一丸となって、10会場のホール駐車場において献血活動を実施し、208名が献血に協力



社会福祉、犯罪被害団体等へ寄贈【写真①】

■支部

- 障がい者の社会参加を目的とした活動や幼稚園児と高齢者の交流などの事業をおこなっている「生き生きライブ実行委員会」に、社会的な役割を担う自主事業に役立てもらうため、福祉活動助成金として10万円を寄付(盛岡遊技業組合)【写真②】
- 児童福祉施設に貢献する目的で開催している「チャリティゴルフ大会」の浄財を、児童養護施設「みちのくみどり学園」に施設支援金として10万円を寄付(盛岡遊技業組合 青年部会)
- 児童養護施設「藤の園」に、青年部が児童へのクリスマスプレゼントを持ってサンタクロース慰問をしたほか、施設維持費を寄付(一関地区遊技業組合 青年部会)



福祉活動助成金を寄贈【写真②】

■ホール

- 宮古市シートピアなどにおいて、「第11回ふれあい祭り」を開催。各店舗からスタッフが参加して屋台や縁日を開設、ステージではカラオケ大会や山口太鼓の演奏等様々な催し物を披露した。屋台等の46万3,850円の売上金すべてを復興財源として宮古市に寄付(株式会社公案)
- 「地方創生のまちづくり」のために、車を使って市民のために活躍してもらいたいとして、二戸市に車両1台(300万円)を寄付(株式会社アキヤマ)【写真③】
- 金ヶ崎町社会福祉協議会「スノーバスターズ」の活動に参加し、一人暮らしの高齢者世帯などの屋根から落ちて固まった雪の除雪作業や、雪かきを実施(カネマン金ヶ崎)

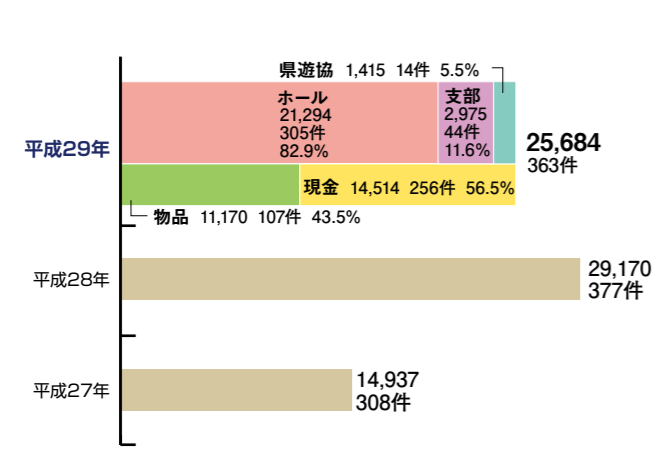


二戸市に車両1台を寄贈【写真③】

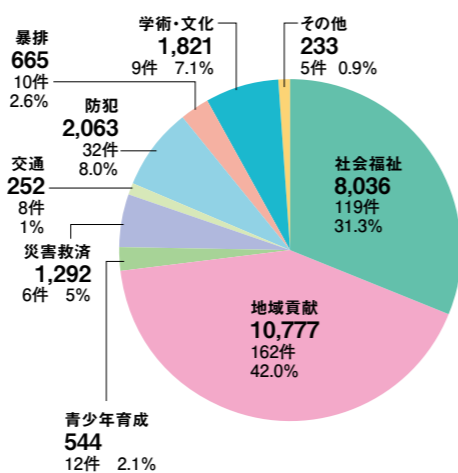
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



宮城県遊技業協同組合
竹田 隆 理事長

■県遊協

- 県民の安全・安心な生活に貢献する団体である「宮城県防犯協会連合会」、「宮城県暴力団追放推進センター」へ計200万円寄付したほか、同センターには街頭キャンペーン用ウェットティッシュ等1万個を寄贈
- チャリティゴルフ大会を開催し、その寄付金から「みやぎ被害者支援センター」、「日本盲導犬協会仙台訓練センター」及び知的障がい者施設4団体へ計140万円を寄付【写真①】
- 東日本大震災復興支援として実施した「東北六県合同ファン感謝デーinみやぎ」の開催に伴う寄付金から「社会福祉法人旭が丘学園」、「NPO法人子どもの村東北」、「一般社団法人宮城骨髄バンク」、更生保護法人「宮城東華会」の4団体に計200万円を寄付(感謝状受領)【写真②】【写真③】



各団体に計140万円寄付【写真①】



4団体に計200万円を寄付【写真②】



法務大臣から感謝状を受領【写真③】

■支部

- 高齢者を対象とした振り込み詐欺等の「特殊詐欺」の被害防止のため、年賀タウンメールを活用した広報啓発活動に協賛金を支援(仙台南地区)

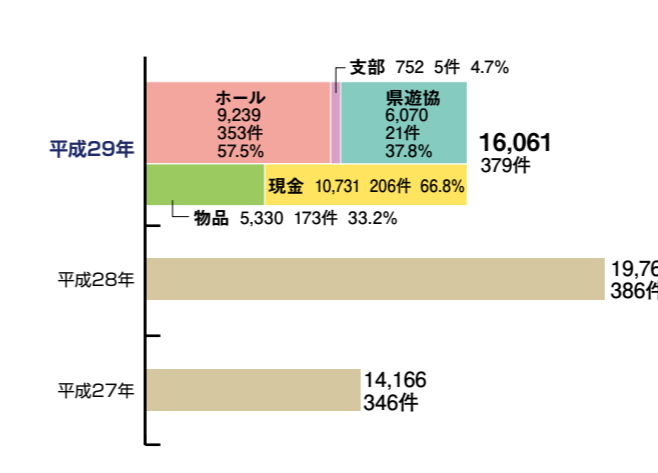
■ホール

- 交通死亡事故抑止活動及び消費者被害防止活動への支援、道路・河川・海岸の清掃活動、豪雨災害義援金の寄付、被災地夏祭り等におけるボランティア活動、交通遺児育成基金への寄付、日本盲導犬基金活動及び日本赤十字社の献血活動への支援、小学校スポーツ支援活動等、多角的な社会貢献活動を実施(扇屋商事株式会社)
- 東日本大震災等の復興支援を目的とした「みやぎ元気マラソン」の実施や県内の児童福祉施設等への支援活動及び植樹活動への協賛・参加等(株式会社カツヨシ商事)

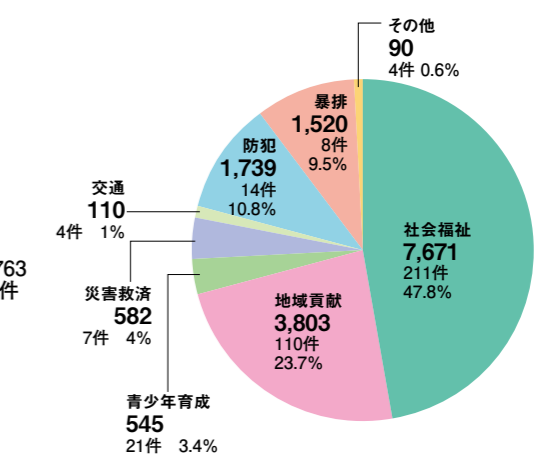
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





秋田県遊技業協同組合
新井昌吉 理事長

■県遊協

- 社会貢献贈呈式を開催し、秋田県社会福祉協議会にリクライニング車いすとアルミ製車いす各6台(90万円)、秋田県防犯協会連合会に防犯グッズ(45万円)を寄贈【写真①】
- ヤクルト本社東日本と共催で、ヤクルト飲料水への年賀シール貼りの謝礼として、3施設に施設からの希望のあった電化製品(14万円)を寄贈
- 秋田県、秋田市、秋田県警察本部主催の「年末年始特別警戒出動式」へ参加



車いすや防犯グッズを寄贈【写真①】

■支部

- 12月の2日間秋田市内の母子支援施設3カ所を訪問し、図書カード、食料品、菓子等のプレゼント及び市内の芸人さんによるミニクリスマス会のイベントを実施(秋田中央遊技業協同組合)
- 北秋田市内の小学校へ入学する新入学児童に対して、防犯活動のための防犯ブザーを贈呈(北秋田遊技業協同組合)
- 由利本荘防犯協会へ地域防犯のためのミニライトホルダーを贈呈(由利本荘遊技業組合)

■ホール

- バスケットB2リーグの秋田県チームへ支援し、地域貢献のための協賛金等の実施(株式会社燦英)
- 年間を通して、市社会福祉協議会へ社会福祉事業としてお菓子を寄贈(夢屋羽後店/ライジング大館)
- 地域の各種祭典等へ、年間を通じて地域事業推進のために協賛(ニューヨナイザワ)



山形県遊技業協同組合
井上静夫 理事長

■県遊協

- 「子育て応援団すこやか2017事業」に助成金30万円寄付
- 振り込め詐欺撲滅のテレビスポット広告に協賛
- 元東京ヤクルトスワローズ選手を講師に迎え少年野球教室を開催し、スポーツ少年団加盟11チーム321名が参加【写真①】



少年野球教室を開催【写真①】

■支部

- 鶴岡市防犯協会へ防犯バトロール用ジャンパー・帽子を寄贈(庄内支部)
- 尾花沢・大石田地区防犯協会連合会へ青色回転灯・マグネットシートを寄贈(最北支部)
- 米沢市防犯協会へ青色回転灯・自転車盗難防止用ワイヤーロック・オリジナル鉛筆を寄贈(置賜支部)



1日店休して障がい者にパチンコ大会を開催【写真②】

■ホール

- 障がい者にホールを開放しパチンコ大会を開催(パチンコニューセンター)【写真②】
- グループ全店に募金箱を設置し、県内の児童養護施設5施設に20万円ずつ、計100万円を寄付。また、チャリティー祭り「にここご祭り」を2日間開催し、いじめ撲滅プロレスなど、いじめ撲滅を訴える活動を実施(株式会社マル中)【写真③】
- 毎月、端玉のお菓子をダンボール3~4箱にして山形市社会福祉協議会へ寄贈(スーパー1円劇場山形店)

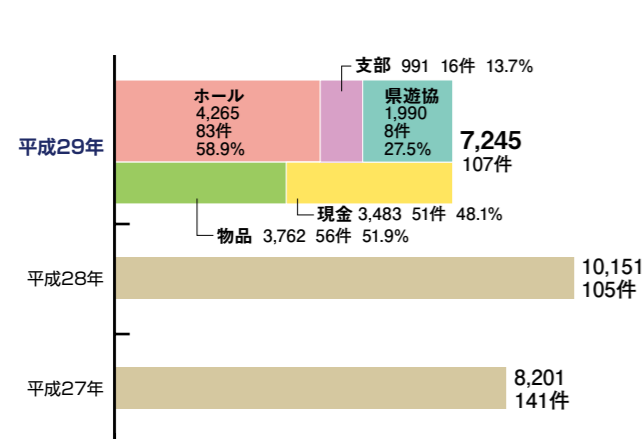


いじめ撲滅プロレスを実施【写真③】

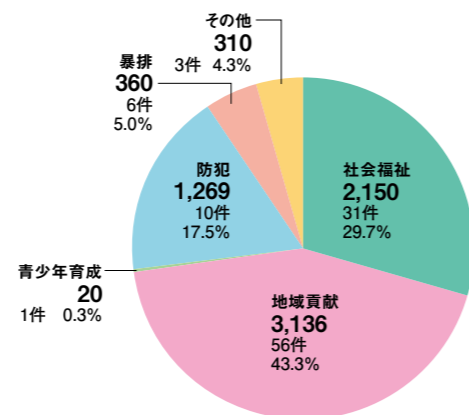
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



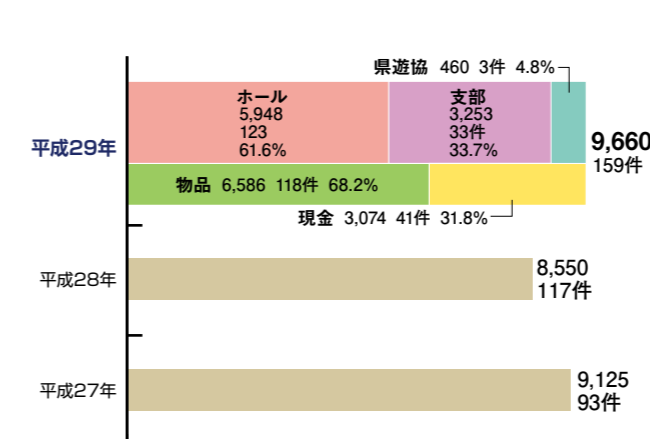
■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



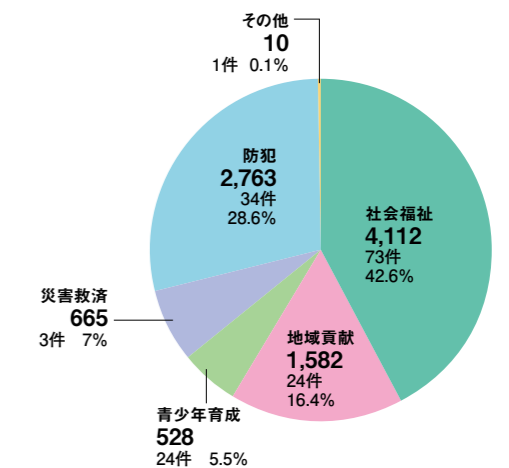
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





福島県遊技業協同組合連合会
諸田英模 理事長

■県遊連

- 福島県防犯協会連合会に130万円を寄付
- 福島県暴力追放運動推進センターに50万円を寄付
- 福島県遊連結成50周年記念事業の一つとして「福島県社会福祉協議会」「福島県交通遺児奨学基金協会」に、それぞれ10万円ずつ、計20万円を寄付【写真①】
- チャリティゴルフコンペを開催し、参加者からの寄付金と県遊連からの浄財を足した20万円を、被害者支援センターに寄付【写真②】
- 福島県警と連携を図り、置き引き等の犯罪被害防止用のポスターを作製し、店舗に掲示【写真③】



福島県遊連結成50周年記念事業の一つとして寄付【写真①】



チャリティゴルフコンペを開催し寄付【写真②】



犯罪被害防止用のポスターを作製し、店舗に掲示【写真③】

■支部

- 被害者支援センターに寄付（会津地区遊技業協同組合）
- 児童福祉施設福島愛育園、アイリス学園等に寄付（福島地区遊技業協同組合）

■ホール

- 福島市教育委員会に教育振興として鉛筆約8,000本を寄贈（ニラク福島太平寺店）
- 福島警察署、福島地区遊技業組合 福島署管轄ホールによる全国地域安全運動出動式に参加し、ティッシュ等を福島駅前で市民の方に配布
- 会津若松市主催「クリーン鶴ヶ城作戦」に参加（株式会社ダイエー）



東京都遊技業協同組合
阿部恭久 理事長

■都遊協

- 給付型奨学金制度「pp奨学金（パチンコ・パチスロ奨学金）」に協力し、200万円を寄付【写真①】
- ばちんこ依存問題相談機関「認定NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク」に500万円、ギャンブルなどに問題を抱える人の回復支援施設「認定NPO法人ワンダーポート」に300万円を寄付【写真②】
- 青少年の健全育成を支援する5団体に計145万4,000円を助成【写真③】



2018年度は22名に給付したpp奨学金【写真①】



依存問題の相談機関や回復施設に寄付【写真②】



青少年健全育成を支援する団体に助成【写真③】

■支部

- 足立4組合共催で、スポーツを通じて青少年の健全育成を目的に、ヤクルトスワローズ選手OB及び金田正一氏を招致して、足立区内の野球少年200名を対象に、野球教室を開催（千住・西新井・竹ノ塚・綾瀬組合）
- ひったくり防止のため、防犯カバー2,000枚を寄贈（深川組合）
- 防災用具LEDライト3,000個を防犯協会に寄贈（府中組合）

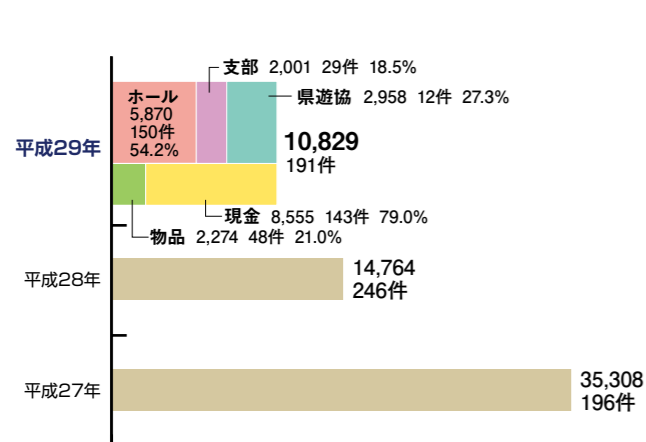
■ホール

- 向日市社会福祉協議会に対し福祉車両4台を寄贈（キコーナ蒲田）
- 東京高円寺阿波踊り振興協会に対し現金108万円のほか、うちわ、Tシャツ等を寄贈（株式会社ミリオンインターナショナル）
- 日本赤十字社に対し約100万円を寄付（ピーアークホールディングス株式会社）

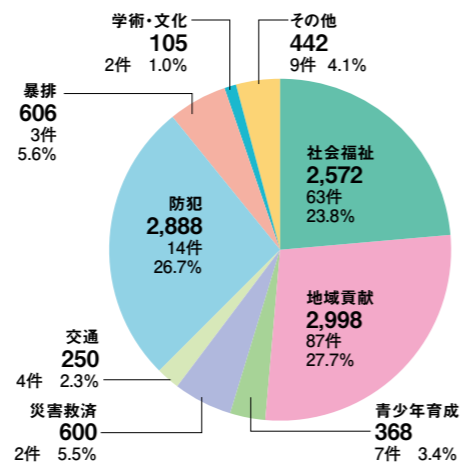
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



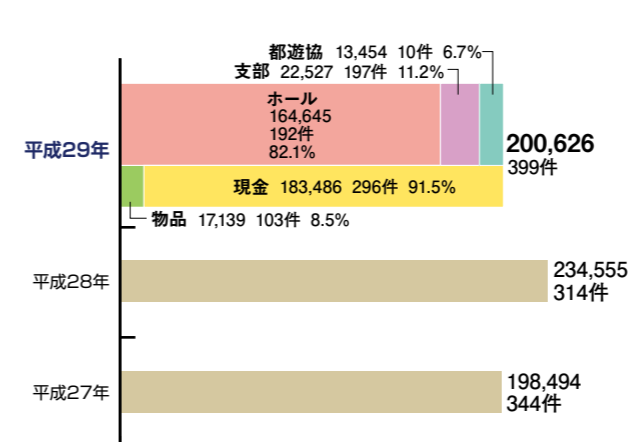
■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



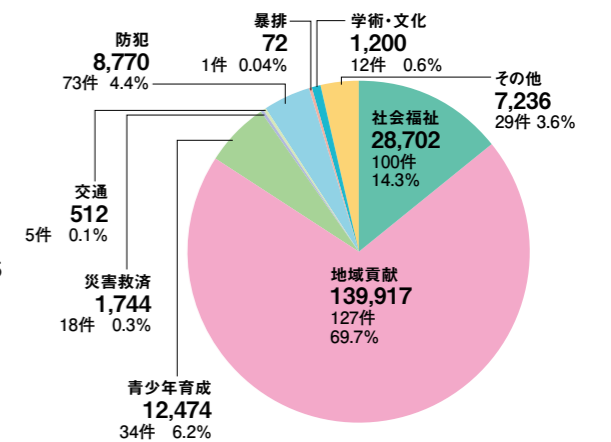
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





茨城県遊技業協同組合
平文暉朗 理事長

■県遊協

- 茨城県選抜中学校野球大会協賛金として茨城新聞社に150万円寄付
- 茨城県社会福祉協議会に100万円寄付
- 財団法人茨城県防犯協会に100万円寄付

■支部

- 「おひさまサンサン生き生き祭り2017」にボランティア協力、つくば12ホール20名が参加。2009年から毎年つくば中央・北組で9年連続参加(つくば中央・つくば北組) [写真①]
- 茨城町社会福祉協議会や大洗町共同募金会、水戸市社会福祉協議会に寄付(水戸組)
- 水戸社会福祉協議会に50万円を寄付(水戸組)

■ホール

- 児童福祉施設等にお菓子を寄贈(マルハン古河店・有限会社ガディス・株式会社アンダーツリー東京)
- 日立さくらロードレース給水活動やふれあい虫駅伝ボランティア活動を実施(パチンコ久慈)
- 勝田祭りでゴミ拾い活動を実施し、約70名が参加(キコーナ勝田駅前店)
- 県内から参加チームを募り、学童野球大会を開催(有限会社伸和商事) [写真②]



「おひさまサンサン生き生き祭り2017」にボランティア協力 [写真①]



学童野球大会を開催 [写真②]



栃木県遊技業協同組合
金 淳次 理事長

■県遊協

- 県地域福祉基金に100万円を寄付。1983年から今回で34回目 [写真①]
- 下野奨学会に対し寄付
- 宇都宮社会福祉協議会に車いす10台を寄贈 [写真②]

■支部

- 小山市近県中学生サッカー大会で使用する優勝旗を寄贈(小山支部)
- 小山地区防犯協会に対し寄付(小山支部)
- 宇都宮社会福祉基金に50万円を寄付(宇都宮支部) [写真③]

■ホール

- 宇都宮百年花火大会やふるさと宮まつり実行員会に協賛し地域貢献(株式会社平成興業)
- 児童福祉施設や足利市社会福祉協議会等にお菓子を寄贈(株式会社安田ホールディングス・アイランド足利店・ラ・カータ花ぞの・株式会社五月女総合プロダクト)
- 栃木市役所、栃木県庁に対しそれぞれ100万円寄付(株式会社五月女総合プロダクト)



県地域福祉基金に100万円寄付 [写真①]



車いす10台を寄贈 [写真②]

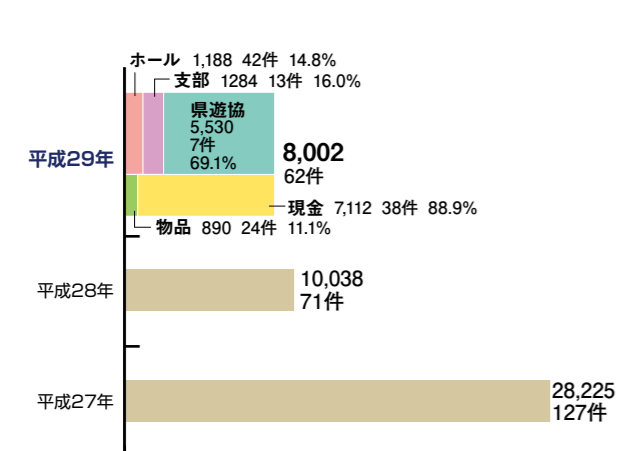


宇都宮社会福祉基金に50万円寄付 [写真③]

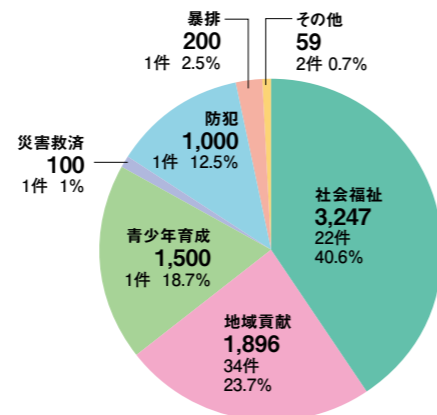
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)
■平成29年現金・物品の割合 (単位: 千円)



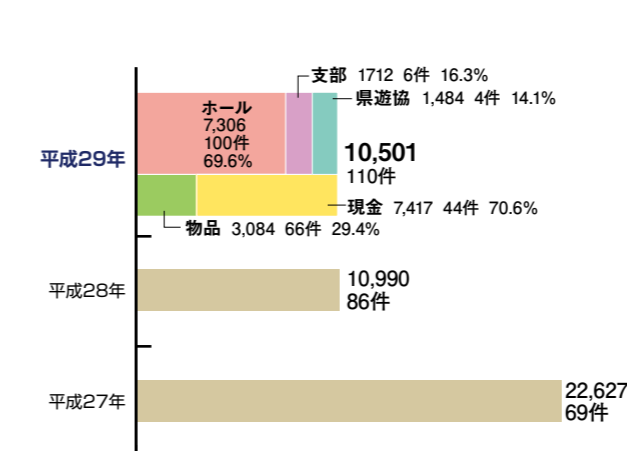
■平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)



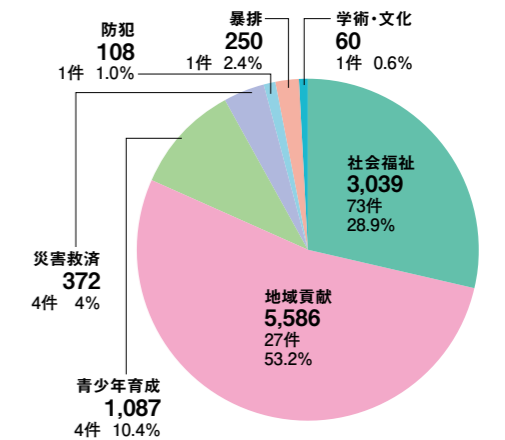
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)
■平成29年現金・物品の割合 (単位: 千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)





群馬県遊技業協同組合
森山秀夫 理事長

■県遊協

- 群馬県内の高齢者福祉施設8カ所へ、各1台ずつ、車いすを寄贈し、群馬県知事から感謝状を受領【写真①②③】
- 社会福祉支援、青少年育成活動の一環として、群馬県児童養護施設へ30万円を寄付

■支部

- 前橋市民ゴルフ大会や前橋まつり、前橋国際交流サッカー大会に協賛し地域貢献（前橋遊技場組合）
- 群馬県暴力追放推進センターや群馬県防犯協会等に寄付（高崎遊技場組合）
- 前橋警察署管内自転車盗難防止対策協議会主催の前橋駅周辺の自転車盗防止パトロールに参加（前橋遊技場組合）
- 初市街頭防犯パトロールに参加（伊勢崎遊技場組合）

■ホール

- 熊本地震に対して益城町災害対策本部へ、北部九州豪雨災害に対して朝倉市役所へ義援金を寄付（第一新効）
- 児童福祉施設等にお菓子を寄贈（ビックつばめ高崎店・オータ館林店）
- ホール周辺、地域清掃に参加（オータ館林店・マルハン新田店）

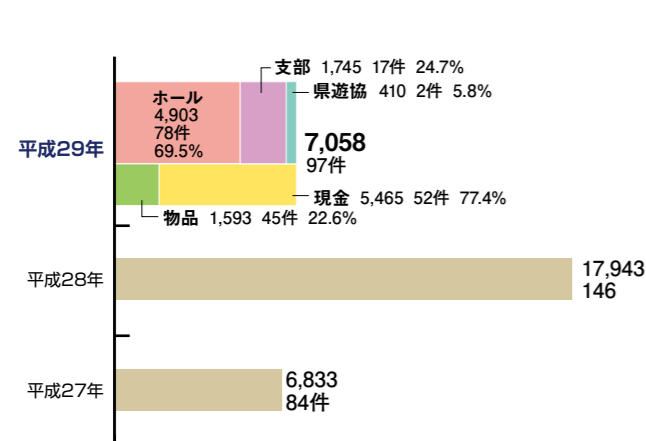


高齢者福祉施設に車いすを贈呈し、県知事から感謝状を受領【写真①②③】

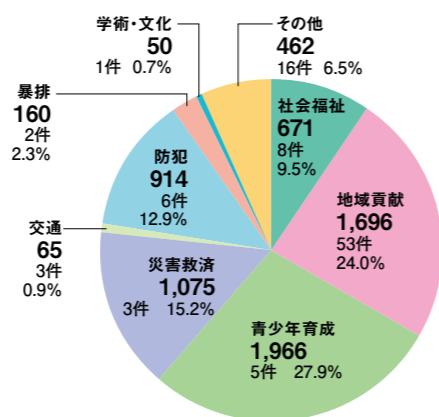
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



埼玉県遊技業協同組合
山田茂則 理事長

■県遊協

- 埼玉県遊協の50周年記念事業として「子ども食堂等に対する支援活動」の推進に関し、公募した埼玉県内の「子ども食堂」に活動運営資金を提供

■支部

- 毎年12月に区域内の児童養護施設、養護学校、保育園等に社会貢献の一環として、クリスマスプレゼント（岩槻蓮田組合）
- 上尾組合及び同傘下のホールが区域内の「子ども食堂」活動に物品を提供、また、活動の補助に従事（上尾組合）【写真①】
- 社会地域貢献及び青少年健全育成活動の一環として、2市1町（富士見市・ふじみ野市・三芳町）の教育委員会並びに毎日新聞社と協賛して「東入間学童野球大会（春季・秋季2回）」の開催を支援（東入間組合）

■ホール

- 毎月第一、第三水曜日の夕方、ホール従業員が地域内の小学生の下校時間帯の見守り活動のほか、住宅街の防犯パトロールを実施（SAP草加店）【写真②】
- 毎月、第四金曜日の午後8時から約一時間、ホール従業員5～6名が交代で、地域の自治会と一緒に合同で防犯パトロールを実施（SAP草加店）
- 地元自治会（草加市7町会）主催の祭事に、ホール従業員が多数参加し、参加住民に飲食物を格安で販売し、同売上を災害支援金として被災地に寄付（SAP草加店）



子ども食堂へ物品を提供【写真①】

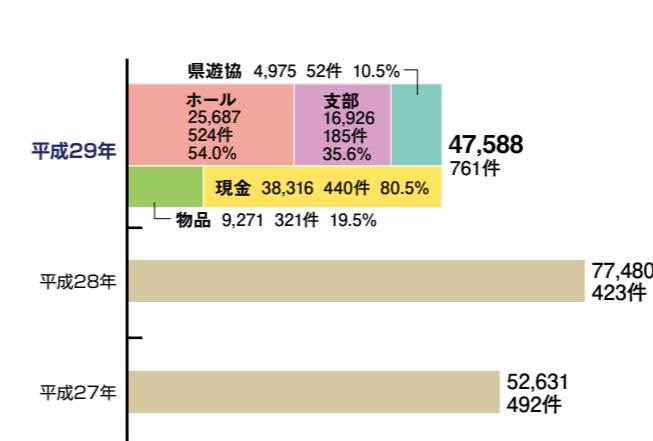


防犯パトロールを実施【写真②】

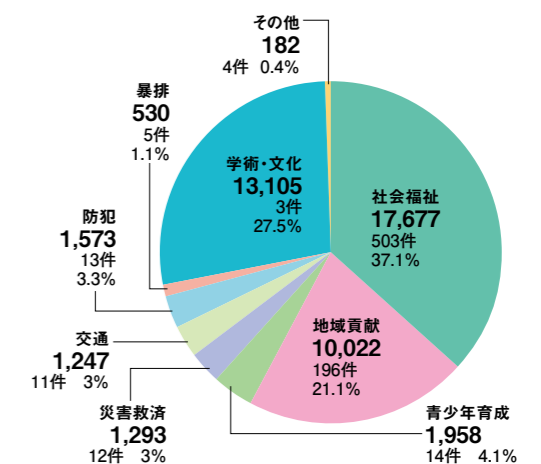
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





千葉県遊技業協同組合
田中幸也 理事長

■県遊協

- 県内マスメディア3社とで構成する「夢まるふぁんど委員会」では、地域振興支援事業の一環として、県内5市町に防犯パトロールカー5台を寄贈 [写真①]
- 「夢まるふぁんど委員会」では、福祉支援事業の一環として、児童福祉施設10団体に総額450万円を支援

■支部

- 船橋市役所に対し、犯罪被害防止支援として電話de詐欺防止装置180台を寄贈(船橋組合) [写真②]
- 野田市社会福祉協議会に対し、福祉支援としてお菓子373箱を寄贈(野田遊技場組合)

■ホール

- 児童虐待防止全国ネットワークが主催するポスターコンテストに支援企業として参加し、ホールでのコンテスト開催告知や受賞作品の掲示に協力。また市民集会への参加等を実施(ニュー後楽園習志野) [写真③]



防犯パトロールカー5台を寄贈 [写真①]



電話de詐欺防止装置180台を寄贈 [写真②]

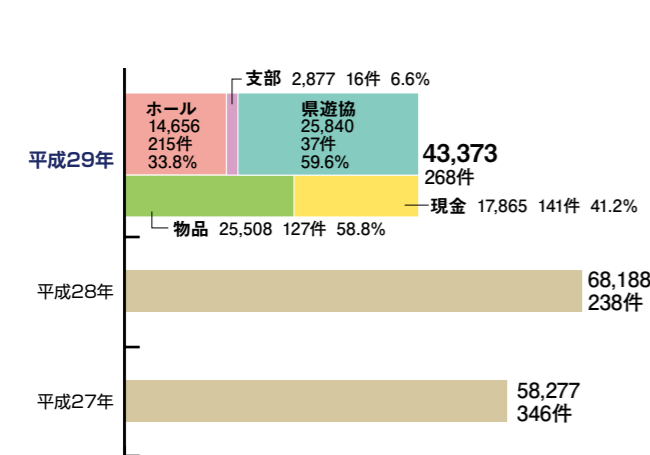


児童虐待防止を訴える市民集会に参加 [写真③]

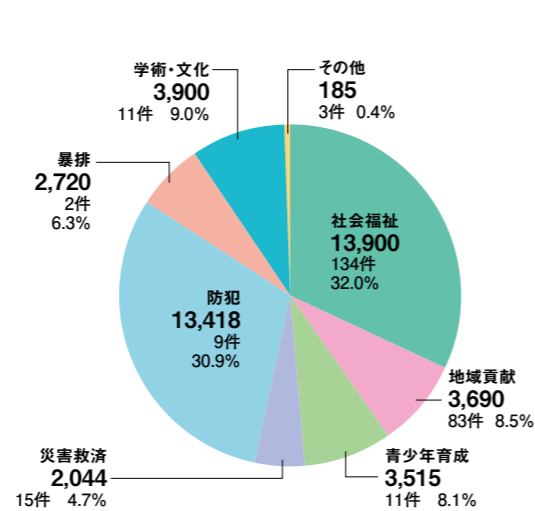
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



神奈川県遊技場協同組合
伊坂重憲 理事長

■県遊協

- フルオーケストラによる「第6回ふれあいコンサート」を主催し、県内の特別支援学校などに通う児童・生徒など2,500人を招待 [写真①]
- 公募で選ばれた県内の障がい者福祉施設など7施設に福祉車両(各1台、計7台)を贈呈。今回の贈呈で延べ台数は264台 [写真②]
- (公財)神奈川県防犯協会連合会に対し、特殊詐欺被害防止ポスター、チラシ作成費用を寄贈し、(公財)神奈川県暴力追放推進センターに暴力団組事務所使用差し止め訴訟費用を寄贈したことに対し神奈川県知事から感謝状を受領



コンサートへの招待事業は、子どもたちとふれあいの機会を持つ貴重な文化的事業で今後も継続 [写真①]



福祉車両贈呈式の模様は、毎年地元テレビ局で放映され広く認知 [写真②]



アダプターは戸塚区内の全組合員ホールで賞品として取り揃えている [写真③]

■支部

- 戸塚区連合町内会自治会に「振り込め詐欺防止用電話自動応答録音アダプター」100個を贈呈するとともに、支部ホールでは「防犯グッズコーナー」を設け、本アダプターを賞品として取り揃え、振り込め詐欺未然防止活動を展開(横浜遊技場組合戸塚支部) [写真③]
- 心臓移植を必要とする幼児「佐々木あやめちゃん」の居住地等である川崎市遊技場組合及び相模原遊技場組合がホールで募金活動を展開。その後、県遊協・全支部組合・ホールへと活動の輪は広がった(川崎市遊技場組合、相模原遊技場組合)
- 相模原南暴力団排除対策推進協議会による「暴力団排除キャンペーン」に11名が参加。小田急相模大野駅北口にて通行人にエコバッグ・スポークリフレクター・リストバンドなどを配布(相模原南遊技場組合)

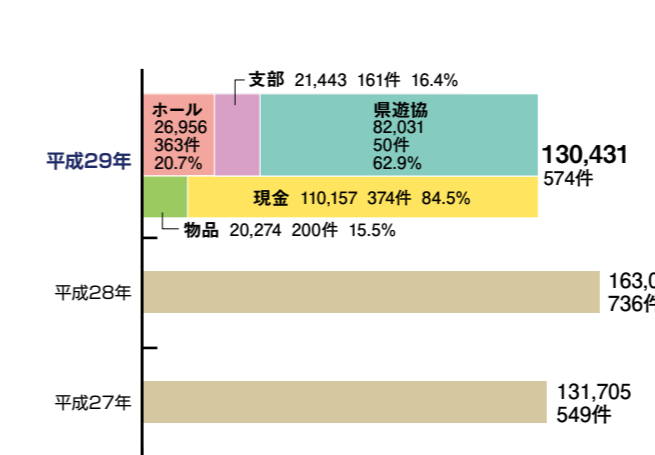
■ホール

- 日本赤十字社に協力し、ホール駐車場にて献血活動を実施しスタッフも献血に協力(三益球殿開成町店・シティグループ)
- 日本盲導犬協会が行う募金活動にホールスタッフがボランティア参加(パラッツォ鶴ヶ峰店)
- 社員のクリスマス食事に、社会福祉法人春光学園の園児を招待(夢球殿グループ)

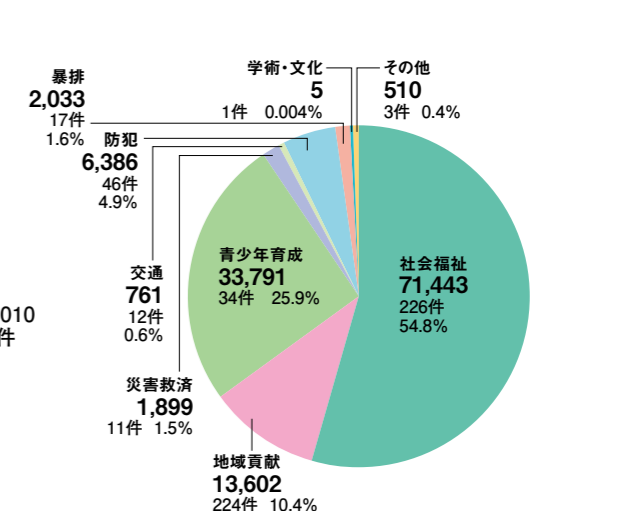
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





新潟県遊技業協同組合
佐藤孔一 理事長

■県遊協

- 新潟県共同募金会に対し障がい者福祉施設移送用車両購入費として450万円寄付 [写真①②③]
- 新潟県暴力追放運動推進センターに運営資金として50万円を寄付

■支部

- 市内の小学校18校区を対象に、下校時間帯に「子供安全パトロール」を実施し、犯罪の未然防止と安全に安心して生活できる街づくりに寄与(上越支部)
- 花火大会に組合加盟ホール名で大スターマインを打ち上げ、地域の祭りを支援(上越支部)

■ホール

- 熱中症予防声掛けプロジェクトの一環として500mlペットボトルの水100本を五泉駅前で配布(コンサートホール五泉店)
- 社会福祉支援として新潟市市民生活課にお菓子を寄贈(ダムズ・ビーム五泉・ビーム亀田・コンサートホール)



寄付金によって贈入された車両と贈呈式 [写真①②③]



山梨県遊技業協同組合
星野謙 理事長

■県遊協

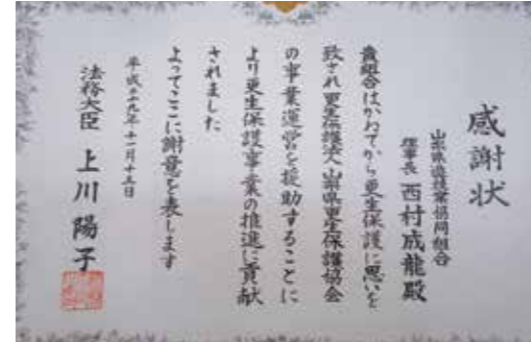
- 山梨県更生保護協会、被害者支援センターやまなし、山梨県防犯協会などに対し、活動資金を寄付 [写真①②]
- 社会弱者の家庭に食料の援助を行っているフードバンクの活動を支援

■支部

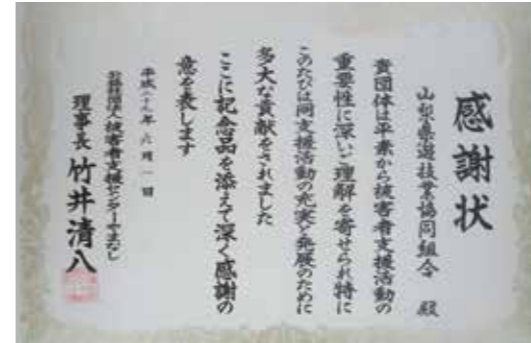
- 地域振興のため祭典などに寄付(甲府支部)

■ホール

- 24時間テレビチャリティ募金を行い、ご来店頂いたお客様のご協力により約200万円を募金(株式会社ABC)
- 地域活性化のため、お祭りやイベントに協賛(大丸商事株式会社・プレイゾーン白鳳・チャレンジャー・渡辺遊技場・ニューダイヤ塩山店・ニューパレス)



更生保護協会への寄付に対し感謝状を受領 [写真①]

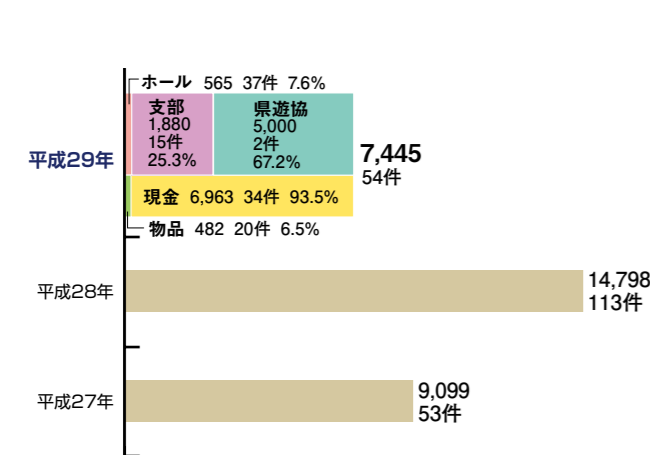


被害者支援センターやまなしから感謝状を受領 [写真②]

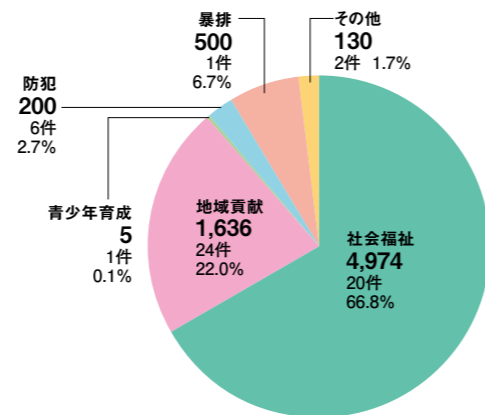
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)



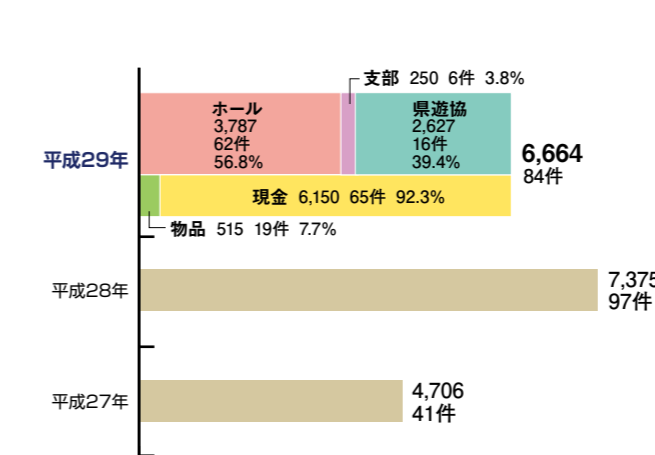
■平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)



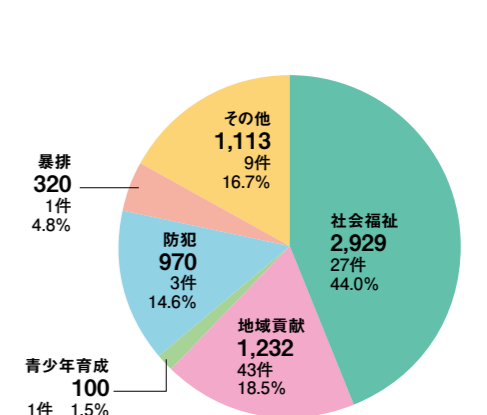
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)





■ 県遊協

- 長野県保護観察協会、長野犯罪被害者支援センター、日本ボーイスカウト長野県連盟、長野県嘱託警察犬運営委員会、長野県立子ども病院等に運営資金を寄付 [写真①]
- 長野県に対し依存症対策に役立ててもらおうと150万円を寄付 [写真②]

■ 支部

- 青色回転灯付きパトロール車による小中学校の周辺道路を中心に防犯活動を行うNPO法人しなのに活動資金として450万円を寄付(長野遊技場組合、須坂遊技場組合、中野遊技場組合)
- 更埴防犯協会連合会と千曲警察署に防犯ポスター作製費を寄付(千曲遊技場組合)
- 自転車通学生徒へ自転車盗難防止危機管理活動として、自転車盗難防止ワイヤーロックを寄贈(松本遊技場組合)

■ ホール

- 児童養護施設の52名を焼き肉店に招待し昼食会を開催(株式会社ココネット)
- 高齢者にパチンコを楽しんでもらうためにデイサービスセンターへパチンコ・スロット機の貸出し(株式会社三公商事)
- 南箕輪村の村有林の整備活動「第9回サンティア森の学校」を開催。NPO法人の協力のもと、間伐作業を勉強し鎌とノコギリでの手作業で間伐作業と作業道作りを実施(マルイ伊那店) [写真③]



長野県保護観察協会や長野犯罪被害者支援センター等に寄付 [写真①]



依存症対策のため150万円を寄付 [写真②]



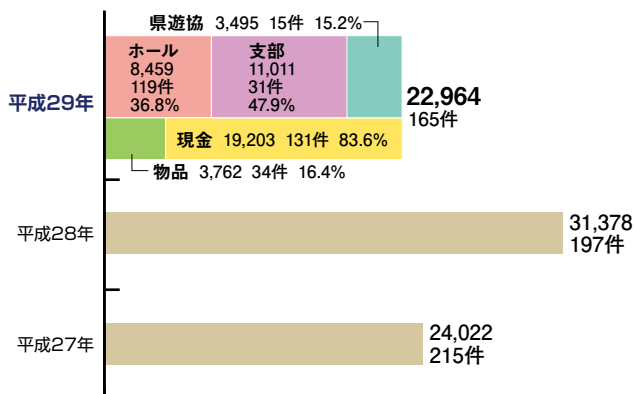
村有林の整備活動を支援 [写真③]

DATA

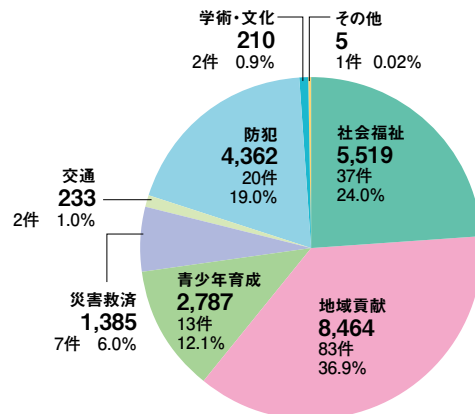
※物品は現金換算した金額です。
※クラブに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■ 年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位：千円)

■ 平成29年現金・物品の割合 (単位：千円)



■ 平成29年分野別、拠出額と割合 (単位：千円)





障がい者が作成したセルフ商品を購入し、組合全ホールに端玉景品として提供 [写真①②]



福祉車両の贈呈式 [写真③]

■ 県遊協

- 障がい者自立支援のため、障がい者が作成したセルフ商品 26種 6万9000個 (600万円分) を購入し、組合員全ホールに対して端玉景品として活用すべく提供 [写真①②]
- 静岡県遊協では、青少年育成を目的に静岡県・教育委員会に対して「通学・合宿推進事業」、「グローバル人材育成基金」の支援に560万円、静岡県青少年育成会議に対し「私の主張推進事業費」として40万円を寄付
- 静岡県防犯まちづくり県民大会、静岡県暴力追放推進運動県民大会に参加しそれぞれに100万円を寄付

■ 支部

- 御殿場市駅前暴追絶縁推進委員会、静岡県防犯協会連合会等に寄付 (御殿場遊技業協同組合)
- 長泉町社会福祉協議会、裾野市社会福祉協議会等に寄付 (沼津駿東遊技場組合)
- 三島市社会福祉協議会、函南町市社会福祉協議会などに寄付 (三島遊技場組合)

■ ホール

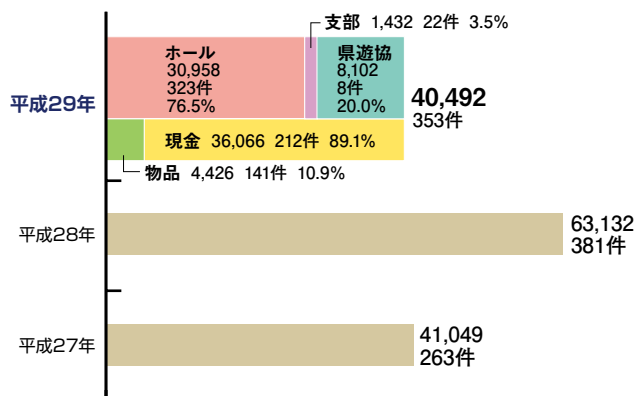
- グループホーム百葉の里に対し衣類やタオルを寄贈 (株式会社アプリー)
- 日本平桜マラソンに協賛金として300万円を預託 (株式会社ABC)
- 静岡県社会福祉協議会に福祉車両4台を寄贈 (株式会社ABC) [写真③]

DATA

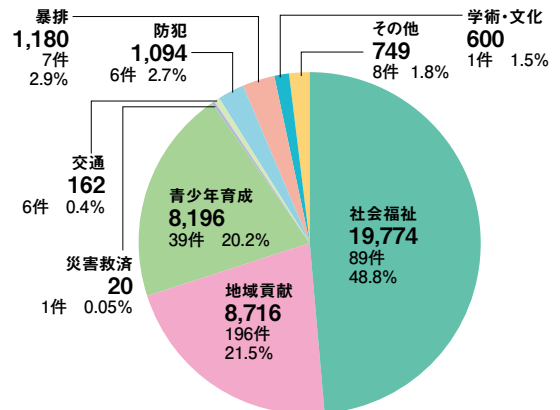
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■ 年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)

■ 平成29年現金・物品の割合 (単位: 千円)



■ 平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)





富山県遊技業協同組合
永森豊隆 理事長

■県遊協

- 缶コーヒー年賀シール貼付作業を社会福祉施設に委託し支援
- 富山県暴力追放推進センター、富山県防犯協会、とやま被害者支援センター等に賛助金を預託

■支部

- 富山北部防犯協会、富山駅前交番協会の、富山市更生保護協会等に賛助金を預託（富山市遊技業組合）

■ホール

- 富山県内にある施設（養護施設・老人ホーム等）約13カ所を回り、お菓子のプレゼントと催し物（ダンスや歌、スポーツ、ボウリング大会等）を開催。また東北、熊本の19施設（児童支援施設等）へお菓子を寄贈（株式会社ノースランド）【写真①②】
- 総勢38人で岩瀬浜の清掃活動を実施し、40袋以上のゴミを集め処分（株式会社ノースランド）
- 障がい者の自立支援として、セルフ商品の推進を図り、施設と共にパッケージデザインの制作や製品である、クッキーの提案も共に検討（株式会社ノースランド）
- 射水市公立保育園5施設に大型読み聞かせ絵本各10冊を寄贈（エスタディオ小杉）



福祉施設を回り交流会を実施【写真①②】



石川県遊技業協同組合
浅野哲洋 理事長

■県遊協

- スポーツ振興に協力するため、石川県体育協会を通じ、スポーツ振興基金に預託

■支部

- 小松市防犯協会に寄付（小松支部）
- 支部管内警察署防犯協会に寄付（金沢支部）

■ホール

- 石川県内福祉施設22カ所にお菓子228箱を寄贈（西原物産株式会社）【写真①】
- 児童福祉施設木のおうちに児童書籍を寄贈（西原物産株式会社）【写真②】
- 社会福祉法人が開催するバザーの支援サポートボランティアを実施（西原物産株式会社）【写真③】
- 社会福祉施設に対しお菓子を寄贈（ケイズ金沢）



県内の福祉施設にお菓子を寄贈【写真①】



児童福祉施設に書籍を寄贈【写真②】

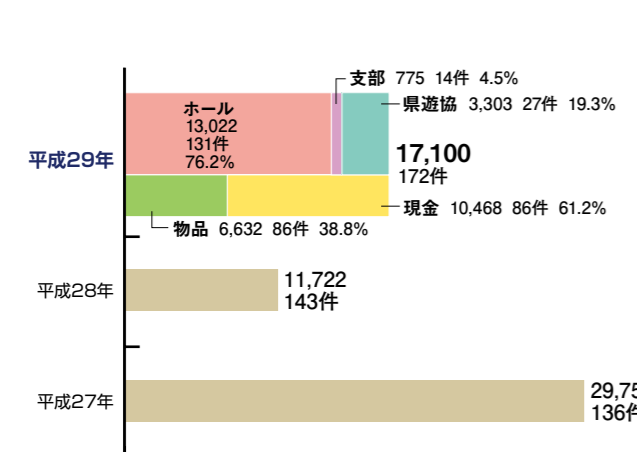


社会福祉法人が開催するバザーをサポート【写真③】

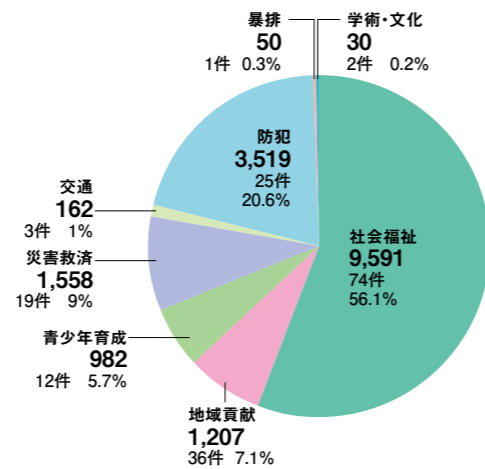
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



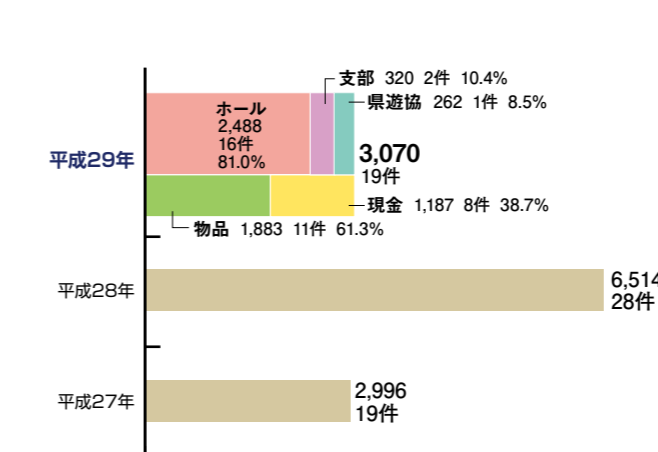
■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



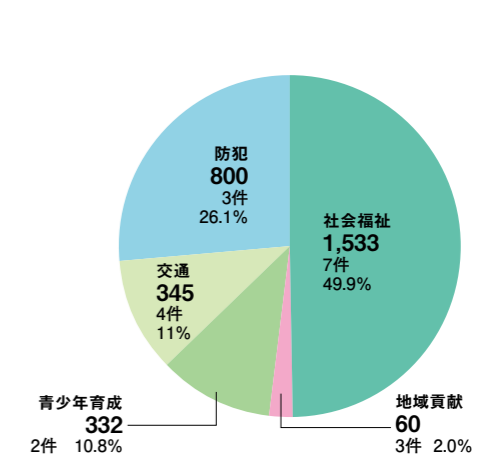
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





福井県遊技業協同組合
加藤英彦 理事長

■県遊協

- 年賀キャンペーンのシール貼付作業を授産施設に委託
- 各支部、各ホールにおいてお客様からの低玉賞品の菓子類を近隣地域の福祉施設、保育園、児童館等に寄贈
- 「福井県ファン感謝祭」を5月27日～28日の2日間開催。組合加盟店へ応募箱を設置し抽選をしてUSJへ100組200名を招待[写真①]



福井県ファン感謝祭のポスター[写真①]

■支部

- 福井県共同募金会に寄付(若狭支部)

■ホール

- 海水浴シーズン前に、全社員で海水浴場の清掃活動を実施(株式会社ムラタ)[写真②]
- 全ホールにて廃棄された空き缶のプルトップを回収・換金して、その代金で車いすを購入し福井県社会福祉協議会に寄贈(株式会社ムラタ)
- 福井県しあわせ基金に寄付[写真③]



清掃活動を実施[写真②]



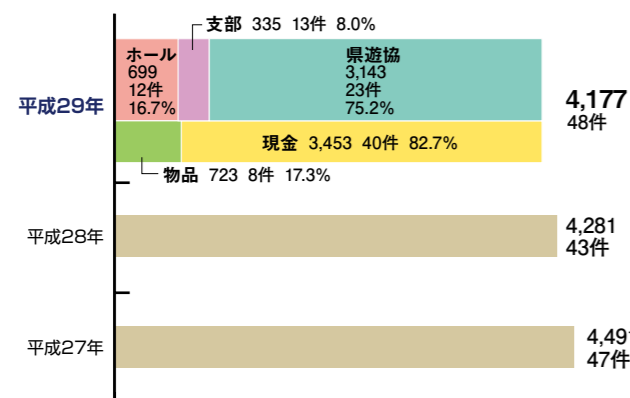
目録を渡す様子[写真③]

DATA

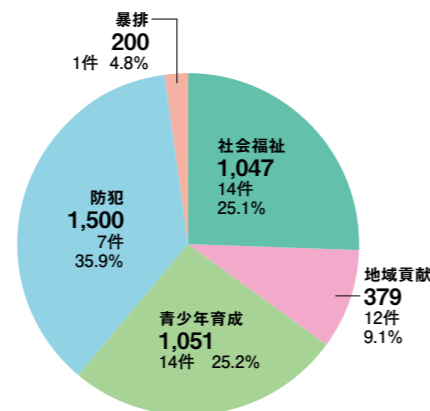
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)

■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



岐阜県遊技業協同組合
大野春光 理事長

■県遊協

- 「愛のともじび基金」の財源として県に100万円を寄付
- 老人介護施設に対する「あいばちプロジェクト」の一環として老人ばち大会を開催
- 岐阜県防犯協会に100万円を賛助会費として預託

■支部

- 多治見、土岐、瑞浪、恵那、中津川、可児市にAEDを寄贈(東濃遊技業組合)
- 中津川地区防犯協会、岐阜県暴力追放推進センター、岐阜犯罪被害者支援センター等に寄付(東濃遊技業組合)
- 入学児童に防犯ブザーを寄贈(大垣支部)[写真①]



防犯ブザーの贈呈式[写真①]



お菓子を寄贈[写真②]

■ホール

- 社会福祉支援として可児市社会福祉協議会にお菓子を寄贈(パーラーキング可児店)[写真②]
- 児童養護施設におもちゃやお菓子、家電製品などクリスマスプレゼント(セイカ)[写真③]
- 児童福祉施設へお菓子の寄贈やお祭りなどイベントを手伝う(ライン事業部)



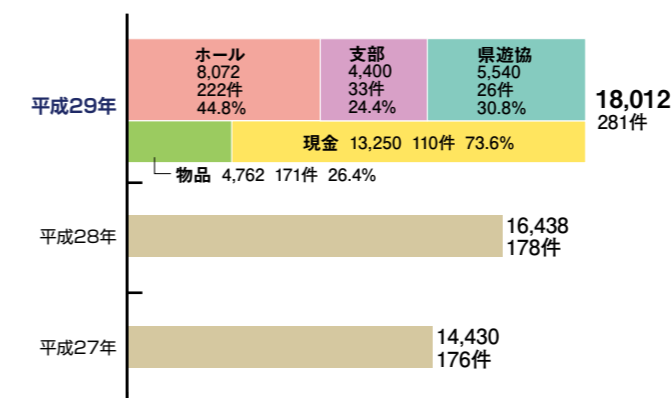
児童養護施設クリスマスプレゼント[写真③]

DATA

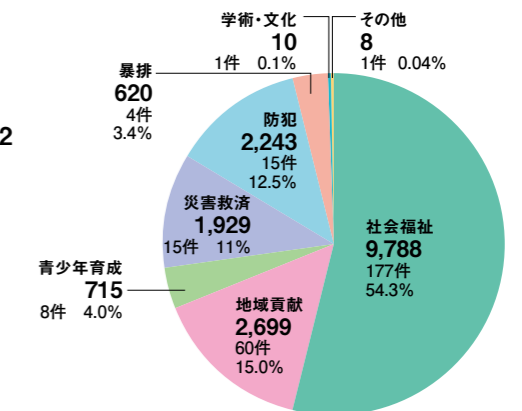
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)

■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





愛知県遊技業協同組合
西原英烈 理事長

■県遊協

- 愛知県へ300万円、名古屋市に200万円等、社会福祉関係団体に対し、福祉基金を寄付
- 天白区平針学区ほか2地域2学区に防犯カメラ計20台を寄贈【写真①】
- 公益財団法人暴力追放愛知県民会議に500万円を寄付
- 愛知県防犯協会に120万円を寄付

■支部

- 福祉施設入居者及び身体障がい者施設の入所者、母子家庭の親子等に夏休みの思い出を提供するため、東海テレビと協賛で約380名を一宮市尾西市民会館にて映画上映会及びマジックショーに招待（一宮遊技業協同組合）
- 中村区連合防犯協会に防犯カメラ5台を寄贈（中村区遊技場防犯組合）
- 豊田市社会福祉協議会に車いす購入支援のため100万円を寄付（豊田遊技業防犯組合）【写真②】

■ホール

- にっぽんど真中祭り文化財団主催「にっぽんど真中祭り」に参加する社会福祉法人AJU自立の家に協賛し、100万円を寄付（タイホウコーポレーション株式会社）
- NPO法人日本ホスピタルクラウン協会に賛同し、同団体が行う東北支援興行に物品を寄付（オーギャグループ全店）
- 半田警察署と災害時救助活動支援協定を締結（有楽グループ）【写真③】



防犯カメラ計20台を寄贈【写真①】



車いす購入支援のため100万円寄付【写真②】



災害時救助活動支援の協定締結式【写真③】



三重県遊技業協同組合
権田清 理事長

■県遊協

- 給付型奨学金として「特定非営利活動法人フリースクール三重シューレ」に250万円を預託、また、活動支援のため家賃補助金370万円とパソコン1台も寄贈【写真①】

■支部

- 尾鷲市社会福祉協議会に福祉車両1台を寄贈（尾鷲支部）
- 熊本地震及び九州大雨災害に対し義援金を寄付（津支部）
- 伊勢度会地区生活安全協会に防犯ホイッスルを寄贈（伊勢支部）

■ホール

- 環境省が呼びかけを行っている「ライトダウンキャンペーン」に参加し、20時より一部のネオンを消灯（キング観光尾鷲店）
- 児童福祉施設などにお菓子を寄贈（ガイア津店・キング観光サウザンド津店・パーラードルコ・サンプラザ津店・パーラードカオス・ラッキープラザ・グランド多気店・BIGBAN松阪店・カティー・キング観光名張店・KEIZアビタ伊賀上野店等）

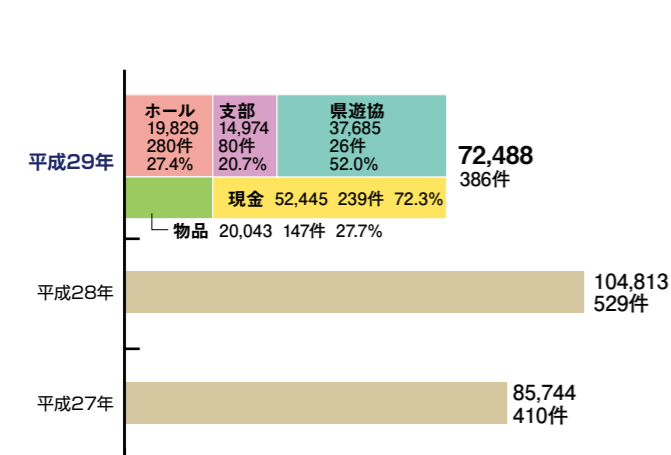


フリースクール三重シューレを支援【写真①】
(写真は2016年の目録贈呈の様子)

DATA

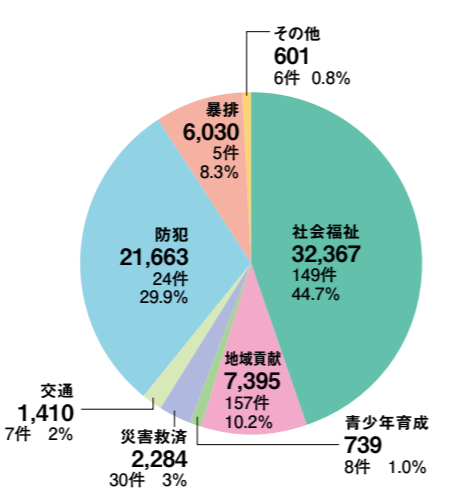
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位：千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合 (単位：千円)

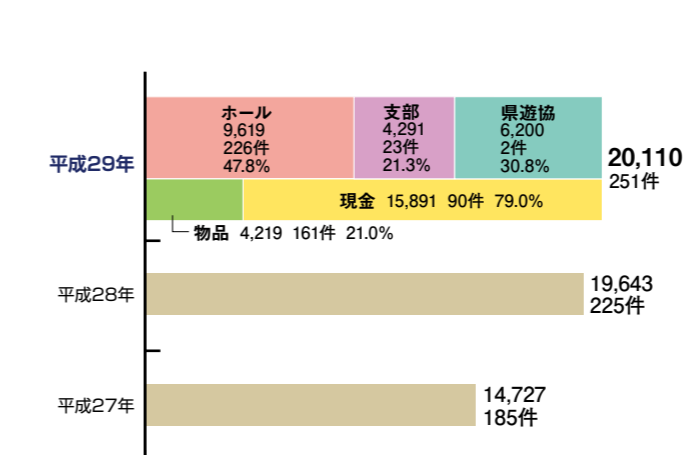
(単位：千円)



DATA

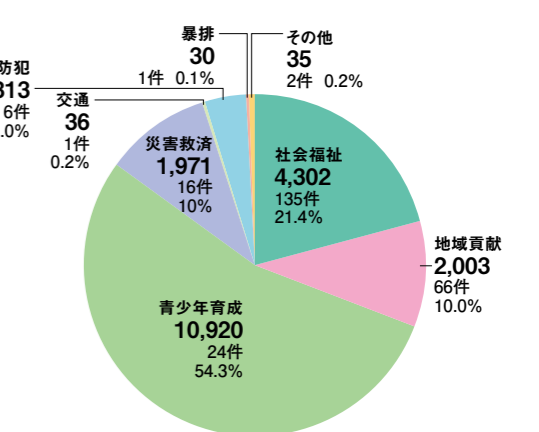
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位：千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合 (単位：千円)

(単位：千円)





滋賀県遊技業協同組合
古川照雄 理事長

■県遊協

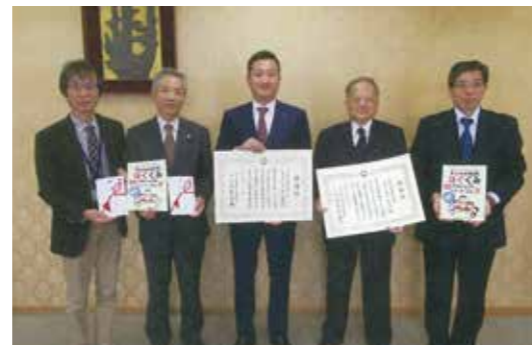
- 県遊協と青年部にてチャリティゴルフを開催し、集まった浄財を滋賀県社会福祉協議会「子どものはぐくみプロジェクト」へ寄付【写真①】
- 県内の福祉施設、NPO法人等に、送迎用車両3台や浄財を寄贈【写真②】

■支部

- 米原交通安全協会にパトロール車の購入資金の一部を寄付（湖北支部）【写真③】
- 草津警察署子ども安全リーダー連絡協議会にクレヨン2,300個を寄贈（湖南支部）
- 守山・野洲地区コンビニエンスストア安全な街づくり推進協議会に防犯ベストや防犯ビデオ、特殊詐欺撲滅ティッシュ（5,000個入り）を寄贈（湖南支部）

■ホール

- 社会福祉法人に車いす3台やノートパソコン、プリンターを寄贈（サンエイ高島店）
- ホール周辺の清掃活動を実施（株式会社イチバン・コーポレーション）



集まった浄財を滋賀県社会福祉協議会に寄付【写真①】



送迎用車両3台を寄贈【写真②】

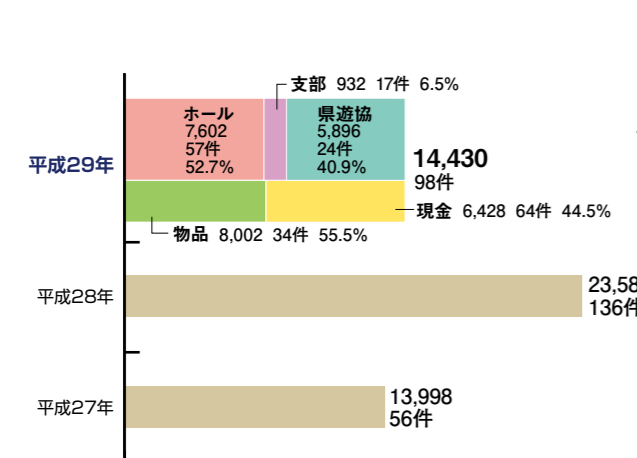


パトロール車の購入資金の一部を寄付【写真③】

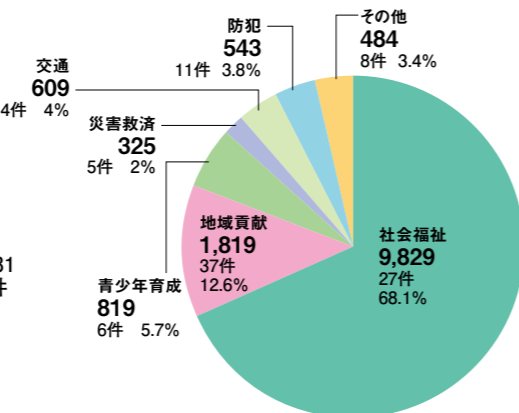
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



京都府遊技業協同組合
白川鐘一 理事長

■府遊協

- 福知山市「くりのみ園」に軽自動車を寄贈。平成13年度から毎年府内の自治体・福祉団体などに寄贈を行い、今年で17台目【写真①】
- 京遊協を母体とする「公益財団法人京遊連社会福祉基金」から社会福祉に役立ててもらうため、京都府に500万円、京都市に200万円を寄付
- 「視覚障害者オープンゴルフ京都大会」に支援金を寄贈するとともに、選手の打数を記録するマーカーとしてボランティアで参加【写真②】



軽自動車を寄贈【写真①】



視覚障害者ゴルフ大会にボランティア参加【写真②】

■支部

- 宇治防犯協会に寄付（山城支部）
- 右京防犯協会や西京防犯協会に寄付（洛西支部）

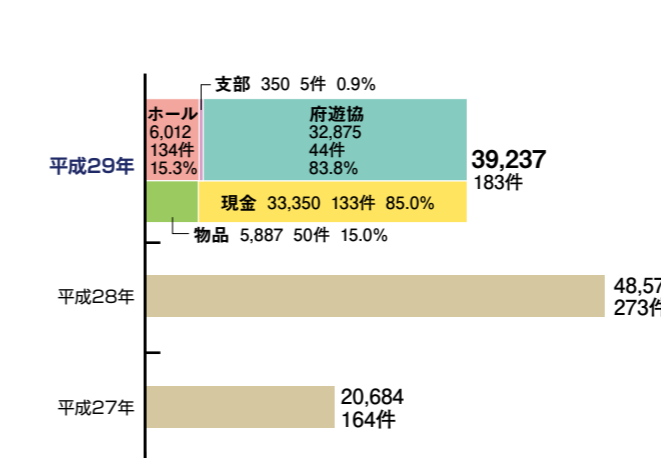
■ホール

- 京都府管理河川・牧川周辺の草刈り及びゴミ拾いを実施（CO-MO福知山店）
- 日本赤十字社に対し大雨災害の義援金を寄付（玉ちゃん倶楽部）
- 網野の海水浴場の清掃活動にスタッフ5名・スタッフの家族7名、計12名が参加（マルハン峰山店）

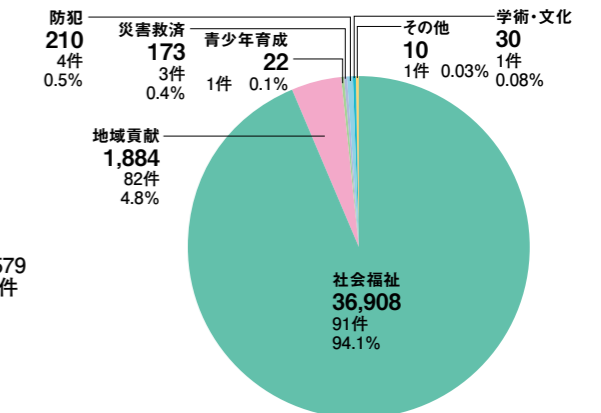
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





大阪府遊技業協同組合
平川容志 理事長

府遊協

- 大阪府主催の「現代アートの世界に輝く新星発掘プロジェクト」に協賛し、障がい者が制作した作品をアート市場につなげ、社会参加と就労に向けた取組を支援。協賛団体として「大遊協賞」を1名に贈呈
- 青色防犯パトロール車輛8台を関係自治体へ寄贈 [写真①]
- 児童養護施設の子どもたち及び交通災害遺児の計1769人を招き、クリスマス恒例の「未来っ子カーニバル」を開催



寄贈された青色防犯パトロール車 [写真①]

支部

- 豊中祭りの企業協賛ブースを借り、障がい者の働く施設に対する発注促進のため、授産製品の販売を支援（豊中支部）[写真②]
- 「子供時代の平和活動が世界平和を築く」という活動理念で運営しているCISV日本協会関西支部に協賛し30万円を寄付（南支部）
- 心身障がい児・障がい者の保護者が行う福祉活動に協賛し、40万円を寄付（河内長野支部）



豊中祭りで授産製品の販売を支援 [写真②]

ホール

- 毎月各ホールより社員が集まり駅や商店街を中心としたミニエリアの清掃活動を実施（四海樓本店）
- 社会福祉協議会主催による防寒用衣類配布会において、ホール従業員2名がボランティアとして参加（DAIICHI本店）
- 小学生サッカー大会のスポンサーとなり、運営や食事面をサポート（クラブアルドーレ服部店）



兵庫県遊技業協同組合
岡本芳邦 理事長

県遊協

- 東京パラリンピックに向けて県内の企業、大学とともに兵庫県障害者スポーツ協会と「障害者スポーツ応援協定」を締結
- 「全国車いすマラソン大会」に協賛し財政支援を行うとともに同大会に組合員が出席し、選手を激励 [写真①]
- 交流を通じて障がい者への理解を広げることを目的とした「第7回はあ〜とふるふぁんどフェスタ」を神戸ハーバーランド高浜岸壁で開催 [写真②]



車いすマラソン大会を支援 [写真①]

支部

- 垂水区での「海神社の夏祭り・秋まつり」において、垂水区暴力団との関係を断つ会メンバーとして、暴力団追放キャンペーンに参加（垂水支部）
- 明石市・明石警察署が主催する「平成29年度あかし安全・安心市民大会」に組合員が参加（明石支部）
- 暴力団追放兵庫県民大会へ組合員等が参加（長田支部）

ホール

- 日本赤十字社の献血推進運動に献血協力（イリス西明石店）
- 加古川市内の国宝「鶴林寺」境内及び周辺の幹線道路沿いで清掃活動を実施（マルハン加古川店）
- 春の全国交通安全運動、春の地域安全運動に電光掲示板、防犯ポスターの掲示等で協力（加古川組合25ホール）

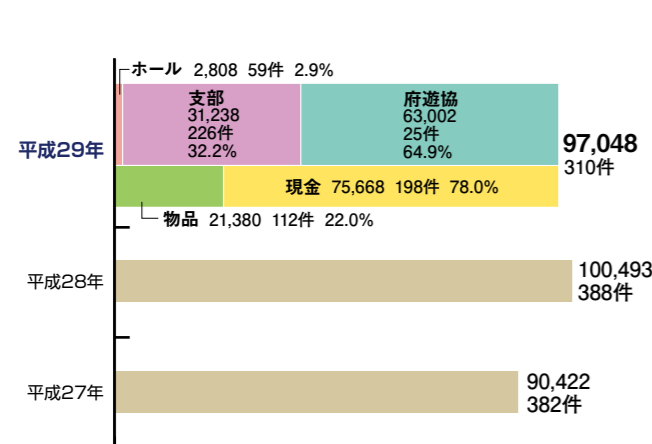


「第7回はあ〜とふるふぁんどフェスタ」の開催を告知するチラシ [写真②]

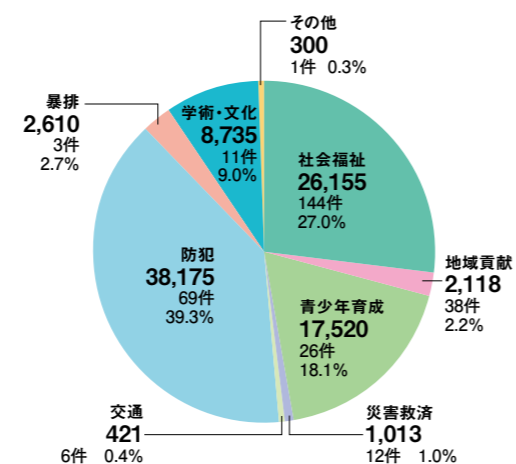
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



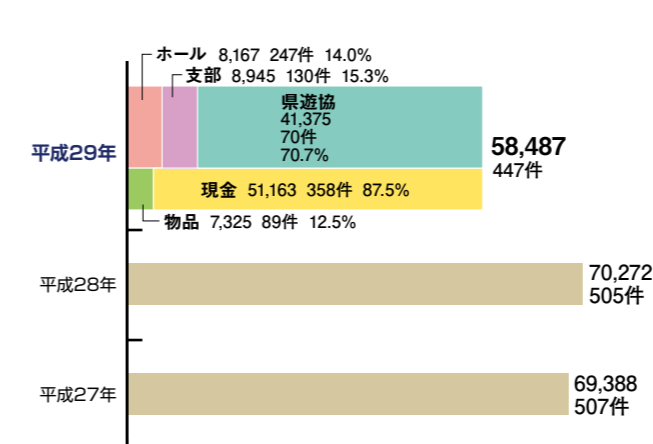
■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



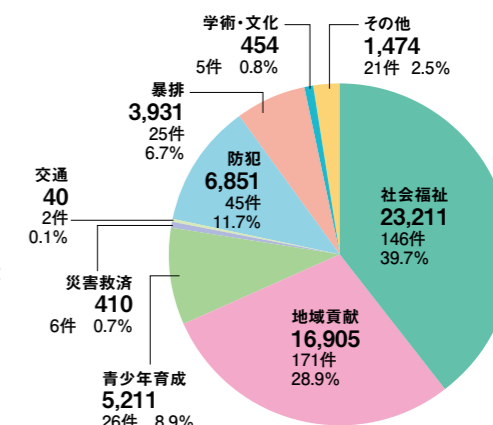
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





奈良県遊技業協同組合
相羽宗一郎 理事長

■県遊協

- 奈良遊協主催第17回チャリティゴルフコンペの開催時に、奈良県社会福祉協議会フードレスキュー等に対して30万円を寄付(17年連続)【写真①】
- 奈良県内に所在するギャンブル依存対策施設に、各種の活動資金として30万円を寄付(4年連続)【写真②】
- 奈良県赤い羽根共同募金運動に寄付(21年連続)【写真③】

■支部

- 地域の祭事である「神武祭」実行委員会に対して20万円を寄付(橿原遊技組合)
- 毎月1度「日本列島クリーン作戦」と称して各ホールから4名前後が出て地域の清掃活動を実施(奈良遊協生駒・奈良西両支部)

■ホール

- はいばら花火大会終了後に未明から駆けつけて、地域ボランティアと共に清掃活動に従事(マルハン橿原南店・マルハン橿原北店)
- 斑鳩商工祭において法隆寺インター店スタッフ12名で終了後の清掃活動を実施(マルハン法隆寺インター店)



チャリティゴルフコンペを開催【写真①】



寄付活動に対して感謝状を受領【写真②】



共同募金からの感謝状【写真③】



和歌山県遊技業協同組合
森口 司 理事長

■県遊協

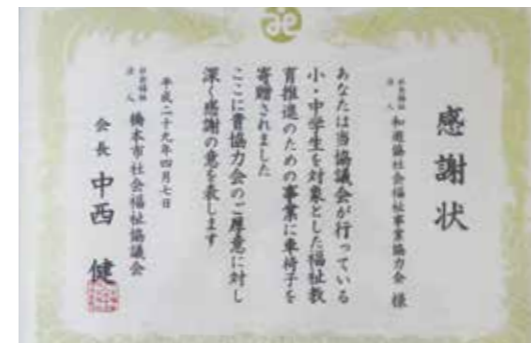
- 恒例の助成金交付事業(第27回)を実施、今回は64事業所から申請を受け、厳正に審査を行い、31施設・団体に対し、総額507万円相当の助成金(金)を贈呈
- 平成3年から助成事業を開始し、今年度分を含め、助成先は、延べ1,423件、助成総額は、約6億1,808万円になる。
- 小・中学生を対象とする「福祉出前講習事業」用の車いすを5台寄贈【写真①②】
- 更生保護施設の全面改築費を寄付し、法務大臣より感謝状を受領【写真③】

■支部

- 御坊警察署員、日高地方民警連絡協議会等に協力し、防犯活動の一環として、御坊市内の大型量販店前で啓発活動に参加(御坊支部)
- 和歌山北支部に所属する9ホールの従業員が地域住民とともに清掃活動を実施(和歌山北支部)

■ホール

- 福祉施設で製作されたクッキー等を景品として購入(オメガ・21世紀わかやま店等)
- 福祉施設にお菓子を寄贈(ハーヴェスト21・コースト21・パチンコ21世紀・ミュージアム21スロット館・スーパーフジ海南店・LOVE・スタジアム2001・名宝延時店・それいゆ和歌山紀ノ川店・マルハン和歌山湊店・ウイング岩出等)



車いす5台を寄贈し、感謝状を受領【写真①②】

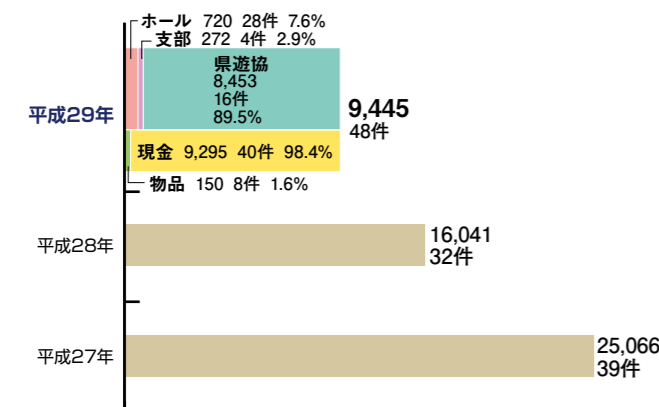


法務大臣より感謝状が贈られた【写真③】

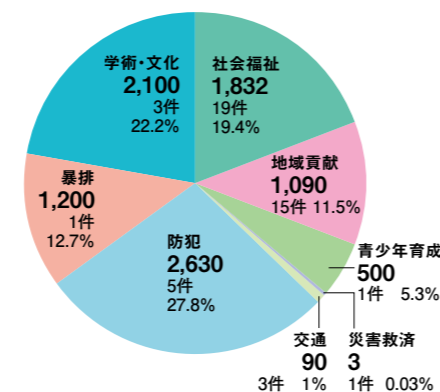
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



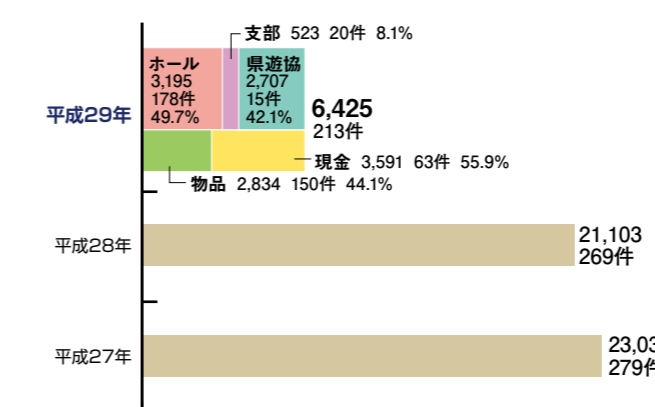
■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



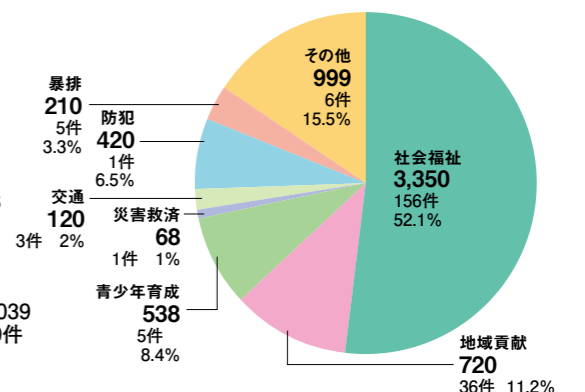
DATA

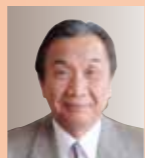
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





鳥取県遊技業協同組合
全本和由 理事長

■県遊協

- 日本赤十字社鳥取県支部に寄付金を贈呈【写真①】
- 鳥取県障害者スポーツ協会主催の第29回鳥取さわやか車いすマラソン大会等に寄付金を贈呈【写真②】
- 鳥取県被害者支援センターに寄付金を贈呈

■支部

- 鳥取市身体障がい者福祉協会に寄付金を贈呈（鳥取遊技業防犯組合）
- 倉吉社会福祉協議会主催のボランティアフェスティバルのイベント活動に参加（倉吉遊技業防犯組合）
- 「社会を明るくする運動」街頭キャンペーンに参加し、犯罪、非行防止等の啓発活動を実施（米子遊技業防犯組合）

■ホール

- 納涼花火大会において簡易トイレを設置したほか、大会ボランティアに従事（ジャンボマックス鳥取店）
- 老人ホームの入所者を対象に店舗ホールを無料開放し、参加型イベントを開催（有限会社ニュー興楽）【写真③】
- UFO各店において、船上山の清掃活動をはじめ、周辺地域の清掃活動を実施（UFO東白）



日赤に寄付【写真①】



車いすマラソン大会を告知するポスター【写真②】



イベントを告知するチラシ【写真③】



島根県遊技業協同組合
洪 錫圭 理事長

■県遊協

- 島根県環境生活部、日本赤十字社島根県支部、島根県共同募金会等に寄付【写真①】

■支部

- 松江遊技業防犯協会杯「学童野球新人大会」を開催（松江遊技業防犯協会）【写真②】
- 松江水郷祭花火大会翌日に清掃活動を実施（松江遊技業防犯協会）【写真③】

■ホール

- 保育園、幼稚園、小学校に書籍を寄贈（株式会社丸三）
- 萩石見空港マラソン大会の給水、栄養補給所の設営及び運営サポート（オアシス）
- 浜田漁港周辺の清掃活動の実施（丸三浜田店）



日本赤十字社島根県支部等に寄付【写真①】



「学童野球新人大会」を開催【写真②】

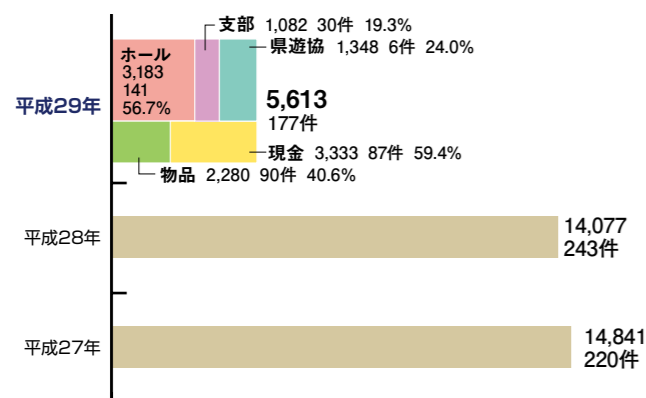


清掃活動を実施【写真③】

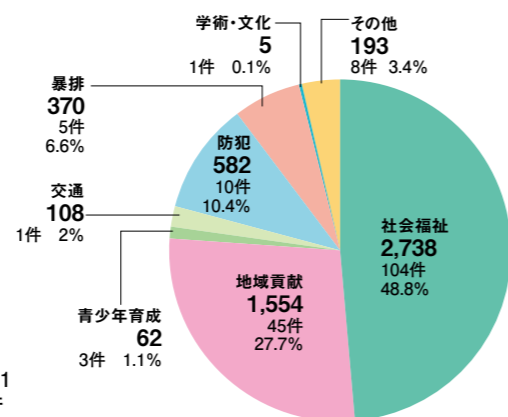
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



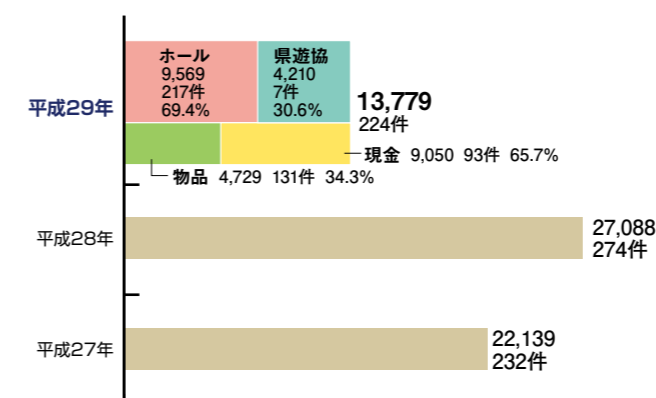
■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



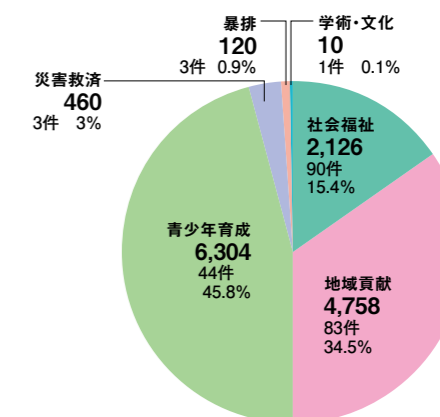
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





■県遊協(含む青年部会)

- 岡山県が推進している犯罪の無い安全で安心な社会の実現を目指し、岡山県警察との連携・協同により、犯罪の起きにくい社会づくりの推進に関する協定を締結【写真①】
- 「岡山県桃太郎愛のともしび基金」に100万円を寄付
- 施設利用者の方の機能訓練やリハビリ、楽しい時間を過ごす手軽な娯楽を提供する為、旭川荘療育医療センターと同真庭地域センターに遊技機各3台、計6台を寄贈【写真②】
- 障がい者の就労支援をされている岡山県セルフセンターで作られたお菓子や雑貨等を児童福祉施設にクリスマスプレゼント【写真③】

■支部

- 青少年健全育成のため岡山市に100万円を寄付(岡山支部)
- 地域のイベントやお祭りに協賛し地域活性化に寄与(玉野支部・高梁支部)

■ホール

- 備前市の道路清掃美化活動と地域活性化のため清掃道具一式を寄贈(サンエイグループ)
- 岡山マラソンに協賛し540万円を協賛金として預託(成通グループ)



岡山県警察と協定を締結【写真①】



遊技機各3台、計6台を寄贈【写真②】



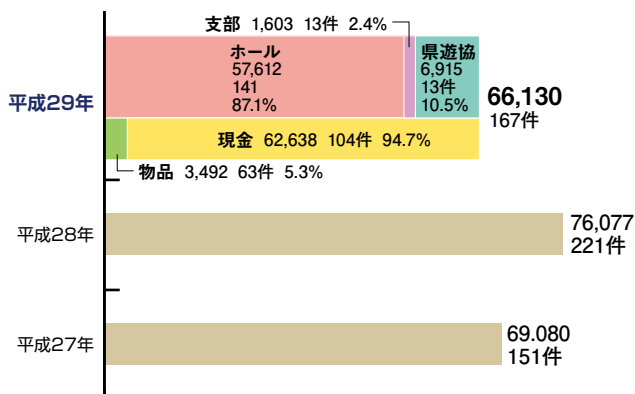
お菓子や雑貨等を児童福祉施設にプレゼント【写真③】

DATA

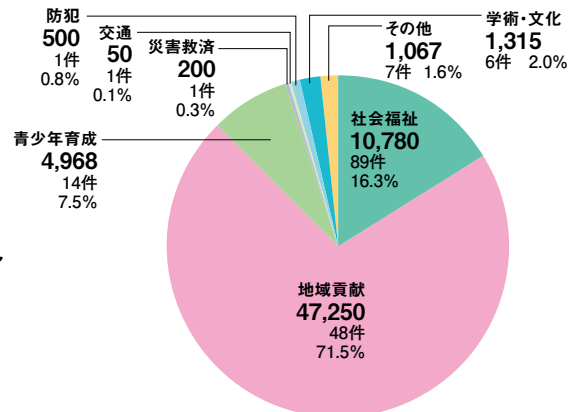
※物品は現金換算した金額です。
※クラブに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)

■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





「交通安全子ども自転車大会」を支援 [写真①]



ポリスカップジュニアバスケットボール大会の記録集 [写真②]



フットサル大会の様子 [写真③]

■ 県遊協

- 地域社会貢献の一環として、子どもの交通安全及び青少年健全育成を目的で行われる「交通安全子ども自転車大会」を平成19年から11年継続して協賛支援、本年度も60万円を財政支援するとともに、理事長が大会参加児童を激励 [写真①]

■ 支部

- スポーツ活動を通じた青少年健全育成事業として開催されている「ポリスカップ(広島西警察署長杯)ジュニアバスケットボール大会」を平成19年の第1回開催から11年継続して財政及び運営支援、本年度も50万円を支援するとともに、支部長以下10名が大会役員として大会運営に当たる(広島西支部) [写真②]
- 青少年健全育成を目的に開催されている「広島中央少年ソフトボール大会」を平成16年から14年継続して運営支援し、本年度も50万円の財政支援を行うとともに広島市遊協会長及び広島中央支部長が毎年参加し、出場選手を激励(広島市遊技業防犯協力会)
- 広島市遊技業防犯協力会は、暴力追放、地域の環境浄化、交通死亡事故抑止、犯罪被害防止活動等、平和都市広島市の安全で安心なまちづくりに直結する活動や行政等と連携したあらゆる活動を通じた社会貢献活動を推進、また広島市暴力追放監視防犯連合会の結成当初、広島市遊協会長が連合会長を務め、物心両面にわたり組織の中核として活動を続け、非常に高い社会的評価を受けている(広島中央支部・広島東支部・広島西支部・広島南支部)

■ ホール

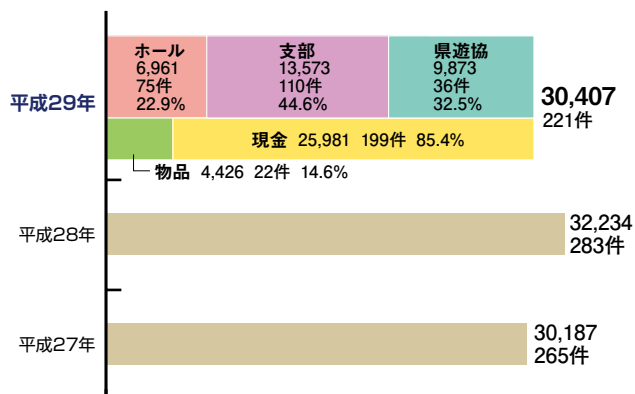
- 「敬老の日」のお祝いとして店舗を無料開放し、近隣の養護老人ホーム3施設約80名のお年寄りをお招きし、「シニアパチンコ大会」を開催、遊技する機会のない入居者に楽しんでもらい、平成5年度の第1回開催を皮切りに、本年度で8回目の開催となっている。招待した3施設に対しては、毎回、車いす各1台(計3台)を寄贈(銀座1)
- 地域社会、お客様、従業員の満足を追求することを目的に、NPO法人を立ち上げ、平成8年から22年継続して「プロバカップフットサル大会」を開催、今年の大会には、105チーム755名の選手が参加するなど、中国地方を代表する大会となっている(株式会社プロバグループ) [写真③]

DATA

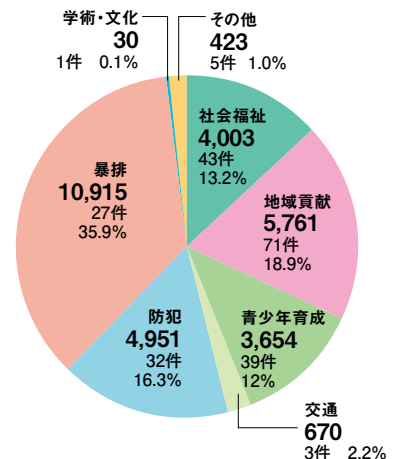
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■ 年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合 (単位: 千円)

■ 平成29年現金・物品の割合 (単位: 千円)



■ 平成29年分野別、拠出額と割合 (単位: 千円)





山口県遊技業協同組合
金 栄作 理事長

■県遊協

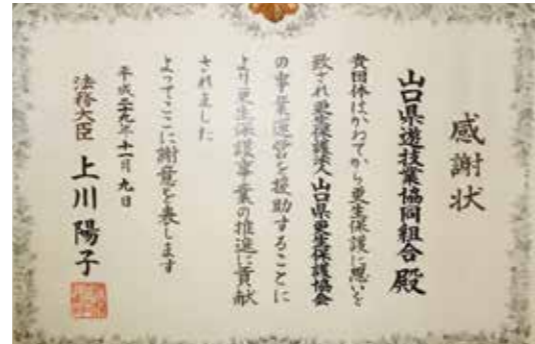
- 県内の障がい者福祉作業所から希望を募り、福祉作業や通所者の娯楽に役立つアイロン、レジスター、大型テレビ、卓球台等の物品を13施設に寄贈
- 高齢者の脳機能活性化に役立つと言われるパチンコ台を社会福祉法人防府あかり園に2台寄贈
- 青年部主催によるチャリティゴルフ大会を開催し、収益金50万円を県内の児童養護施設2カ所に寄贈
- 更生保護事業等への貢献に対し、法務大臣より感謝状を受領【写真①】
- 防府市で開催された「犯罪のないまちづくり県民大会」に参加【写真②】

■支部

- 防犯活動支援のため宇部市防犯対策協議会に100万円を寄付（宇部市遊技場防犯組合）
- 毎月第3火曜日を安全巡回の日と定め、組合加盟ホール従業員と防府警察署員が合同でホールを巡回し、年間通して乳幼児の車内放置事案や盗難被害の未然防止、不審者の発見活動等を実施（防府遊技場防犯組合）

■ホール

- 社会福祉活動の支援のため、県内の社会福祉法人4施設に対し、車イス、清掃作業用具、農作業用具、熱中症・災害対策用品などを寄贈（ジャンボ防府店）
- 県内の山口発達臨床支援センターに対し、老朽化したトイレの洋式化工事を実施し、施設利用者の利便性を向上（ジャンボ防府店）
- 毎月1日を交通安全日と定め、ホールスタッフが交通安全協会と合同で街頭に立ち、児童の通学の安全を確保（永楽本店）
- 振り込め詐欺防止を題材としたトイレトペーパーを購入し、400ロールを宇部警察署に寄贈（アリーナ21）【写真③】



法務大臣より感謝状を受領【写真①】



「犯罪のないまちづくり県民大会」に参加【写真②】



振り込め詐欺防止グッズを寄贈【写真③】



徳島県遊技業協同組合
久岡征司 理事長

■県遊協

- 徳島県暴力追放センターに支援金を贈呈
- 財団法人徳島県視覚障害者連合会や観光協会に賛助会員費を預託

■ホール

- 「ノヴィル杯親善野球大会」を開催し、徳島県内外より小学生チーム51団体が参加（ノヴィル株式会社）
- 社員9名が徳島県佐那河内村の保育所を訪問し、保育所と地域の住民が収集したペットボトルキャップを引き取るとともに児童との交流イベントを実施した。児童にペットボトルキャップのリサイクルの仕組みを紙芝居で説明したり、シャボン玉づくり等の遊びを通じて児童と交流（ミリオン美馬店）【写真①】
- 脇町花火大会及び阿波踊りのゴミ拾い等のボランティア活動を行った（株式会社ランド商事・アドバンス）

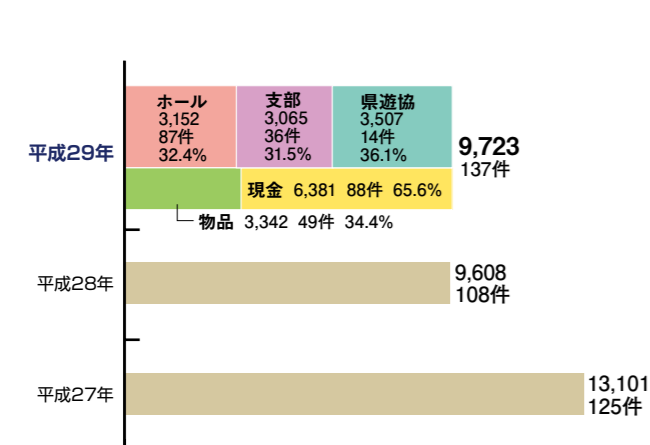


保育所訪問活動を報告するポスター【写真①】

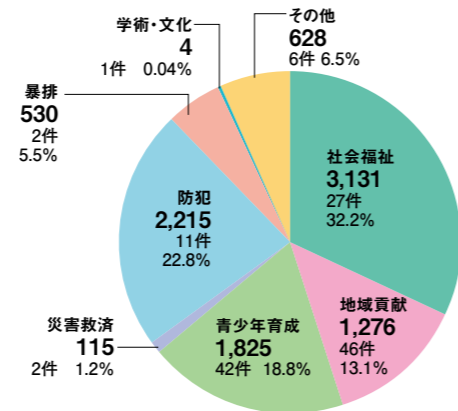
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



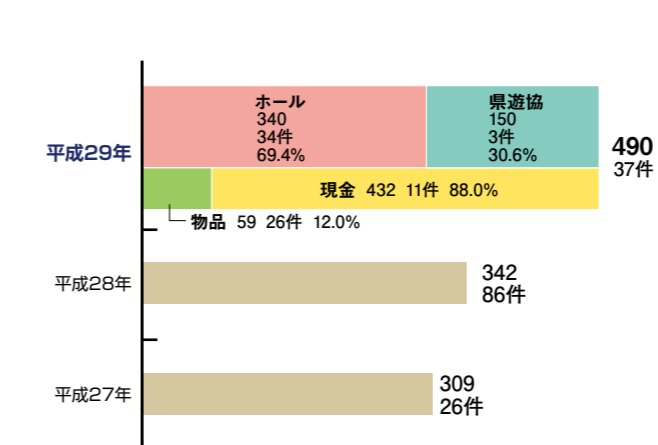
■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



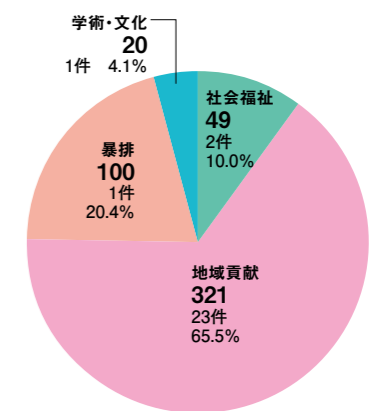
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）
■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





香川県遊技業協同組合
中尾元紀 理事長

■県遊協

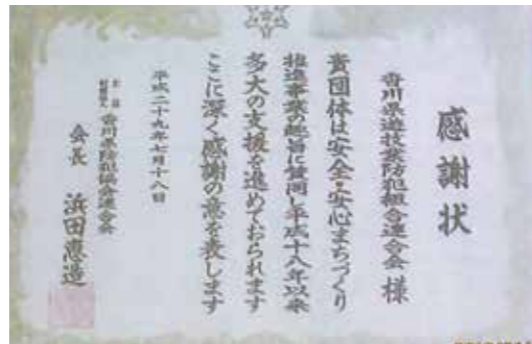
- (公財) 香川県暴力団追放運動推進センター主催の「香川県民大会」へ県下から組合員が参加 [写真①]
- (公財) 香川県防犯協会連合会に毎年100万円を寄付し、同連合会の会長を兼任する知事から感謝状を受領 [写真②]

■ホール

- 児童教育文化向上の為、県内5市1町に計約300万円相当の児童図書を送付(株式会社たまや)
- 災害児への継続的な支援として「東日本大震災ふくしまこども寄付金」に100万円を寄付(株式会社ランド商事・アドバンス)
- 稚魚800匹を放流し、地元企業として瀬戸内海の海を守る活動を実施(愛染興業株式会社) [写真③]



「香川県民大会」に参加 [写真①]



感謝状を受領 [写真②]



稚魚の放流を実施 [写真③]



愛媛県遊技業協同組合
川井義廣 理事長

■県遊協

- 道路横断中の交通事故防止に寄与するため、県交通安全協会に道路横断旗(1,000本)寄贈(平成22年から継続実施) [写真①]
- 県遊協主催「ファン感謝デー」売上金の一部(30万円)を被害者支援センターえひめへ寄付(平成27年から継続実施)
- 高齢者被害の特殊詐欺、交通事故防止に活用する葉書「かもめーる」1万枚を寄贈(平成26年から継続実施) [写真②]
- 県中予保健所等が主催する「薬物乱用防止広報パレード」に参加

■支部

- 中予地区(4地区)の防犯協会に防犯グッズ(総額40万円)を寄贈(中予地区遊技業防犯協力会)
- 松山東地区交通安全協会にフェイスタオル300枚を寄贈(中予地区遊技業防犯協力会)
- 大洲地区防犯協会に防犯カメラ設置費用を寄付(大洲地区遊技業防犯協力会)

■ホール

- 「愛媛・ハワイ交流少年野球大会」を協賛、大会費用として50万円を寄付(株式会社日光商事)
- 「第14回Nikko杯」を協賛、大会費用として新居浜市レクバレー連盟に70万円を寄付(株式会社日光商事) [写真③]
- 南国産業株式会社と松山南警察署との間で災害時の施設の利用等に関する協定を締結(南国産業株式会社)
- 第67回三津浜花火大会において、ホール駐車場約200台を無料開放(大盛三津店)
- ホール駐車場に献血車を誘致し、系列ホール従業員のほか、地域住民も献血活動に参加(南国産業株式会社)



道路横断旗を寄贈 [写真①]



寄贈の様子 [写真②]



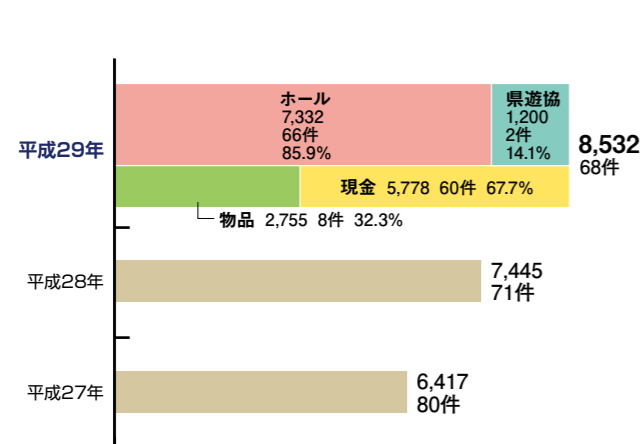
レクバレー大会を支援 [写真③]

DATA

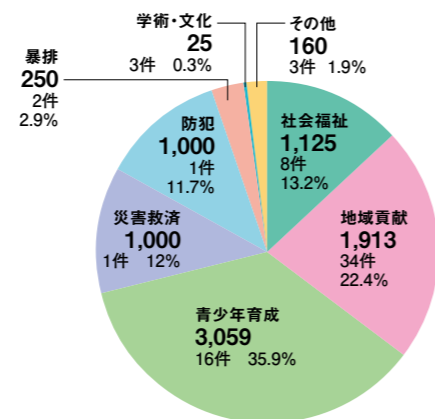
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)

■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)

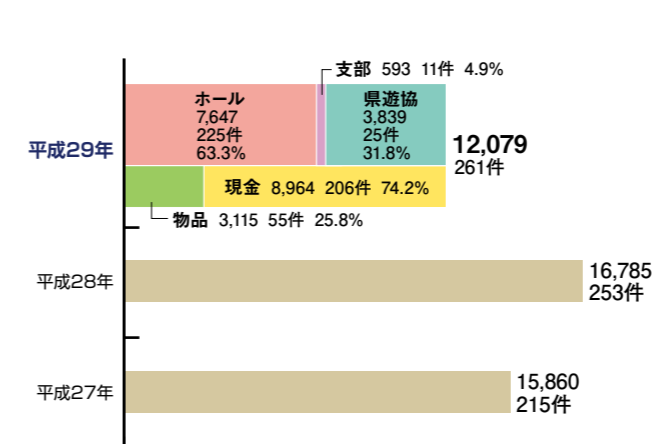


DATA

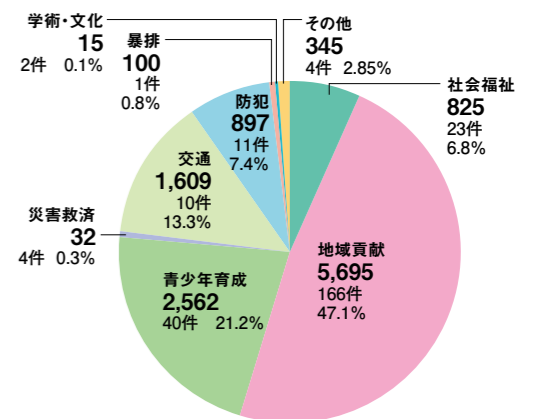
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)

■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





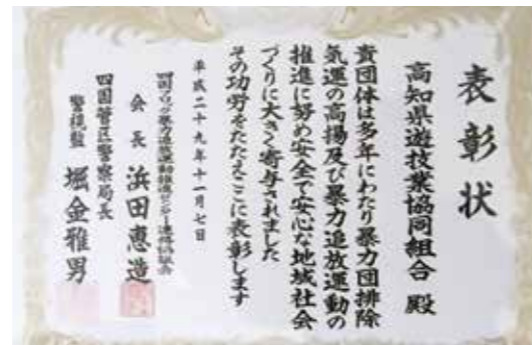
高知県遊技業協同組合
秋 太海 理事長

■県遊協

- 多年に渡る暴力団追放推進運動に対し、四国管区警察局長から連名の表彰状を受領【写真①】
- 愛の献血キャンペーンを実施して、5ホールの駐車場を提供し、延べ168人が献血【写真②】
- (公財) 暴力団追放高知県民センター、NPO法人こうち被害者支援センターに事業活動資金を寄付

■ホール

- 第43回中・四国身体障害者福祉大会こうち大会への協賛(株式会社慶尚)
- 地域振興事業としてお祭りやイベントに寄付や協賛(共栄会館・株式会社慶尚・株式会社玉井・有限会社ホームラン・有限会社栄幸商事)
- 児童養護施設にお菓子を寄贈(株式会社土佐商事・株式会社ジムス・株式会社慶尚・株式会社凱勝・有限会社ホームラン)



四国管区警察局長から表彰状を受領【写真①】



ホールの駐車場を提供し延べ168人が献血【写真②】



福岡県遊技業協同組合
平岡聖教 理事長

■県遊協

- 児童養護施設で暮らす児童を対象とした「第10回こども絵画コンクール」を開催【写真①】
- 児童養護施設19カ所にお菓子や図書券、家電等を寄贈
- 福岡県少年警察ボランティア協会、福岡県暴力追放運動推進センター、福岡犯罪被害者支援センター、福岡県児童養護施設協議会等に総計400万円を寄付

■支部

- ニセ電話詐欺防止のためうちわを作成し、ホールや納涼花火大会にて注意喚起の呼びかけを実施(直方宮若遊技場組合)
- 博多防犯協会に防犯カメラ10台を寄贈(博多遊技場防犯組合)
- 青パトによる防犯パトロール活動を実施(春日遊技場組合・筑紫遊技場組合)
- 九州北部豪雨の被災者支援のため瓦礫の撤去作業に参加(柳川遊技場組合)【写真②】
- 振り込め詐欺や迷惑電話の防止対策電話機を中央警察署に寄贈(福岡市中央遊技場防犯組合)【写真③】

■ホール

- 九州北部豪雨災害時に、片付けの等ボランティア活動を実施(ワンダーランド高田店・Aパーク春日店・パーラーAパーク屋形原等)
- こども食堂を開催し、地域住民に食事を提供(株式会社玉屋)
- 九州北部豪雨の被災者支援として朝倉市にバスタオル100枚を寄贈(ワンダーランド高田店)
- 東峰村豪雨災害の被災者支援として東峰村役場にインスタント味噌汁や飲料水を寄贈(ニューラッキー7)



こども絵画コンクールを開催【写真①】



瓦礫撤去に参加【写真②】

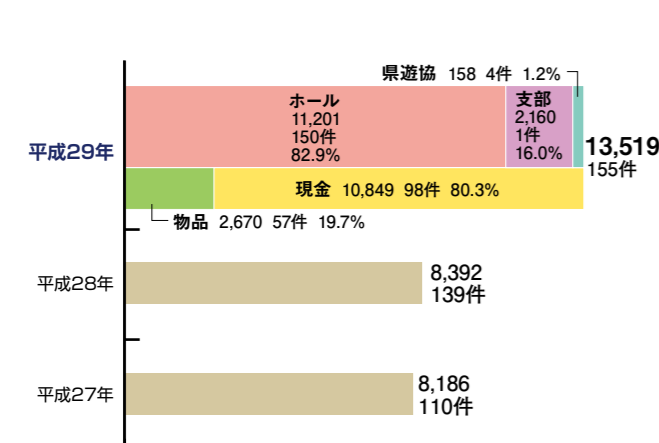


詐欺防止対策の電話機を寄贈【写真③】

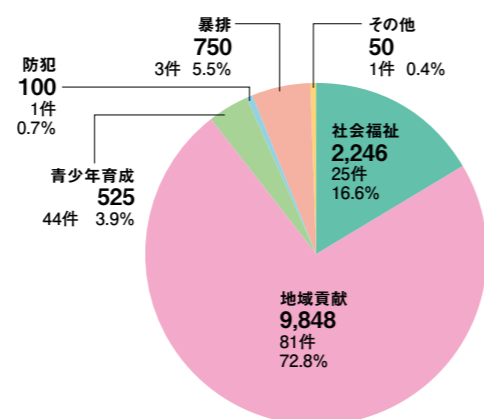
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



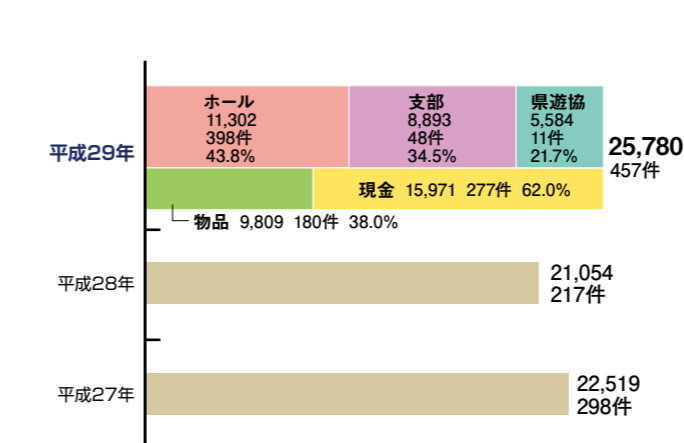
■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



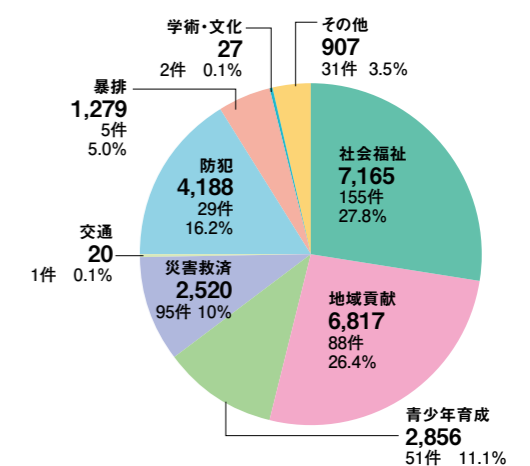
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)
■平成29年現金・物品の割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





佐賀県遊技業協同組合
新富和紀 理事長

■県遊協

- 佐賀県暴力追放運動推進センター、佐賀県防犯協会に活動資金を寄付
- ニセ電話詐欺被害防止のため、ATMに設置する音声機器「せつと君」100個を佐賀県防犯協会に寄贈 [写真①]
- 児童養護施設6施設にクリスマスプレゼント(お菓子、図書カード)を寄贈

■支部

- 大規模災害発生時に、ホール駐車場を警察活動拠点として提供する協定を地元警察署と締結(伊万里市遊技場組合)[写真②]
- 特別養護老人ホームにパチンコ遊技機2台を寄贈(有田地区遊技場組合)[写真③]
- 唐津市福祉基金、佐賀県共同募金会など3団体に寄付(唐津地区遊技業組合)

■ホール

- 九州北部豪雨の被災地朝倉市で、家屋内の土砂搬出作業など、ボランティア活動を実施(派遣回数5回、延べ参加人数47名)(株式会社新富商事)
- 地域の清掃活動を実施(株式会社ヤマト・ユーコーラッキー鳥栖郊外・ユーコーラッキー三田川・キャロル上峰)
- 復興支援のため、岩手・熊本・大分県内の福祉施設12カ所にお菓子を寄贈(キャロル上峰)



ニセ電話詐欺被害防止のために音声機器を寄贈 [写真①]



大規模災害発生時にホール駐車場を警察活動拠点とする協定を締結 [写真②]



特別養護老人ホームにパチンコ遊技機を寄贈 [写真③]



長崎県遊技業協同組合
松尾道彦 理事長

■県遊協

- 長崎フードバンクシステムズ等3団体へ寄付
- 広安愛児園等、3カ所の児童養護施設へ寄付
- 社会福祉法人常明園へ運動昇降式平行棒を寄贈 [写真①]

■支部

- 南島原警察署に振り込め見張隊器寄贈(島原半島遊技場組合)
- 「第14回大村親善少年野球大会」に協賛し、運営支援金を寄贈(大村市遊技場組合)[写真②]
- 浦上地区及び長崎市職域防犯協会協議会への寄付(長崎市遊技場組合)

■ホール

- 7回目となる献血活動を実施(ひぐち本社)[写真③]
- 児童養護施設へお菓子を寄贈(ユーコーラッキー浜町店)
- 九州北部豪雨復興支援ボランティアに参加(株式会社荒戸産業)



運動昇降式平行棒を寄贈 [写真①]



少年野球大会を協賛 [写真②]

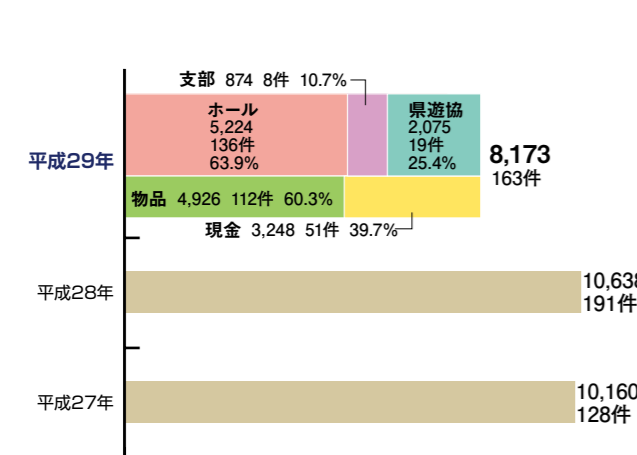


献血活動を実施 [写真③]

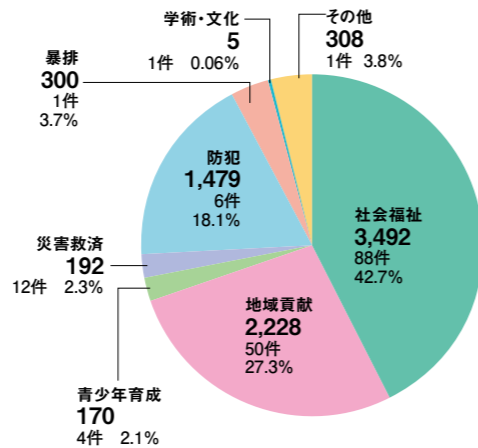
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)



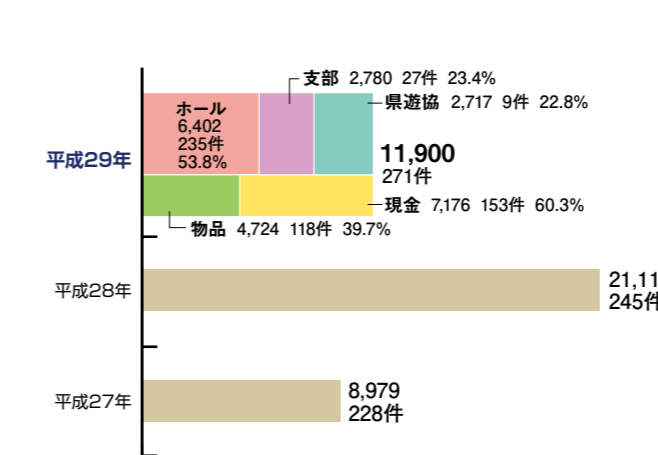
■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)



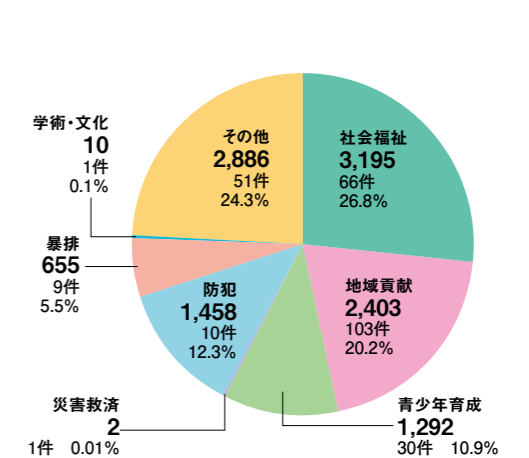
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合(単位:千円)



■平成29年分野別、拠出額と割合(単位:千円)





熊本県遊技業協同組合
岩下博明 理事長

■県遊協

- 第14回目となる福祉施設利用者支援活動として、授産施設 菊陽学園入所者の方々に正月3が日でお客様に配布する総付景品にシールを貼っていただく作業を委託。12月24日に作業対価と学園で必要とする運動器具や電化製品を寄贈 [写真①]
- 県遊協青年部は、第13回目となるチャリティゴルフコンペで得た浄財を県内3つの乳児院に寄付金を贈呈
- 熊本地震への義援金として、傘下組合員ホールへ県遊協で作った統一募金箱を配布し、募金活動をお願いして集まった200万円を熊本で開催された九州傘下組合員が集結して開催される九遊連定時総会（熊本開催）において、蒲島知事に岩下理事長より寄贈 [写真②]



シール貼付作業を委託 [写真①]



熊本地震への義援金を寄贈 [写真②]

■支部

- 熊本中央地区遊技業防犯協会（上野会長）は、毎年開催される承道館少年剣道錬成大会の運営を支援（熊本中央地区組合）
- 人吉遊技場防犯組合（小林組合長）は、毎年、社会貢献活動の一環として実施している人吉地域にある13の保育園、4の幼稚園へヤクルト1万1,000本を寄贈（人吉地区組合）
- 宇城地区組合員ホール従業員は、地域防犯活動として交代で毎日、青色パトロールを実施（宇城地区組合）

■ホール

- 2月に開催された熊本城マラソン2017に出場者される方々の受付ボランティアに参加（ノーティーズDst）
- グループ全店舗で、近隣地域の清掃活動を月1回実施（株式会社三愛）
- 「大津からいもフェスティバル」のボランティアとして唐いもの袋詰め等に参加（金馬車大津店） [写真③]

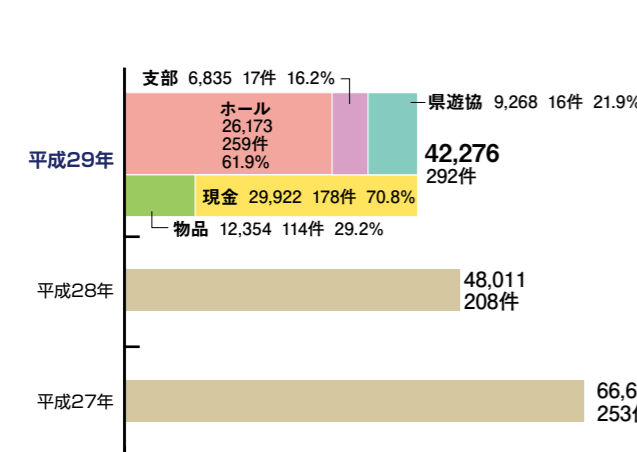


「大津からいもフェスティバル」にボランティア参加 [写真③]

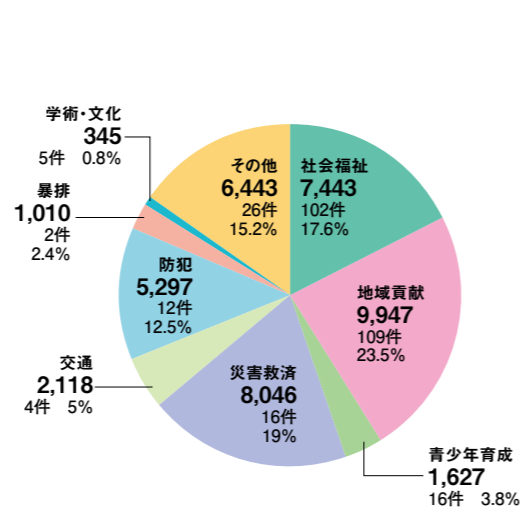
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



大分県遊技業協同組合
力武一郎 理事長

■県遊協

- 大分県防犯協会に賛助金として200万円を寄託、また特殊詐欺撃退防犯機器56台を寄贈
- 社会福祉施設やNPO法人、暴力追放大分県民会議、大分被害者支援センター等に寄付
- 大分合同福祉事業団（車いすマラソン大会）に寄付 [写真①]
- 大分合同福祉事業団の「歳末助け合い募金」へ寄付 [写真②]



車いすマラソンを支援 [写真①]



大分合同福祉事業団へ寄付 [写真②]

■支部

- 知的障がい者施設にジュースへのシール貼付作業を委託（大分南遊技業防犯組合）
- 地域の児童クラブにお菓子を寄贈（宇佐市遊技場組合）

■ホール

- 毎月9日をクリーンデーとして、店舗周辺の清掃活動を実施し、さらに9月9日は、スーパークリーンデーとして児童養護施設「小百合ホーム」で除草作業を実施（まるみつ鶴崎店）
- 大分市内の施設へサンタクロース・トナカイに扮して出向き、入所者全員にクリスマスプレゼント（株式会社セントラルカンパニー）
- 九州北部豪雨災害復旧活動にボランティア参加（株式会社光会館・パチンコ湖月・ダイナム大分中津店等）
- 暴力追放・銃器根絶運動の支援組織として、暴排活動等に取り組んだ功勞により、暴追県民会議から感謝状を受領（エーワン） [写真③]

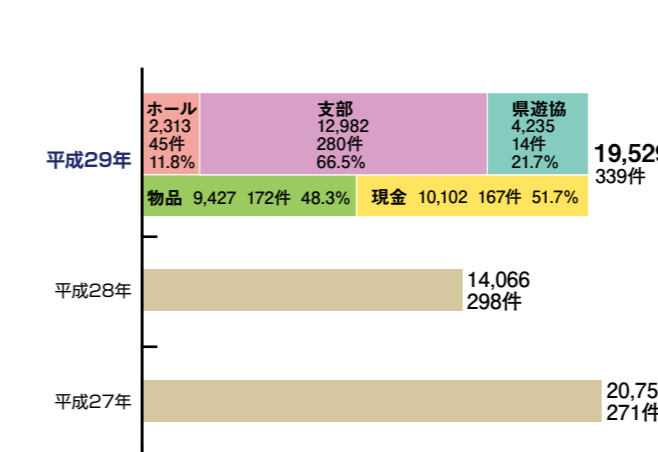


暴追県民会議から感謝状を受領 [写真③]

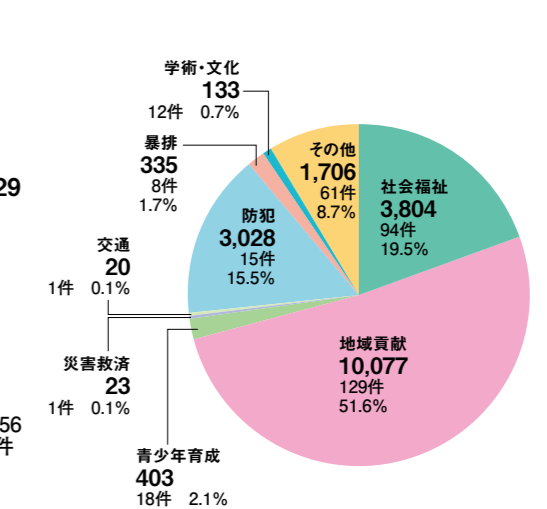
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





宮崎県遊技業協同組合
山口裕道 理事長

■県遊協

- 熊本地震復興支援の義援金として宮崎県共同募金会に300万円を寄付
- 九州北部豪雨災害の義援金として日本赤十字社宮崎県支部に150万円寄付【写真①】
- 宮崎県防災緊急ヘリコプターにホイストウインチ等の装備資機材を贈呈【写真②】
- 犯罪被害者支援センターの体制強化に100万円、また、警察本部の街頭犯罪抑止の啓発活動に約180万円を支援
- 青年部会が県内4ヵ所の障がい児支援施設や養護施設において、サンタクロースに扮してクリスマスプレゼントを贈呈



九州北部豪雨災害の義援金を寄付【写真①】



宮崎県防災緊急ヘリコプターに装備資機材を贈呈【写真②】

■支部

- 高齢者福祉施設35施設に車いす50台を寄贈（宮崎地区遊技業組合）
- 自転車盗難防止用ワイヤーロック約2,000個を寄贈（都城地区遊技業組合）
- 熊本城災害復旧支援金100万円を寄付（宮崎地区遊技業組合）
- 各ホールに呼びかけ、日向市社会福祉協議会が行っているフードバンク事業に協力（日向地区遊技業組合）

■ホール

- 草刈り・ゴミ拾い・花壇作り&手入れ・海岸清掃・お盆前及び年末一斉清掃・各地区の花火大会前後の会場周辺清掃等を実施（株式会社西の丸）【写真③】
- 「鐘ヶ浜学園」のクリスマスパーティーに参加。お菓子をプレゼント（エルグラン日向店）
- 新入学児童に交通安全と防犯のため、ランドセルカバー1,920枚を寄贈（株式会社西の丸）

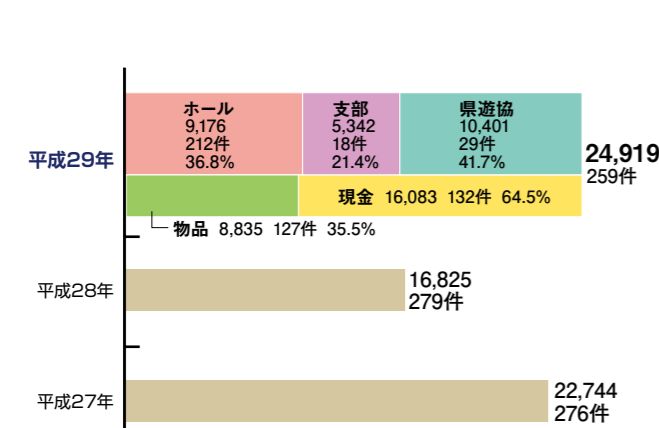


清掃活動を年間450回実施【写真③】

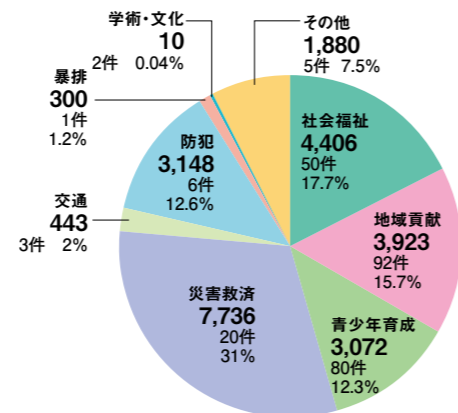
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



鹿児島県遊技業協同組合
山室克己 理事長

■県遊協

- 鹿児島県交通被災者たすけあい協会に寄付金として約150万円を贈呈【写真①】
- 障害者就労支援施設ワークショップはやとにクリスマスプレゼントのイベント用テント一式3セット・ブランケット40枚を寄贈【写真②】



寄付金贈呈式【写真①】



社会福祉施設に物品を寄贈【写真②】

■支部

- 「暴力追放中央大会街頭パレード」に、加盟ホールから多数の組合員が参加（鹿児島市遊技事業組合）【写真③】
- 秋の地域安全運動パトロール隊として参加。スーパー敷地内にて万引き防止とうそ電話詐欺防止のビラ配りを実施（出水支部）
- 志布志地区防犯協会に置き引き注意シール4,000枚、置き引き注意ポスター10枚を寄贈（志布志支部）
- 肝付地区防犯協会に防犯グッズ190個を寄贈（肝付支部）

■ホール

- 出水市に大型簡易テント10個を寄贈（株式会社宮永商事）
- 児童福祉施設や高齢者保険福祉センターにお菓子を寄贈（ユーコーラッキー鹿児島新栄店・ユーコーラッキー指宿店）

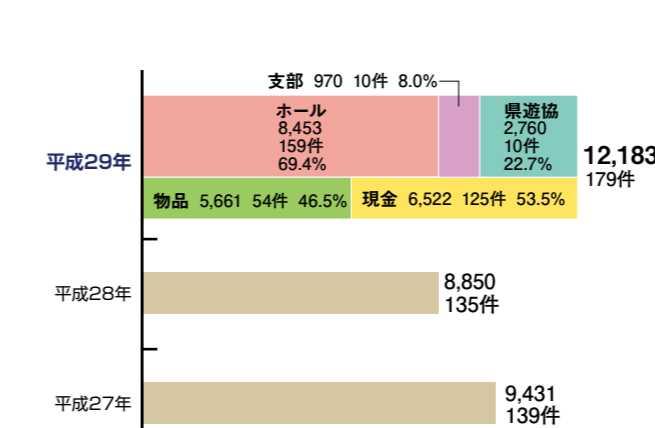


街頭パレードに参加【写真③】

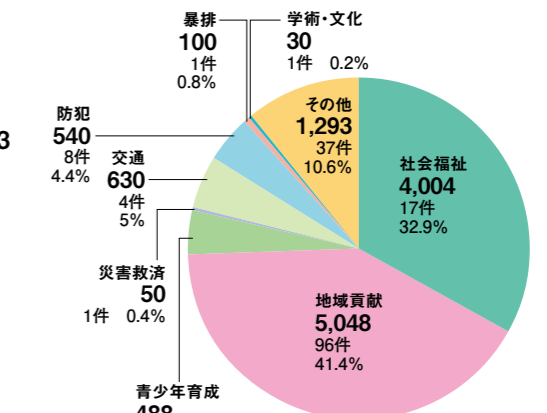
DATA

※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）





沖縄県遊技業協同組合
當眞嗣正 理事長

■県遊協

- 福祉活動をはじめ、スポーツ、学術・文化、研究事業、コミュニティ強化等々を行う団体に助成金を贈呈【写真①】
- ヤクルト球団OBを講師として招へいし少年野球教室を開催【写真②】
- チャリティゴルフコンペを開催し、収益金は福祉施設等への寄付や地域貢献の支援金等に使用
- 福祉施設で老人パチンコ大会「第8回ゆいまーるパチンコ大会」を開催【写真③】

■ホール

- 店内ホール内、従業員休憩所において、「沖縄県骨髄バンクを支援する会」の募金箱を設置し、募金を呼びかけ（ピータイム）
- 信号機の設置されていない店舗前の横断歩道で児童の見守り活動を実施（ピータイム壺屋）
- 沖縄マラソンの協力として、系列グループ店10店舗により、沿道でランナーへの給水、飴やバナナ等を配布（株式会社エールスペース）



助成金を贈呈【写真①】



少年野球教室を開催【写真②】



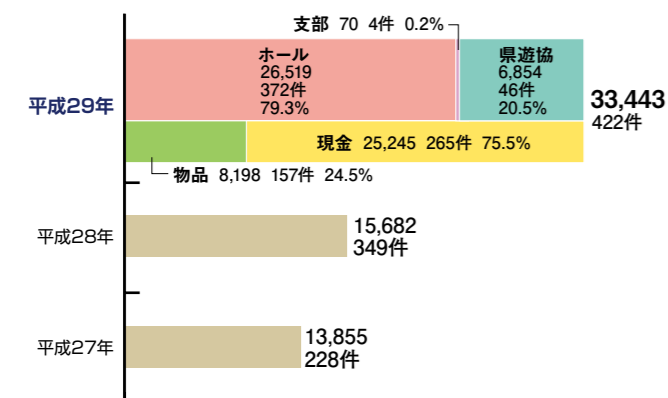
老人パチンコ大会を実施【写真③】

DATA

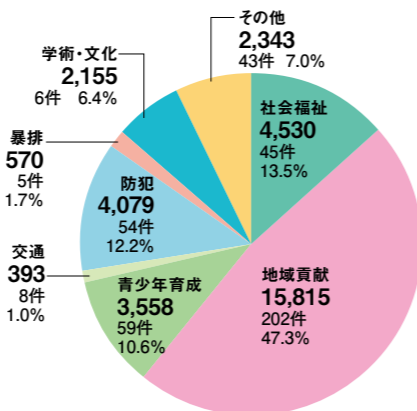
※物品は現金換算した金額です。
※グラフに記載されている金額はすべて下3ケタを四捨五入しています。したがって合計が合わない場合があります。

■年別拠出額と拠出件数及び拠出元別拠出額と割合（単位：千円）

■平成29年現金・物品の割合（単位：千円）



■平成29年分野別、拠出額と割合（単位：千円）



賛助会員一覧 (2018年7月1日現在)

株式会社ロッテ

【担当者連絡先】
担当部署：広報部
住 所：〒160-0023
東京都新宿区西新宿3-20-1
電 話：03-5388-5694
<http://www.lotte.co.jp/>

株式会社そごう・西武

【担当者連絡先】
担当部署：商事事業部
住 所：〒102-0084
東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル8階
電 話：03-6272-7643
<http://www.sogo-seibu.co.jp>

株式会社ヤクルト本社

【担当者連絡先】
担当部署：直販営業部
住 所：〒105-8660
東京都港区東新橋1-1-19
電 話：03-3574-8946
<http://www.yakult.co.jp>

株式会社廣濟堂

【担当者連絡先】
担当部署：ライフスタイルデザイン事業部
住 所：〒104-0061
東京都中央区銀座3-7-6 廣濟堂銀座ビル
電 話：03-3562-8711
<http://www.kosaido.co.jp>

ぺんてる株式会社

【担当者連絡先】
担当部署：東京営業部
住 所：〒101-0032
東京都千代田区岩本町3-6-10
電 話：03-3866-6208
<http://www.pentel.co.jp>

ジャパンネットワークシステム株式会社

【担当者連絡先】
担当部署：経営企画本部
住 所：〒110-0015
東京都台東区東上野2-24-1 トータテ上野ビル
電 話：03-5818-7743
<http://www.j-net-sys.co.jp>

全日本社会貢献団体機構 役員 [2018年7月1日現在]

■会長

 **杉浦 正健**
弁護士
元法務大臣

 **上野 公成**
都市再生研究所 理事長
元参議院議員

 **合田 康広**
全日遊連 副理事長

■名誉顧問

 **堀田 力**
前機構 会長
さわやか福祉財団 会長

 **小野 良樹**
東京都予防医学協会 理事長

 **千原 行喜**
全日遊連 副理事長


■顧問

 **野沢 太三**
全国保護司連盟 理事長
元法務大臣

 **末松 信介**
参議院議員

 **平川 容志**
全日遊連 副理事長

 **堀井 良殷**
心学明誠舎 理事長

 **田中 哲二**
中央アジア・コーカサス研究所 所長
元日本銀行 参事

 **片山 晴雄**
全日遊連 専務理事
兼常任幹事

■理事長

 **阿部 恭久**
全日遊連 理事長

 **永井 多恵子**
国際演劇協会 会長

■監事

霜鳥 敦
弁護士
高橋 孝一郎
全日遊連 顧問税理士

■筆頭理事

 **野口 昇**
日本ユネスコ協会連盟
副会長

 **松尾 守人**
パンフィック野球連盟 参与
元ロッテ 常務取締役

■参与

武智 祐治
前国際教育情報交流協会 理事長
日本美術家連盟会員

 **大野 春光**
全日遊連 副理事長
兼常任幹事

 **松本 洋**
日本国際協力システム顧問

■山下 頼充

元機構 専務理事
大西 康弘
前機構筆頭理事
前全日遊連 副理事長

 **松尾 道彦**
全日遊連 副理事長
兼常任幹事


 **吉田 雅巳**
千葉大学
教育学部教授

■常任幹事

川北 秀人
人と組織と地球のための国際研究所 代表者

■専務理事

 **榊原 光裕**
前機構 事務局長

 **脇田 直枝**
W.N コミュニケーションズ 代表

■進藤 勇治

元通産省企画官

■理事

 **赤松 広隆**
衆議院議員
衆議院 副議長

 **伊坂 重憲**
全日遊連 副理事長

■玉井 賢二

平山郁夫シルクロード美術館 副理事長

■安井 康雄

前機構 専務理事

■前田 和彦

千葉県遊協 専務理事

■毛利 秀美

機構 事務局長

■事務局

事務局長
毛利 秀美
元NHK 部長



編集後記

「社会貢献活動年間報告書 AJOSC's 2017」の発行にあたって

全日本社会貢献団体機構がスタートして13年目に入り、「社会貢献活動年間報告書2017」をお届けします。この報告書は、2017年1月から12月までの一年間に当機構と会員が実施した社会貢献活動を取りまとめたものです。

平成の時代もあと9ヵ月あまり、新元号の決定が待たれるところであります。当機構では、2018年4月より西暦表示に統一することにしました。そこで、この年間報告書も西暦表示にいたしました。

2017年を振り返れば、1月は鳥取県の大雪により自動車が立往生したこと、3月は栃木・那須町の雪崩による高校生の事故、7月は福岡県と大分県を中心とした九州北部豪雨などがありました。福岡県の久留米市と大分市を結ぶ久大本線は鉄橋が流失しました。2018年7月14日に全線で運行再開となりますが、復興にはまだ時間がかかります。最近では、ハワイやグアテマラの噴火による災害が発生しております。自然災害の多い年となりました。

「AJOSC's 2017社会貢献活動年間報告書」は、『「持続可能な社会」へ～子どもたちの健やかな成長に向けて～』をテーマとして編集しました。未来を担う存在として子どもたちが健やかに成長していくことは、まさに「持続可能な社会」づくりに欠かせない要素となります。最近、「子どもの貧困問題」が叫ばれてきております。2017年の社会貢献・社会還元の実施状況調査結果から、全国的に「子ども食堂」への支援が広がってきていることがわかりました。また、「東日本大震災・熊本地震・九州北部豪雨」の被災地の復旧・復興を支援するため、会員である都府県方面組合、支部組合、組合員ホールの皆さんが継続して一丸となって活動してききましたので、その取り組んだ活動内容を紹介しております。

近年、遊技業界を取り巻く諸情勢は極めて厳しい状態ではありますが、地域の課題を地域で解決していく姿勢が求められている中、社会貢献活動やボランティア活動に精力的に取り組んで、地域に根ざした企業として社会にその存在感を高めていくことが重要です。

この報告書は、機構の会員をはじめ、全国の図書館、自治体、警察、経済界など各方面にお送りしています。当機構や業界の社会貢献活動への理解を深めていただく一助になればと願っています。

2018年7月吉日
全日本社会貢献団体機構
事務局長 毛利秀美

AJOSC (All Japan Organization of Social Contribution) の略称です)

社会貢献活動年間報告書2017

■発行日:2018年7月19日

■編集・発行:全日本社会貢献団体機構

〒162-0844 東京都新宿区市谷八幡町16市ヶ谷見附ハイム103

http://www.ajosc.org

■編集協力:株式会社 計画制作社

■印刷:株式会社 デイリースポーツプレスセンター